



TITLE:

京都大学フィールド科学教育研究 センター年報:2003

AUTHOR(S):

京都大学フィールド科学教育研究センター

CITATION:

京都大学フィールド科学教育研究センター. 京都大学フィールド科学
教育研究センター年報:2003. 京都大学フィールド科学教育研究センタ
ー年報 2004, 1: 1-102

ISSUE DATE:

2004-12-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151782>

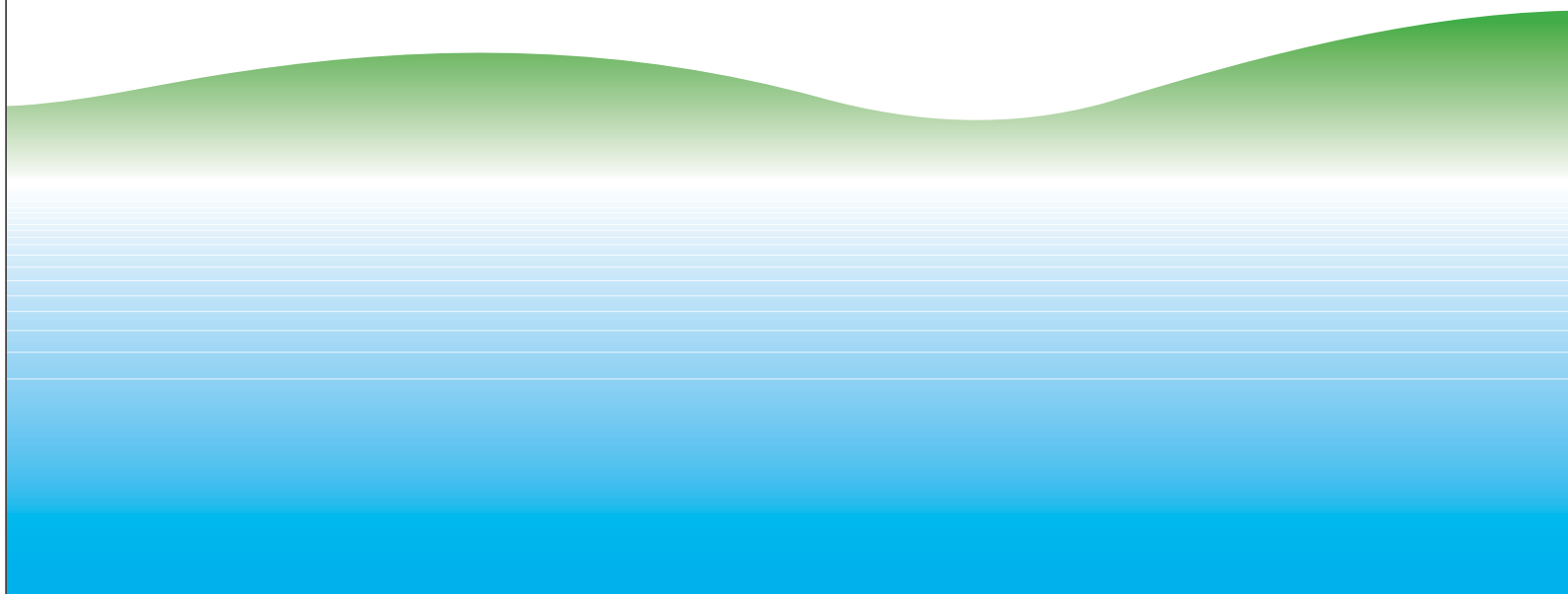
RIGHT:

年報

京都大学フィールド
科学教育研究センター

Annual Report
Field Science Education and Research Center,
Kyoto University

No.1 2003



年 報

京都大学フィールド科学教育研究センター

第1号

2003

京都大学フィールド科学教育研究センター発足にあたって

センター長 田中 克

私達が解決を迫られている地球的課題のなかで、環境保全は最も根元的な問題と考えられる。1990年代後半より、京都大学ではこの問題の解決を目的とした体系的な教育研究体制の整備が検討され、その一環としてフィールド科学教育研究センターが2003年4月1日に発足した。本センターは、これまで理学研究科、農学研究科に附属していた瀬戸臨海実験所（白浜）、演習林（京都・芦生・和歌山・徳山・北海道）、亜熱帯植物実験所（串本）ならびに水産実験所（舞鶴）を統合し、全学共同利用組織として、より広い視野とより長い視点を持った新たなフィールド科学の教育と研究の発展を目指している。各施設は、太平洋側から日本海側に至る近畿圏を中心に、北海道や山口県を含む広域に位置し、これらの統合化により、わが国を代表する温帯域のフィールド科学の拠点として機能することが期待されている。

本センターの特徴は、言うまでもなく、近畿圏を中心とする多様な地域の特性を生かした、個性豊かな現地施設より成り立っていることである。各施設とセンター本部や総合人間学部をつなぐ遠隔生態観測・遠隔講義システムの整備により、それぞれの施設で貯えられてきた豊かな知的財産が、全学共通教育を通じて、自然と環境問題への問題意識の高揚に大きな力を発揮することを意図している。この高揚したモチベーションを、現場での実地教育や、大学院生としてのフィールド研究へと発展させることにより、各施設と統合体としてのセンターの存在価値は輝きを増すことになる。同時に、学術情報メディアセンターや総合博物館との連携を進め、現場に根ざした「生」の生物圏情報を社会へ公開していくことにより、学内でもユニークな組織として独自の社会貢献が可能となる。

私達の日本は、森と海に代表される類い希な豊かな自然に恵まれている。この豊かな自然環境を大切にし、自然との共生のあり方を学ぶことを基本とした新たな教育と研究を展開し、私達自身の価値観を自己改革することが、地球環境問題の解決に不可欠と考えられる。当センターはこの理念の実現に向かって、これまで個別に進められてきた森林生物圏、人と自然の共生系としての里域生物圏、沿岸海洋生物圏に関する基礎生物学と応用生物学を森－里－海の連環学として統合し、日本発の新たな科学の創生に挑戦する。

目 次

組 織	1
教育研究部	2
研究者要覧	4
I. 研究プロジェクト	11
II. 研究成果	14
II-1 著 書	14
II-2 学協会誌等（原著論文，総説等，Proceedings等）	17
II-3 学内・所内誌等	31
II-4 一般誌等	33
II-5 報告書等	35
II-6 学会発表等	38
III. 学会と社会における活動	51
IV. 国際的活動	54
V. 教育活動	56
施設・設備	61
森林ステーション	61
里域ステーション	65
海域ステーション	67
コレクション・附属施設の紹介	74
規 程	75
資 料	94

組 織

センターの組織

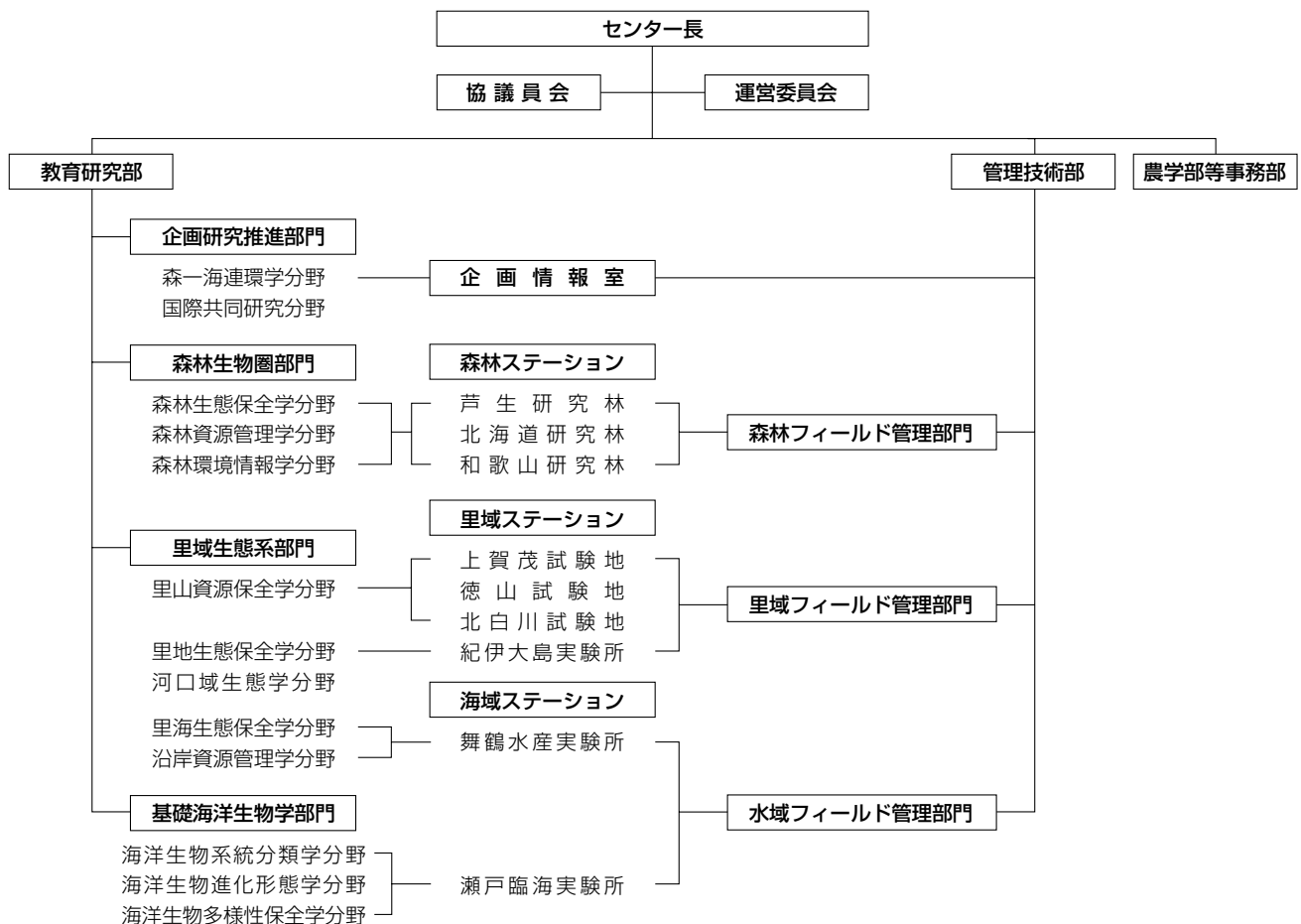
教育研究部と管理技術部からなる。センター本部は本学北部キャンパスに置かれ、森林、里域、海域の各ステーションを構成する9の施設が、太平洋側から日本海側に至る近畿圏を中心に広域に位置する。

教育研究部

企画研究推進部門、森林生物圏部門、里域生態系部門、基礎海洋生物学部門の4部門、13分野から構成されている。森－里－海の連環を軸とした教育・研究を進める。

管理技術部

企画情報室と、森林、里域、水域のフィールド管理部門、9施設からなる。フィールドの管理・運営および基礎情報の収集、情報管理、技術開発、教育研究支援を行う。



●●● 教育研究部 ●●●

企画研究推進部門

森－海連環学分野と国際共同研究分野から構成される。センターが共通の理念の下に機能的に統合化され、森－里－海連環学の創出を目指す。さらに、国際的にもオープンな組織へ自己革新するための役割を担う。とくに、来るべき環日本海時代を展望した日・中・韓の国際共同研究や、異質気候帯における比較研究のために東南アジア熱帯域における共同研究の展開を図る。

森－海連環学分野

森林域、里域および沿岸海洋域を対象として、隣接する生物圏相互の関連に焦点を当てた研究部門間の共同研究を促進する。多様な共同研究を基礎に、森－里－海の連環に関する研究プロジェクトを企画し、全国の関連研究機関との連携の下、新たなフィールド科学の創出と展開を図る。

国際共同研究分野

東アジアならびに東南アジアを主なフィールドとして、陸域と海域の連環を柱とした地球環境問題に関する国際共同研究を展開し、海外における連携拠点の構築を図る。当面は、世界規模で展開される沿岸域の生物多様性の総合調査(NaGISA・CoML)のリーダーとしての活動を通じて、国際共同研究の基盤を固める。

森林生物圏部門

本部門では、森林ならびに森林資源科学に関する大学院レベルの多岐にわたるフィールド研究ならびに教育が行われている。具体的には、森林資源情報学の統合的理解とシステム解析、自然環境や生態的構造、社会経済的状况に基づく森林景観の機能的評価と空間ゾーニング技術、持続的森林資源管理技術の体系化、林学的観点からの森林資源上の持続性と生態系としての生産性の向上、が含まれる。

森林生態保全学分野

森林生態系が示す種・個体(遺伝子)、個体群、群集、集水域、景観といった階層性に注目し、各階層における多様性とシステムの形成維持メカニズムや多様な森林生物種の生活史の解明を主とした教育研究を行う。また野外操作実験を実施し、森林生態系の保全と生物資源の持続的な再生利用のための手法の提示も目指す。

森林資源管理学分野

森林が有する環境、生物、文化としての資源の機能を評価し、これに基づく森林資源の持続的な管理理論の構築と管理技術についての実践的な教育研究を行う。特に当面の課題としては、近年、管理圧の低下から荒廃しつつある人工林・二次林の持続的管理手法の確立に向けた研究を行う。

森林環境情報学分野

持続可能な森林管理に向けて、環境影響評価基準・指標の定量化、GIS/GPSによる森林利用機能区分、LCI/LCAによる環境低負荷型生産技術、森林認証・ラベリング等を中心とした実践的・問題解決型研究を展開する。

里域生態系部門

山間部から沿岸部に至る広く、変化に富む地域は、人間の関与が様々な強度で継続しており、自然と人間の相互作用、もしくは人間と自然との共生によって生み出される特有の生態系を形成する。この生態系には、農業、林業、水産業という人間の生活を維持するために必要な基本的な生業による二次的自然が含まれるほか、居住域としての農山漁村や都市も含まれる。これらの人間が与えるインパクトを把握することは、現在の地球環境問題の本質の把握にも通じるものであり、そのために不可欠な人間－自然相互作用環の解明を多くの視点から実践し、その共生システム構築のための教育研究を行う。

里山資源保全学分野

生活圏に接する森林において、人間との相互作用により成立した生態系の特性や機構を明らかにするとともに、多面的なアプローチから、生物多様性および森林の保全、森林と人間との新たな共存に向けて幅広い教育研究を行う。

里地生態保全学分野

人里と一部に里山と里海を含む、いわゆる里地に分布する攪乱依存性植生ならびに攪乱依存性植物の起源と歴史および生態的特性を明らかにし、それらの管理保全体系ならびに持続的利用に関する考察を行う。

河口域生態学分野

陸域と海域の接点にあたる河口域は、多くの海洋生物の再生産に極めて重要な場であり、生物多様性の宝庫でもある。しかし、一方では人間の生活と生産活動の様々なインパクトが集積する場所でもある。有明海などのモデル的な河口域を対象に、資源生物学的ならびに保全生態学的教育研究を行う。

里海生態保全学分野

陸域からの影響も含めたごく沿岸域の環境特性を把握し、生息する資源生物の生産生態との関係を解明する。とくに、藻場、砂浜域、干潟域などでの仔稚魚の分布、行動、摂餌、成長、生残等を明らかにし、魚介類の成育場としての里海の役割を定性、定量的に評価する。

沿岸資源管理学分野

若狭湾西部海域をフィールドとして主要な資源生物の個体群動態を研究し、海洋環境構造や海況変動の影響を明らかにする。さらに、資源生物の分類と生活史・生態特性を調べ、それらの資源変動機構の解明に取り組む。

基礎海洋生物学部門

本部門では、主に温帯性海産無脊椎動物を材料として用い、分類学・進化生物学・発生生物学・生理生態学・生物地理学といった様々な基礎生物学的な研究教育活動を、分子レベルから生態系レベルにわたって広範囲に展開している。更にその研究フィールドを熱帯域・北方域へと地球規模に広げながら、環境生物学や保全生物学といった応用的な領域へと、その研究教育活動の内容を拡大している。

海洋生物系統分類学分野

系統分類学は、生物の多様性を認識する基本であり、1922年の瀬戸臨海実験所の創設以来、連綿と続けて来た分野である。海洋生物の多様性は非常に高く、多くの未知の事柄が残されている。このような多様性の包括的な解明を目指して教育研究を行う。

海洋生物進化形態学分野

形態観察は、生物の多様性を認識するために必須の作業である。本分野では、最新の装置を用いた精密な比較・機能形態学的研究や、分子生物学的手法による形態形成のメカニズムを解明する研究と教育を行う。

海洋生物多様性保全学分野

海洋生物の多様性を保全するために、多様な生物が環境の変動に対してどのように反応するのかを明らかにするとともに、畠島実験地における30年以上にわたる長期観察や、地球規模の環境変動を把握するための国際共同研究の中核的役割を果たす。

●●● 研究者要覧 ●●●

■ 森林生物圏部門

森林生態保全学分野



大畠 誠一（おおはた せいいち）教授

専門は森林生態保全学。多種の樹木からなる天然林および同種からなる人工林内で発生している事象を、「科学的に理解された点と点を繋ぐことで、総合的に理解できる」と思いがちです。しかし、それらの実態の多くは不明のままです。このために、森林内で発生する諸問題の予測や人間による資源利用の計画も困難な場合が多くなっています。そこで、生物やミネラル循環を介しての森林の動態等、生態学的な基礎研究をもとにして、日本の森林の理解を深め、流域から海までの相互理解に繋げていきたいと考えています。



徳地 直子（とくち なおこ）助教授

専門は森林生態系生態学。近年、森林生態系には木材生産のみならず環境創造機能など多面的な価値の発揮が期待されています。しかし、どのような機構で水源涵養を含む環境創造が生じるのかに関しては明らかになっていない部分がたくさんあります。これら森林生態系のもつ機能を定量的に評価するため、物質循環の手法を用いて解析を行なっています。また、従来注目されてこなかった森－里－海といった生態系の連鎖による機能を把握し、大きく変わりつつある生態系を正確に記述・解析することが急務であると考えています。



寄元 道徳（さきもと みちのり）助手

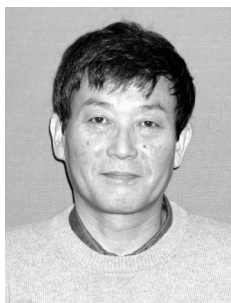
専門は森林保全生態学・樹木行動・形態学。原生的な森林（芦生のスギ・落葉広葉樹林、阿寒国立公園のアカエゾマツ林、和歌山のモミ・ツガ林）において、樹木種の生活史の中で重要となる生育段階に注目し個体群統計学的なアプローチによって植生構造の形成・維持機構や高木種の再生・維持機構の解明を進めています。また樹木種が有するモジュール性に注目し、その多様性と時・空間的な可塑性発達に関する研究も進めています。現在、高さ20m以上に達する高木に登り林冠生態研究も展開しています。

森林資源管理学分野



竹内 典之（たけうち みちゆき）教授

専門は森林資源管理学。近年、管理圧の低下から劣化の著しい人工林・二次林を対象とする森林資源の持続的な管理理論の構築と管理技術の開発に向けた調査・研究を進めています。特に、スギ・ヒノキを主とする針葉樹人工林の超長伐期施業、複層林化、針広混交林化に向けた密度管理技術体系の確立と広葉樹林育成技術の開発を当面の課題としています。また、里の在りようがどのように森林を改変してきたのか、改変していくのかを明らかにしていきたいと考えています。



安藤 信（あんどう まこと）助教授

専門は森林生態学。研究テーマは森林の更新と動態。樹木生理・養分動態や森林・樹木の環境変化に対する応答に関しても興味があります。天然林・二次林を形成する高木層の経時的変化は小さいのが一般的です。主に京都府下の芦生研究林、八丁平湿原周辺林、京都市周辺都市林、和歌山のブナ林、白浜の海岸林や、亜高山帯の南アルプスをフィールドに長期追跡調査を行っています。近年、人間生活と関係が深い京都の都市景観の回復や、内蒙古やトルコの乾燥地・半乾燥地の沙漠化、温暖化による森林の衰退、植生の変化についても他研究機関と共同研究を開始しました。



坂野上 なお（さかのうえ なお）助手

専門は林業経済学・木材流通論および消費論。森林・林業・木材に関連する社会的・経済的事象を対象に、森林と人間社会および地域社会との関連を研究しています。研究テーマは、(1)木材流通システムと住宅生産システムとの関連 (2)地域の木材を利用した住宅の生産供給システムの展開 (3)森林・木材・木造住宅に対する消費者の意識。森里海連環学において、歴史的な時間軸も含め、自然環境と人間社会との関わりについての考察は欠かせません。新しいフィールド科学の創設にあたって、社会科学分野からの貢献ができればと考えています。

森林環境情報学分野



芝 正己（しば まさみ）助教授

専門は森林利用学・林業工学。「持続可能な森林管理SFM」の三位一体の保続概念である「木材資源の持続性」・「森林環境の保全性」・「社会的便益性」を念頭に、「森林の利用と保全のバランスシート」について、①森林空間の機能区分とゾーニング法、②環境低負荷型の森林経営基盤整備システム、③LCI/LCAを導入した生産技術・機械化の体系化、④国際森林認証・ラベリング制度の運用評価、⑤CoCによる木材生産・加工・流通のロジスティクス分析、等を具体的な研究課題として検討しています。



中島 皇（なかしま ただし）講師

専門は砂防学を基とした山地森林流域の森林保全学。現在、芦生研究林の幽仙谷集水域天然林研究区をフィールドとして、樹木の成長量・枯死量、流出水量、流出土砂量、流出リター量のデータを集め、短期から長期的な物質移動を明らかにする研究を行っています。森林被害（豪雨・強風・塩風害・雪害・動物害・病虫害等）の長期的モニタリングや人間の利用が原生的な自然に与える影響やその自然（森林）が人間に与える影響についての研究を続け、自然に対する人の関わり方に提言が行えるようになりたいと考えています。

■ 里域生態系部門

里山資源保全学分野



柴田 昌三（しばた しょうぞう）助教授
（地球環境学・地球親和技術学 景観生態保全論分野（両任））

専門は里山資源保全学。長年にわたって私たちが共生し、維持してきた里山やそれを取り巻く二次的自然の環境が、かつての管理が行われなくなったことによって荒廃しています。日本全国に広がっているこのような里山は、今も生物資源を豊富に蓄えており、これをもう一度利用できるようにすることは、環境の重要性が認識されている現在、重要なことです。そのため、管理されなくなった里山を再度管理するための手法の検討、管理された里山が持っている生態系の再評価、竹林の再利用の検討、などを目的とした研究を行っています。



西村 和雄（にしむら かずお）講師

私の専門分野は固定したものではありません。こだわると自由な仕事が出来にくくなるからです。これまでもマングローブや蓄積植物（必須元素とは限らず特定の元素を特異的に吸収蓄積する植物）と植物分類との関係などやってきました。今いちばんの興味は中国大陸から飛来する黄砂の研究です。黄砂の量やこれに随伴するP・Caなどを調べています。これに一息つけば里域、いや耕地生態系の全体を捉えるパラダイムの構築を目指そうと思っています。が、最大の眼目は有機農業です。ただし、「学」にこだわりたくないで学外の活動だけに絞っています。



中西 麻美（なかにし あさみ）助手

専門は里山資源保全学。かつては里山として利用されていた上賀茂試験地は、今なお多様な生物相を有しています。しかし、周辺の開発による環境変化が上賀茂の生物相に及ぼす影響は必至と考えられ、この影響を調べる取組みを始めたところです。6、7年前までマツタケがたくさんとれた故郷の京都府北部の二次林は、今では立ち枯れたアカマツが何かを訴えかけているようにも見えます。管理放棄や環境変化に伴って変わりつつある里山の保全に向けて、広い視野と、様々な角度からの視点を持って取り組もうと考えています。まずは地道に現状の把握から、といったところ です。

里地生態保全学分野



山河 重弥（やまかわ しげや）講師

専門は里域生態保全学。近年、用排水設備の改良による乾田化、農薬の使用や施肥量の増加、大形機械の導入や栽培時期の早期化あるいは秋耕の廃止による耕種方法の変化など水田やそれを取り巻く環境は大きく様変わりしています。この水田域に生育する植物の種類や個々の種の分布状態、生育および繁殖形態およびそれらの変異性について調査しています。



梅本 信也（うめもと しんや）助手

専門は里域生態保全学。現在の研究テーマは、①自然域生態系 nature ecosystemからの里域生態系 human ecosystemの起源と系譜、②照葉樹林文化圏と黒潮文化圏における里域生物相と里域生育地の進化と保全、③自然保護区における異形要素の管理と同化、です。主な著書に、「雑草の自然史」「紀伊大島きのこガイド2000」「ヒエという植物」「照葉樹林文化論の現代的展開」「雑穀の自然史」「紀州里域植物方言集」「紀伊大島フィールドガイド－自然編－」があります。

河口域生態学分野



田中 克（たなか まさる）教授

専門は魚類初期生態学。陸域と海域の接点に当たる河口域は、多くの海の生き物たちの再生産初期過程に不可欠です。一方、陸域における人間の諸活動の影響を最も強く受ける場所でもあります。わが国では最も大規模な汽水域を形成する有明海筑後川河口域を主要なフィールドに、長期連続データの蓄積と特産種の維持機構としての‘大陸沿岸遺存生態系’を陸域（筑後川とその集水域に当たる森林域）の関連のもとに解明することを目指しています。



田川 正朋（たがわ まさと）助教授

専門は魚類生理学。特に卵から稚魚になるまでのホルモンの役割について研究を行っています。天然で広く見られるため生態学者や漁業・養殖関係者にはなじみ深い現象であっても、体内の仕組みが殆ど判っていない現象は数多くあります。アユやスズキなどの仔稚魚が川から海へ、海から川へと塩分差を克服して生きる仕組みや、ヒラメ・カレイ類の変態にみられる体の左右が違った色・形へと変化する仕組み、あるいは未受精卵中に含まれている母親由来のホルモンの役割などを、現在の研究テーマとしています。



中山 耕至（なかやま こうじ）助手

専門は魚類分子生態学・系統学。水産動物の資源管理や人為的増殖のための基礎情報として、種内の個体群構造や種間の系統関係をミトコンドリアや核のDNAマーカー等を用いて調べています。種内個体群構造研究については、初期生活史の調査研究と組み合わせることでより精度の高い推定を目指しています。主な対象種はスズキ類やヒラメ、調査水域は有明海や日本海です。水産動物の種多様性、遺伝的多様性の創出・維持機構や、近年の水辺環境改変によるそれらの変動過程にも関心を持っています。

里海生態保全学分野



山下 洋（やました よう）教授

専門は沿岸資源生態学ですが、これからは森里海連環学にも力を入れます。沿岸資源生態学の中では、とくに、ヒラメ・カレイ類、メバル類、アジ類などの沿岸魚類の初期生態や生残機構の研究、沿岸域成育場の環境と生物生産機構に関する研究、およびそれらを基礎とした栽培漁業技術開発に関する研究を行っています。森里海連環学では、森林域、里域が河川を通して沿岸域の海洋環境、生物多様性、生物生産に及ぼす影響の解明をめざしています。多様な視点から自由な発想で研究を行う大学院生募集中です。

沿岸資源管理学分野



益田 玲爾（ますだ れいじ）助教授

専門は魚類心理学。すなわち魚の行動や生態に関する諸々の疑問を、実験心理学的な手法を駆使して解明してゆく分野に取り組んでいます。たとえば、魚の群れはどのように維持され、そして機能しているか、魚の学習能力はどの程度か、といったテーマです。飼育実験を中心に研究を展開する一方で、フィールドへ出て潜水観察によりデータをとることも多くあります。資源としての海の生物を人類が持続的に利用する上で、何らかの寄与をしていきたいと考えています。



上野 正博（うえの まさひろ）助手

専門は日本海学、水産海洋学、数理生態学、沿岸海洋学。主な研究テーマは以下のようなのですが、

(1) 沿岸環境については、舞鶴湾の遡及的研究（下水道整備は里海に何をもたらしたか）、潮汐場の弱い内湾における貧酸素水塊形成機構、日本海沿岸の短期海況変動、里海GISの研究を、(2) 数理生態学については、採集個体数データの信頼性と代表性の研究を、(3) 底棲生物については、日本海底棲生物群集の形成過程、底棲生物のPopulation Explosionの研究を行っています。

■ 基礎海洋生物学部門

海洋生物系統分類学分野



久保田 信（くぼた しん）助教授

専門は刺胞動物門ヒドロ虫類の系統分類学。各種の配偶子・幼生から成体までの生活史を、フィールド調査やラボでの飼育・観察・実験により解明し、生態から分子までのあらゆる生物学的情報を取り入れて種の決定や高次分類群の系統発生・種の起源について究明しています。また、黒潮流域の生物群集の博物学的知見を各種の応用研究への基礎として克明に記録・記載しています。プランクトンネット・ドレッジ・スキンドайビングでの採集調査の他に、森里海連環の足かがりとして漂着物調査や近郊の漁港での目視調査なども実施しています。



大和 茂之（やまと しげゆき）助手

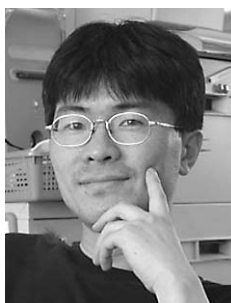
専門は動物分類学・甲殻類学。海産のヨコエビ類・フジツボ類を材料にして、「種」・「性」について調べています。海の動物には、未だに多数の新種が見つかります。これらを形態に基づいて新種として報告するとともに、海の動物における種のあり方について考えています。フジツボ類には、雌雄同体や矮雄などの多様な性が見られます。その発現する要因について調べています。また、身近なフィールドである田辺湾で、この30年間余りで見られた生物相の変遷について、その要因について調べています。

海洋生物進化形態学分野



宮崎 勝己（みやざき かつみ）助手

専門は動物系統進化学。現生の動物の中で最も多様性に富む節足動物の進化に興味を持ち、節足動物の様々な群について、比較形態・発生学的研究を行っています。現在は、現生の節足動物の中で最も basal な系統的位置にあるといわれ、節足動物の起源を考える上で鍵となると考えられるウミグモ類を主な研究材料として、分類や生活史等も含めた研究を進めていますが、今後はクマムシや動物動物といった節足動物と近縁な動物群を対象を広げ、総合生物学としての系統進化学的研究により、節足動物の起源に迫っていきたいと考えています。



和田 洋（わだ ひろし）助手

専門は進化生物学。多様な多細胞動物の形態が、どのような遺伝子レベルでの進化によってもたらされたかについて研究しています。現在特に、脊椎動物の起源について焦点を当て、骨細胞や神経堤細胞などの新しい細胞タイプの進化について、遺伝子レベルでの痕跡をホヤやナメクジウオ、ヤツメウナギから見出し、どのような遺伝子の改変が関わっていたかを調べています。また、クモヒトデや軟体動物や中生動物など新しい動物を発生学の対象として開拓していき、動物学的な問題に答えていくことも試んでいます。



白山 義久（しらやま よしひさ）教授

専門は海洋生物学。主な研究対象は1mm以下32 μ m以上の篩画分に入る小型底生生物（メイオベントス）。従来は主に1)深海メイオベントス群集の生態学的研究；2)小型の動物、特に線形動物（Nematoda）、動物動物（Kinorhyncha）、胴甲動物（Loricifera）の系統分類学的研究；3)メイオベントスの、環境指標生物としての応用などを研究してきました。しかし最近は、海洋生物に関わる地球環境問題（特に二酸化炭素問題）に取り組んでいる他、地球規模で沿岸生態系の生物多様性の地域間比較をめざす国際共同研究（NaGISAプロジェクト <http://www.nagisa.coml.jp/>）の研究代表者を務めています。



田名瀬 英朋（たなせ ひでとも）助手

専門は海洋生物学。主として和歌山県南部水域の水生動物群を対象にしています。ここ数年は、県下でも生息が確認されはじめたミドリイガイ（二枚貝、外来種）やシオマネキ類（カニ類）、陸水域の淡水海綿などについて生息状況を調査しています。また、ウニ類や貝類の長期年変動については、共同研究者とともに特定地域（畠島など）において調査を続行しています。

野外調査において採集した一部の動物は、付設の実験水槽室（白浜水族館）において飼育観察をおこなうとともに、臨海実習や学校・社会教育にも供しています。

●●● I. 研究プロジェクト ●●●

森林生物圏部門

●科学研究費

徳地直子：基盤研究(B)(2)「森林生態系の炭素・窒素蓄積メカニズムの解明とその潜在的炭素・窒素蓄積量の推定」.

徳地直子：基盤研究(B)(2)「渓流水質形成メカニズムのモデル化による森林の環境影響評価法の構築」(分担).

徳地直子：基盤研究(C)「大学演習林を核にした『ラージスケール生態系動態解析システム』構築のための企画調査(分担).

坂野上なお：基盤研究(A)(1)「木造建築物文化財の修理用資材確保に関する研究」(分担).

中島 皇：基盤研究(A)「流域生態圏における水・熱・物質循環の長期変動モニタリングと広域比較研究」(分担).

●森林生態研究プロジェクト：嵯元道德

●森林環境研究プロジェクト：徳地直子

●森林資源共存研究プロジェクト：坂野上なお

●学内研究費

大畠誠一：平成14年度教育改善推進費(学長裁量経費)「芦生研究林に発生したミズナラ枯損－現状調査と被害対策－」.

大畠誠一：平成15年度教育改善推進費(学長裁量経費)「芦生研究林に発生したミズナラ枯損－現状調査と被害対策－」.

●共同研究

徳地直子：総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明」.

●受託研究

徳地直子：「21世紀の炭素管理に向けたアジア陸域生態系の統合的炭素収支研究」環境省.

徳地直子：「乾燥地における植物の窒素利用に関する研究」鳥取大学乾燥地研究センター.

●各種研究教育助成金

芝 正己：京都大学教育研究振興財団平成15年度第1号事業海外派遣事業(短期派遣)助成.

芝 正己：IUFRO-J IUFRO 国際会議派遣助成.

●奨学寄付金

竹内典之 他：「演習林の研究及び施業運営等の助成」阪本奨学会.

芝 正己：森公弘済会森林研究助成.

徳地直子：河川財団 河川整備基金.

里域生態系部門

●科学研究費

田中 克：基盤研究(A)(2)「有明海スズキとタイリクスズキをめぐる資源生物学と保全生態学の融合」.

田中 克：基盤研究S(近畿大学農学部)「クロマグロの資源増殖に関する生物・生化学的研究」(2002-2007)(分担).

田中 克：特別研究員奨励費 (DC1)「仔稚魚消化生理の個体発生：消化管ホルモンの産生動態による解明」(2001-2003)。

田中 克：特別研究員奨励費 (外国人PD)「海産魚類の初期減耗過程：その生化学的解析」(2002-2003)。

山下 洋：基盤研究C「エコフィジオロジーモデルによるヒラメ稚魚成育場機能の南北間比較」。

山下 洋：基盤研究C「DNA分析手法を応用した甲殻類胃内容物分析による放流ヒラメ種苗の食害調査」(分担)。

山下 洋：基盤研究A「有明海スズキとタイリクスズキをめぐる資源生物学と保全生態学の融合」(分担)。

山下 洋：萌芽研究「分子生物学的手法による魚卵・仔魚捕食者の特定と初期減耗研究への試行的適用」(分担)。

山下 洋：学術創成研究「海洋生命系のダイナミクス」(分担)。

柴田昌三：基盤研究(A)(一般)生態系ミティゲーションにおけるHEPの開発(分担)。

益田玲爾：若手研究「魚類の学習能力および攻撃行動におよぼすドコサヘキサン酸の影響」。

益田玲爾：学術創成研究「海洋生命系のダイナミクス」(分担)。

田川正朋：基盤研究(C)(2)「カレイ類変態期の眼の移動－甲状腺ホルモンによる左右非対称な形態形成機構」。

田川正朋：学術創成研究(東京大学海洋研究所)「海洋生命系のダイナミクス」(2001-2004)(分担)。

上野正博：萌芽的研究「シズクガイをモデルにしたベントス個体群動態解析への分子遺伝学的手法の適用」(分担)。

中山耕至：萌芽研究「分子生物学的手法による魚卵・仔魚捕食者の特定と初期減耗研究への試行的応用」。

●共同研究

中西麻美：総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」。

●受託研究

田中 克・中山耕至：「生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の確立」独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所。

田中 克：「平成15年度日本周辺高度回遊性魚類資源調査」独立行政法人水産総合研究センター。

●奨学寄附金

山下 洋：「魚類成育場の構造と機能に関する研究助成」(財)漁港漁村建設技術研究所(2003)。

基礎海洋生物学部門

●科学研究費

白山義久：学術創成研究費「海洋生命系のダイナミクス」(分担)。

白山義久：特別研究員奨励費「日本産淡水コケムシ(外肛動物門・被喉綱)の分子系統解析」(分担)。

白山義久：特別研究員奨励費「田辺湾沿岸生態系におけるメイオ及びマクロベントス群集のエネルギー収支」(分担)。

和田 洋：基盤研究(C)(2)「ナガウニ科ウニの幼生骨格多様性の進化に関する総合的研究」。

和田 洋：特定領域研究(2)「神経冠進化の分子メカニズムの解明」。

宮崎勝己：基盤研究(C)(1)「節足動物の卵巣形態および卵形成様式の多様性と進化に関する研究」。

●受託研究

白山義久：「海洋生物に及ぼす二酸化炭素の影響に関する室内実験」財団法人地球環境産業技術研究機構。

白山義久：「インドネシア・タイにおける海産無脊椎動物の分類学的研究」独立行政法人国立環境研究所。

和田 洋：「脊椎骨形成の制御遺伝子ネットワークの系統発生学的解析」科学技術振興事業団 戦略的創造研究推進事業 さきがけ研究21「認識と形成」。

●奨学寄付金

白山義久：「NAGISAプロジェクト」アラスカフェアバンクス大学.

和田 洋：「ホヤ，ナメクジウオに探る神経冠の起源と進化」加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 研究助成金(A).

●●● II. 研究成果 ●●●

II-1 著書

森林生物圏部門

■森林生態保全学分野

徳地直子：集水域からの流出，生態学辞典，菊澤喜八郎 他 編著，2002.

■森林資源管理学分野

竹内典之：日本の森林資源，「木造都市の設計技術」（小林正美 編），コロナ社：1-28，2003.

■森林環境情報学分野

Shiba, M.: FORESTS IN SUSTAINABLE MOUNTAIN DEVELOPMENT STATE OF KNOWLEDGE REPORT FOR 2000 (Ed. M.F. Price and N. Butt). Case study: Quantitative analysis of fragmented landscape patterns resulting from timber harvesting practices in the Kyoto University Forests Japan. CABI International Publishing, London: 211-215, 2000.

大田伊久雄・梶原 晃・白石則彦・奥野 剛・尾張敏章・芝 正己・杉森正敏・富村周平・檜崎達也・西山泰三・廣嶋卓也・福田 淳：森林ビジネス革命（第6章：環境と経済の両立，第7章：持続可能な林業への私有林所有者の参入機会），築地書館：129-181，2002.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三：タケ，小方宗次・柴田昌三 共著「ネコとタケ」（現代日本生物誌9）：67-160，160pp，岩波書店，2001.

柴田昌三：里山におけるミティゲーション，「ミティゲーションー自然環境の保全・復元技術ー」（森本幸裕・亀山 章 編）：56-77，ソフトサイエンス社，2001（分担執筆）.

柴田昌三：里山再生と竹林，京都大学地球環境学研究会著「地球環境学のすすめ」：217-233，丸善株式会社，2004（分担執筆）.

西村和雄：「ぐうたら農法のすすめ」，富士通経営研修所，2001.

西村和雄：「新ぐうたら農法のすすめ」，人類文化社，2001.

■里地生態保全分野

梅本信也・種坂英次：「紀伊大島きのこガイド」，コスミック印刷，京都：54p，2000.

梅本信也・山口裕文：田舟と撻斗と龍船と，「照葉樹林文化論の現代的展開」（金子 努ら編）．北大図書刊行会，札幌：315-334，2001.

梅本信也・山口裕文・姚 雷：照葉樹林帯における一年生雑草の半栽培の風景，「照葉樹林文化論の現代的展開」（金子 努ら編），北大図書刊行会，札幌：513-528，2001.

山河重弥：栄養繁殖器官に関する調査法，「雑草科学実験法 第1章 第2節 第5項」（日本雑草会編）：57-62，2001.

梅本信也：形態などのin vivo形質における変異解析，「雑草科学実験法 第1章 第1節 第3項 雑草の種内変異実験法」（日本雑草学会編）：18-21，2001.

山口裕文・王 旻・梅本信也：中国の稲作とヒエ属植物，「ヒエという植物」（藪野友三郎 監修），全国農村教育協

会：102-112, 2001.

梅本信也：「紀州里域植物方言集」，プレスネット印刷，長岡京市：194p, 2002.

梅本信也：フィールド・ワーク，「資源生物科学概論」(京大農学部資源生物科学科編)，ショウワドウ・イープレス株式会社：270-271, 2003.

梅本信也：「紀伊大島フィールド・ガイドー自然編ー」，ユニバース印刷，長岡京市：52p, 2003.

山口裕文・梅本信也：2003. 東アジアの栽培ヒエとひえ酒への利用，「雑穀の自然史ーその起源と文化を求めてー」(山口裕文・河瀬真琴 編)，北大図書刊行会：101-113, 2003.

■河口域生態学分野

田中 克：有明海のスズキー雑種起源の特異な個体群，「有明海の生きものたち」(佐藤正典 編)，海遊舎：pp.246-247, 2000.

田中 克：川を遡る有明海のスズキ稚魚，「稚魚の自然史ー千変万化の魚類学」(千田哲資・南 卓志・木下 泉 編)：p.210-221, 北海道図書刊行会，札幌，2001.

田中 克：スズキと生物多様性ー水産資源生物学の新展開(田中 克・木下 泉 編)，水産学シリーズ131，恒星社厚生閣，東京：pp.155, 2002.

中山耕至：有明海個体群の内部構造，「スズキと生物多様性ー水産資源生物学の新展開」(田中 克・木下 泉 編)：p.140-152, 2002.

Secor, D. H., 田中 克：スズキ類の河口域依存性と生活史の進化，「スズキと生物多様性ー水産資源生物学の新展開」(田中 克・木下 泉 編)：p.140-152, 2002.

平井慈恵：浸透圧調節生理，「スズキと生物多様性ー水産資源生物学の新展開」(田中 克・木下 泉 編)：p.103-113, 2002.

日比野学：有明海産スズキの初期生活史にみられる多様性，「スズキと生物多様性ー水産資源生物学の新展開」(田中 克・木下 泉 編)：p.65-78, 2002.

太田大郎：耳石による回遊履歴追跡，「スズキと生物多様性ー水産資源生物学の新展開」(田中 克・木下 泉 編)：p.91-102, 2002.

■沿岸資源管理学分野

林 勇夫・上野正博：水圏バイオマス資源，「バイオマス・エネルギー・環境」(坂 志郎 編著)，アイビーシー刊：133-147, 2001.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

久保田信：刺胞動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.108-111, 2000.

久保田信：有櫛動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.113-115, 2000.

久保田信：有櫛動物と刺胞動物の関係，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.116-117, 2000.

山田真弓・久保田信：ヒドロ虫類，「動物系統分類学 追補版」(山田真弓 監)，中山書店，東京：pp.54-58, 2000.

山田真弓・久保田信：箱虫類，「動物系統分類学 追補版」(山田真弓 監)，中山書店，東京：pp.59-61, 2000.

山田真弓・久保田信：羽水母類，「動物系統分類学 追補版」(山田真弓 監)，中山書店，東京：pp.62-63, 2000.

■海洋生物多様性保全学分野

- 白山義久：袋形動物，「動物系統分類学 追補版」(山田真弓 監)，中山書店，東京：pp.115-124，2000.
- 白山義久：胴甲動物，「動物系統分類学 追補版」(山田真弓 監)，中山書店，東京：pp.125-129，2000.
- 白山義久：有輪動物，「動物系統分類学 追補版」(山田真弓 監)，中山書店，東京：pp.149-156，2000.
- 白山義久：顎口動物，「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(千葉県史料研究財団 編)，千葉県史料研究財団，千葉：pp.181，2000.
- 白山義久：腹毛動物，「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(千葉県史料研究財団 編)，千葉県史料研究財団，千葉：pp.182-183，2000.
- 白山義久：輪形動物，「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(千葉県史料研究財団 編)，千葉県史料研究財団，千葉：pp.184-185，2000.
- 白山義久：動吻動物，「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(千葉県史料研究財団 編)，千葉県史料研究財団，千葉：pp.186-187，2000.
- 白山義久：線形動物，「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(千葉県史料研究財団 編)，千葉県史料研究財団，千葉：pp.189-193，2000.
- 白山義久：鰓曳動物，「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(千葉県史料研究財団 編)，千葉県史料研究財団，千葉：pp.272-273，2000.
- 白山義久(編)：「無脊椎動物の多様性と系統」，裳華房，東京：327pp，2000.
- 白山義久：総合的観点からみた無脊椎動物の多様性と系統，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.2-46，2000.
- 白山義久：紐形動物は真体腔動物らしい?，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：p.130，2000.
- 白山義久：腹毛動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.131-133，2000.
- 白山義久：線形動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.142-145，2000.
- 白山義久：動吻動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.148-150，2000.
- 白山義久：胴甲動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.151-153，2000.
- 白山義久：いわゆる袋形動物の系統関係，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.157-158，2000.
- 白山義久：有輪動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.224-226，2000.
- 上原 剛・白山義久：平板動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.100-101，2000.
- 重中義信・白山義久：原生動物亜界，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.74-88，2000.
- 鈴木 實・白山義久：輪形動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.134-136，2000.
- 三浦知之・白山義久：有鬚動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.199-202，2000.
- 三浦知之・白山義久：環形動物門，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.203-211，2000.
- 三浦知之・白山義久：体節性の発達と役割，「無脊椎動物の多様性と系統」(白山義久 編)，裳華房，東京：pp.214-215，2000.
- 白山義久：まだまだ見つかる新しい生物，「海の生き物100不思議」(東京大学海洋研究所 編)，東京書籍，東京：pp.194-195，2003.
- 白山義久：海には何種類の生き物がいるの?，「海の生き物100不思議」(東京大学海洋研究所 編)，東京書籍，東京：pp.196-197，2003.
- 白山義久・小島茂明：深海の環境問題，「海の生き物100不思議」(東京大学海洋研究所 編)，東京書籍，東京：pp.214-215，2003.

白山義久：線虫の世界，「線虫の生物学」（石橋信義 編），東京大学出版会，東京：pp.3-11，2003.

白山義久：海洋・干潟の線虫，「線虫の生物学」（石橋信義 編），東京大学出版会，東京：pp.75-83，2003.

大垣俊一・田名瀬英朋：内湾における底生生物（ウニ類）の個体数密度，「理科年表（環境編）」，丸善，東京：p.267，2003.

II-2 学協会誌等（原著論文，総説等，Proceedings等）

森林生物圏部門

■森林生態保全学分野

Hirayama, Kimiko, Michinori Sakimoto: Spatial distributions of canopy and subcanopy species along a sloping topography in a cool-temperate conifer-hardwood forest in the snowy region of Japan. *Ecological Research* 18: 443-454, 2003.

Hirayama, Kimiko, Michinori Sakimoto: Regeneration of *Cryptomeria japonica* on a sloping topography in a cool-temperate mixed forest in the snowy region of Japan. *Canadian Journal of Forest Research* 33: 543-551, 2003.

Ohte, N., Tokuchi, N., Katsuyama, M., Hobara, S., Asano, Y., Koba, K.: Episodic increases in nitrate concentrations in streamwater due to the partial dieback of a pine forest in Japan: runoff generation processes control seasonality. *Hydrological Processes* 17: 237-249, 2003.

Hirobe, M., Tokuchi, N., Wachrinrat, C. and Takeda, H.: Fire history influences on the spatial heterogeneity of soil nitrogen transformation in three adjacent stands in a dry tropical forest in Thailand. *Plant and Soil* 249(2): 309-318, 2003.

Hirobe, M., Koba, K., Tokuchi, N.: Dynamics of the internal soil nitrogen cycles under moder and mull forest floor types on a slope in a *Cryptomeria japonica* D. Don plantation. *Ecological Research* 18(1): 53-64, 2003.

Koyama, L. and Tokuchi, N.: Effects of NO_3^- availability on NO_3^- use in seedlings of three woody shrub species. *Tree Physiology* 23(4): 281-288, 2003.

Kim, Su-Jin, Ohte, N., Kawasaki, M., Katsuyama, M., Tokuchi, N. and Hobara, S.: Interactive responses of dissolved sulfate and nitrate to disturbance associated with pine wilt disease in a temperate forest. *Soil Science and Plant Nutrition* 49(4): 539-550, 2003.

Koba, K., Hirobe, M., Koyama, L., Khozu, A., Tokuchi, N., Nadelhoffer, K., Wada, E. and Takeda, H.: Natural ^{15}N abundance of plants and soil N in coniferous temperate forest. *Ecosystems* 6(5): 457-469, 2003.

枚田邦宏・大畠誠一・中島 皇：大学演習林の森林教育活動。ー公開講座参加者アンケート調査結果ー。森林応用研究 9：105-109，2000.

Ris Hadi Purwanto and Oohata, S.: Estimation of the biomass and net primary production in a planted teak forest in Madiun, East Java, Indonesia. *Forest Research, Kyoto* 74: 59-68, 2002.

山本牧子・玉井重信・徳地直子・山中典和：施肥がヤナギ属4種の挿し木苗の成長に及ぼす影響。緑化工学会誌，2003.

松村光子・大手信人・小杉緑子・徳地直子・高梨 聡・松尾奈緒子・勝山正則：ヒノキ人工林における土壌-植物間の無機態窒素の移動プロセス。緑化工学会誌 29-1：301-304，2003.

崙元道德・平山貴美子：スギ若木のモジュールの形態，構造及び動態。ー林冠ギャップ下と閉鎖林冠下の比較ー。森林研究 74：53-58，2002.

森下和路・崙元道德：林冠部の違いに対する生育形の異なる低木3種（クロモジ，タンナサワフタギ，ツリガネツツジ）の地上部形態の応答。森林研究 75：1-9，2003.

■森林資源管理学分野

戸田浩人・安藤 信 他：全国大学演習林における渓流水質．日林誌 82(3)：308-312, 2000.

大澤篤弘・安藤 信・中根勇雄・登尾久嗣・川那辺三郎：スギが混交する冷温帯若齢天然生林の保育技術(I)－除伐後16年間の林分構造の推移－．森林応用研究 10-1：51-54, 2001.

高橋絵里奈・竹内典之：奈良県川上村上多古及び高原における高齢スギ人工林の現状と今後の施業指針，森林研究 73：59-66, 2001.

森下和路・安藤 信：京都市市街地北部森林のマツ枯れに伴う林相変化．森林研究 74：35-45, 2002.

嶋田俊平・竹内典之：針広混交林化したヒノキ不成績造林地の成長解析－京都府美山町の24年生ヒノキ人工林を事例として－．森林研究 75：11-17, 2003.

Yoshinori Shimizu, Makoto Ando and Fukumi Sakai: RAPD Marker Diversity Within and Among Natural Populations of Clonal Tree *Cryptomeria japonica* D. Don. Journal of Sustainable Forestry, 15(3): 75-90, 2002.

Yoshinori Shimizu, Makoto Ando and Fukumi Sakai: Clonal structure of natural population of *Cryptomeria japonica* growing at different position on slopes, detected RAPD markers. Biochemical systematics and ecology, 30: 733-748, 2002.

Christopher J. Williams, Ben A. Le Page, David R. Vann, Takeshi Tange, Hiroyuki Ikeda, Makoto Ando, Tomoko Kusakabe, Hayato Tsuzuki and Tatsuo Sweda: Structure, allometry, and biomass of plantation *Metasequoia glyptostroides* in Japan. Forest Ecology and Management, 180: 287-301, 2003.

坂野上なお：住宅用構造材に求められる品質はどのように変化したか－住宅生産システムの合理化と共に－．林業経済 633：1-14, 2001.

Erina Takahashi and Michiyuki Takeuchi: Coefficient of Variation of the Diameter Distribution in sugi (*Cryptomeria japonica*) Plantation in Yosino, Proc. Int. Seminar on new roles of Plantation Forestry Requiring Appropriate Tending and Harvesting Operations (IUFRO International Seminar 2002 Japan): 429-437, 2003.

■森林環境情報学分野

芝 正己：森林認証制度の研究的課題，森林計画学会誌 34：115-126, 2000.

早川博人・石川知明・芝 正己：森林作業単位としての森林パッチ形状の事例解析－滋賀県全域の林小班を対象として－．中部森林研究 49：141-142, 2000.

芝 正己：森林認証・ラベリング制度の国際的動向と今後の研究的課題．森林研究 72：45-56, 2000.

吉幸 朗・芝 正己・石川知明：SFM (Sustainable Forest Management) を志向した人工林収穫計画のシミュレーション解析．森林研究 74：139-148, 2002.

石川知明・石堂慶彦・山崎忠久・芝 正己・万木 豊：ボランティアのための間伐材簡易搬出法の開発，森林利用学会誌 18：259-262, 2004.

芝 正己：FSC森林認証・CoC制度の展開と森林管理・林業生産活動への影響，森林利用学会誌 18：263-266, 2004.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

森本淳子・柴田昌三・長谷川秀三・井上富実香：二次林へ導入した野生ツツジ類の初期成長－直播き，ポット苗植栽，自生苗の移植の可能性－．日本緑化工学会誌 25(4)：333-338, 2000.

大藪崇司・柴田昌三・新畑 学・森本幸裕・小橋澄治：全国10ヶ所のモデル擁壁を用いた緑化に関する実験的研究．日本緑化工学会誌 25(4)：355-360, 2000.

- SHIBATA Shozo: Expansion of monopodial type dwarf bamboo, *Shibataea kumasaca* (Zollinger) Nakai, planted on a man-made cut slope. Proceedings International Bamboo Symposium in Chaingmai, Thailand: 70-80, 2000.
- 武田一夫・柴田昌三・竹内典之・水島達朗：ミヤコザサによる寒冷地の道路法面緑化に関する研究(I) ミヤコザサの植栽後2年間の成長と環境条件の影響。日本緑化工学会誌 26(2)：117-126, 2000.
- KOMIYA Motoaki, SHIBATA, Shozo, KANZAKI Mamoru, WATANABE Hiroyuki, SANG Phan Minh and NAM Vu Thanh: Aboveground biomass of bamboo (*Dendrocalamus membranaceus*) stands in two major production areas in North Vietnam. Applied Forest Science 10(1): 55-61, 2001.
- SHIBATA Shozo: Bamboo cultivation and management in Japan. Proceedings International Seminar on Bamboo Cultivation, Processing and Utilization: 21-29, 2001.
- SAKAI Hiroyuki, SHIBATA Shozo and ANDO Yoichi: Orthogonal acoustical factors of a sound field in a bamboo forest. J. Acoust. Soc. Am. 109(6): 2824-2830, 2001.
- 境慎二郎・柴田昌三：のり面緑化における鳥類の種子散布に関する予備的研究－人工とまり木と疑似餌による鳥類の誘因効果について－。日本緑化工学会誌 27(1)：351-354, 2001.
- 大藪崇司・柴田昌三・新畑 学・森本幸裕・小橋澄治：擁壁緑化における4樹種の生育評価－植栽後3年の気象要因の影響－。日本緑化工学会誌 28(1)：61-66, 2002.
- SHIBATA Shozo: Flowering of *Phyllostachys pubescens* Mazel ex Houzeau Lehaie in the sixty-seventh year, and germination of caryopses produced at Kamigamo, Kyoto University Forests, Japan. Proceedings 5th International Bamboo Congress: 345-365, 2002.
- SHIBATA Shozo, IWANAGA Yasumasa, KAMIMURA Keiya and HAMADA Hajime: Revegetation of roadside manmade slopes with Karami fencing and burying Bambusa multiplex (Lour.) Raeushel culms. Proceedings International Workshop on the Role of Bamboo in Disaster Avoidance, http://www.inbar.int/publication/txt/INBAR_PR_11.html: 3-11, 2002.
- KOSUGI Yoshiko, SHIBATA Shozo and KOBASHI Sumiji: Parameterization of the CO₂ and H₂O gas exchange of several temperate deciduous broad-leaved trees at the leaf scale considering seasonal changes. Plant. Cell and Environment 26: 285-301, 2003.
- 柴田昌三：モウソウチクと日本人。日本緑化工学会誌 28(3)：406-411, 2003.
- 鈴木悠里・柴田昌三・田中和博・酒井徹朗：京都市市街地北部地域における活力度が高い樹木葉の色彩の評価。日本緑化工学会誌 29(1)：68-73, 2003.
- 森本淳子・柴田昌三・長谷川秀三：野生ツツジ2種の種子発芽と実生の生育立地要求性－直播きによる野生ツツジ群落復元実験－。日本緑化工学会誌 29(1)：135-140, 2003.
- 柴田昌三：緑化植物としてのササ類の特性とその利用。芝草研究 32(別2)：52-63, 2003.
- 森本淳子・柴田昌三・長谷川秀三：野生ツツジ2種の地域性種苗の生産技術。日本緑化工学会誌 29(2)：360-366, 2003.
- 戸田浩人・笹賀一郎・中西麻美・西村和雄 他：全国大学演習林における溪流水質。日本林学会誌 82(3)：308-312, 2000.
- Nakanishi, A., Shibata, H., Inokura, Y., Nakao, T., Toda, H., Sato, F., and Sasa, K.: Chemical characteristics in stem flow of Japanese cedar in Japan. Water Air and Soil Pollution 130(1-4): 308-312, 2001.
- Hobara, S., Tokuchi, N., Ohte, N., Koba, K., Katsuyama, M., Kim, S., and Nakanishi, A.: Mechanism of nitrate loss from a forested catchment following a small-scale, natural disturbance. Canadian Journal of Forest Research 31(8): 1326-1335, 2001.
- Tokuchi, N., Nakanishi, A., Wachiringrat, C., and Takeda, H.: Soil N fluxes in three contrasting dry tropical forests. The Scientific World 1(S2): 534-538, 2001.
- 牧野亜友美・森本淳子・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：都市近郊二次林における小面積伐採直後の木本植生の多様性

の変化. 日本緑化工学会誌 28(1) : 286-289, 2002.

上村恵也・柴田昌三：自生ササ類の地下茎を用いたのり面緑化試験. 日本緑化工学会誌 28(1) : 240-243, 2002.

梁川俊晃・柴田昌三・上村恵也・徳永正夫・衣笠斗基子：表土マット移植工法を用いた法面緑化に関する調査研究. 日本緑化工学会誌 29(1) : 265-268, 2003.

寺井裕美・柴田昌三：ミヤコザサの維持と樹木実生の更新にエゾシカの採食が与える影響. 森林研究 74 : 77-86, 2002.

中西麻美・平田啓一・中川智之・柴田泰征・大澤直哉・柴田昌三：上賀茂試験地における湿性降下物と林内雨のイオン濃度および流入量と窒素負荷量. 森林研究 74 : 87-97, 2002.

■里地生態保全分野

種坂英次・梅本信也：岐阜県における野生きのご類の販売と呼称：特に，地方名と標準和名の関係について. 日本応用きのご学会誌 8(2) : 83-87, 2000.

Umemoto, S.: The weed, encouraged weed and crop continuum in *Arthraxon hispidus* (Thunb.) Makino (Gramineae) of volcanic Hachijo Island in the Pacific Ocean. Proc. 18th Asian-Pacific Weed Sci. Soc. Conf. I: 100-104, 2001.

梅本信也・山口祐子・伊藤操子：変種ツルスズメノカタビラの分類学的検討. 芝草研究 30(1) : 1-5, 2001.

梅本信也・種坂英次：紀伊大島スタジイ林の巨大なシイサルノコシカケ. 南紀生物 43(1) : 27-30, 2001.

梅本信也・久保田信：紀伊半島南部におけるハマダイコンの変異. 南紀生物 43(2) : 155-158, 2001.

梅本信也・種坂英次・原田 浩：和歌山県古座川町一枚岩に岩上生する巨大なヘリトリゴケ. 南紀生物 43(2) : 98-101, 2001.

石神美智子・梅本信也・中山祐一郎・山口裕文：栽培および野生コブナグサの出穂と形態的形質に見られる変異. 雑草研究 46(3) : 194-200, 2001.

梅本信也・種坂英次：紀伊大島檜野の魚付林の歴史 - 字黒山および字棹取平三を中心に -. 近畿大学農学部紀要 34 : 165-72, 2001.

梅本信也・石神真智子・山口裕文：ミャンマー国シャン高原における陸稲の収穫とタウンヨー族の打ち付け脱穀石. 大阪府立大学大学院農学生命科学学術報告 53 : 37-40, 2001.

山河重弥：花序切除および走出枝切断がオモダカとクワイの塊茎生産に及ぼす影響. 雑草研究 47 : 79-81, 2002.

梅本信也・原田 浩：田辺湾島島の地衣類. 南紀生物 44(1) : 15-18, 2002.

伊藤操子・山口祐子・梅本信也：日本のゴルフ場におけるツルスズメノカタビラの侵入実態. 雑草研究 47(2) : 82-88, 2002.

梅本信也・山口裕文：紀伊大島におけるチガヤおよびススキの利用と保全. 大阪府立大学大学院農学生学術報 54 : 41-47, 2002.

梅本信也・種坂英次：萌芽指数▽（ナブラ）- 里山の林分をよりの確に理解するために -. 近畿大学農学部紀要 36 : 55-58, 2003.

Yamaguchi, H. K. Kawata, Y. Nakayama and S. Umemoto.: Establishment of Standard Experimental Strains tagging by Microsatellites in weedy *Echinochloa*. Proc. 19th APWSS Conf: 221-226, 2003.

梅本信也・藤井伸二：水田秋植物（Autumn paddy ephemeral）に関する一考察. 分類 3 : 47-51, 2003.

Umemoto, S.: The wild, weed, encourage weed and crop continuum in *Alpinia intermedia* Gagnep. of Zingiberaceae in Kii-Oshima Island, central Japan. Proc. 19th APWSS Conf: 242-246, 2003.

■河口域生態学分野

- Kinoshita, I., T. Seikai, M. Tanaka and K. Kuwamura: Geographic variations in dorsal and anal ray counts of juvenile Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, in the Japan Sea. *Env. Biol. Fish.*, 57: 305 - 313, 2000.
- Rønnestad, I., R. Pérez Dominguez and M. Tanaka: Ontogeny of digestive tract functionality in Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus* studied by in vivo microinjection: PH and assimilation of free amino acids. *Fish Physiol. Biochem.*, 22: 235, 2000.
- Shoji, J., T. Maehara and M. Tanaka: Managing culture of a completely piscivorous and voracious larvae, Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius*: experimental estimation of daily food consumption. *UJNR Technical Report*, 28: 89 - 95, 2000.
- Jennifer L. Specker, J. Geoffrey Eales, Masatomo Tagawa, and William A. Tyler III: Parr-smolt transformation in Atlantic salmon: Thyroid hormone deiodination in liver and brain and endocrine correlates of change in rheotactic behavior. *Can. J. Zool.*, 78: 696 - 705, 2000.
- Masatomo Tagawa, Keiko Suzuki, and Jennifer L. Specker: Incorporation and metabolism of cortisol in oocytes of Tilapia (*Oreochromis mossambicus*). *J. Exp. Zool.*, 287: 485 - 492, 2000.
- Jin Hyung Yoo, Toshio Takeuchi, Masatomo Tagawa, and Tadahisa Seikai: Effect of thyroid hormones on the stage-specific pigmentation of the Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*). *Zool. Sci.*, 17: 1101 - 1106, 2000.
- Estevez, A., T. Kaneko, T. Seikai, M. Tagawa, M. Tanaka: ACTH and MSH production in Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*) larvae fed arachidonic acid-enriched live prey. *Aquaculture* 192: 309 - 319, 2001.
- Shoji, J., T. Maehara, M. Aoyama, H. Fujimoto, A. Iwamoto, M. Tanaka: Daily ration of Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* larvae. *Fisheries Science* 67: 238 - 245, 2001.
- Kamisaka, Y., G. K. Totland, M. Tagawa, T. Kurokawa, T. Suzuki, M. Tanaka, and I. Ronnestad. Ontogeny of cholecystokinin-immunoreactive cells in the digestive tract of Atlantic halibut, *Hippoglossus hippoglossus*, larvae. *Gen. Comp. Endocrinol.* 123: 31 - 37, 2001.
- Yamashita, Y., M. Tanaka, J. M. Miller: Ecophysiology of juvenile flatfish in nursery grounds. *Journal of Sea Research* 45: 205 - 218, 2001.
- Okada, N., Y. Takagi, T. Seikai, M. Tanaka, and M. Tagawa: Asymmetrical development of bones and soft tissues during eye migration of metamorphosing Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*. *Cell Tissue Res.* 304: 59 - 66, 2001.
- Estevez, A., T. Kaneko, T. Seikai, R. M. Dorés, M. Tagawa, M. Tanaka: Ontogeny of ACTH and MSH cells in Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*) in relation to albinism. *Aquaculture* 202: 131 - 143, 2001.
- Hotta, Y., M. Aritaki, M. Tagawa, M. Tanaka: Changes in tissue thyroid hormone levels of metamorphosing spotted halibut *Verasper variegatus* reared at different temperatures. *Fisheries Science* 67: 1119 - 1124, 2001.
- Gwak, W. S. and M. Tanaka: Developmental change in RNA: DNA ratios of fed and starved laboratory-reared Japanese flounder larvae and juveniles, and its application to assessment of nutritional condition for wild fish. *Journal of Fish Biology* 59: 902 - 915, 2001.
- Tagawa M., C. L. Brown: Entry of thyroid hormones into tilapia oocyte. *Comp. Biochem. Physiol. B* 129: 605 - 611, 2001.
- 堀田又治・有瀧真人・太田健吾・田川正朋・田中 克：ホシガレイの仔稚魚期における消化系の発達と変態関連ホルモンの動態。日本水産学会誌 67(1)：40 - 48, 2001.
- 有瀧真人・太田健吾・堀田又治・田中 克：ホシガレイ飼育仔稚魚の形態発育と成長。日本水産学会誌 67(1)：58 - 66, 2001.
- 堀田又治・有瀧真人・田川正朋・田中 克：水温を変えて飼育したマガレイの変態期における甲状腺ホルモンの動態（短報）。日本水産学会誌 67(6)：1120 - 1121, 2001.
- 堀田又治・有瀧真人・田川正朋・田中 克：ホシガレイの初期生活史：飼育実験による変態・着底過程の解析 栽培技

- 研 29 : 59 - 72, 2001.
- Kellison G. T., D. B. Eggleston, M. Tanaka: Density-dependent predation and implications for stock enhancement with Japanese flounder. *J. Fish Biol.*, 60: 968 - 980, 2002.
- Hossain M. A. R., M. Tanaka, R. Masuda: Predator-prey interaction between hatchery-reared Japanese flounder juvenile, *Paralichthys olivaceus*, and sandy shore crab, *Matuta lunaris*: daily rhythms, anti-predator conditioning and starvation. *Journal of Experimental Marine Biology and Ecology*, 267: 1 - 14, 2002.
- Gwak W. S., M. Tanaka: Changes in RNA, DNA and protein contents of laboratory-reared Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* during metamorphosis and settlement. *Fisheries Science*, 68: 27 - 33, 2002.
- Hashimoto H., A. Mizuta, N. Okada, T. Suzuki, M. Tagawa, K. Tabata, Y. Yokoyama, M. Sakaguchi, M. Tanaka, H. Toyohara: Isolation and characterization of a Japanese flounder clonal line, *reversed*, which exhibits reversal of metamorphic left-right asymmetry. *Mechanisms of Development*, 111: 17 - 24, 2002.
- Shoji J., M. Aoyama, H. Fujimoto, A. Iwamoto, M. Tanaka: Susceptibility to starvation by piscivorous Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* (Scombridae) larvae at first feeding. *Fisheries Science*, 68: 59 - 64, 2002.
- Masuda R., J. Shoji, M. Aoyama, M. Tanaka: Chub mackerel larvae fed fish larvae can swim faster than those fed rotifers and *Artemia* nauplii. *Fisheries Science*, 68: 320 - 324, 2002.
- Trijuno D. D., K. Yoseda, J. Hirokawa, M. Tagawa, M. Tanaka: Effects of thyroxine and thiourea on the metamorphosis of coral trout grouper *Plectropomus leopardus*. *Fisheries Science*, 68: 282 - 289, 2002.
- Kamisaka Y., T. Kaji, S. Masuma, N. Tezuka, T. Kurokawa, T. Suzuki, G. K. Totland, I. Ronnedstad, M. Tagawa, M. Tanaka: Ontogeny of cholecystokinin-immunoreactive cells in the digestive tract of bluefin tuna, *Thunnus thynnus*, larvae. *Sarsia*, 87: 258 - 262, 2002.
- Kaji T., M. Kodama, H. Arai, M. Tagawa, M. Tanaka: Precocious development of the digestive system in relation to early appearance of piscivory in striped bonito *Sarda orientalis* larvae. *Fisheries Science*, 68: 1212 - 1218, 2002.
- Shoji J., T. Maehara, M. Tanaka: Recruitment of an inherent piscivore, Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* (Scombridae). *Fisheries Science*, 68 suppl I: 218 - 221, 2002.
- Hirai N., M. Tagawa, T. Kaneko, D. H. Secor, M. Tanaka: Freshwater adaptation in Japanese sea bass and striped bass: a comparison of chloride cell distribution during their early life history. *Fisheries Science*, 68 suppl I: 433 - 434, 2002.
- Kaji T., J. Shoji, M. Aoyama, M. Tanaka: Highly specialized development of the digestive system in piscivorous scombrid larvae. *Fisheries Science*, 68 suppl I: 884 - 887, 2002.
- Trijuno D., S. Shiozawa, K. Yoseda, M. Tagawa, M. Tanaka: Development and metamorphosis in coral trout, *Plectropomus leopardus*: morphological, biochemical and physiological aspects. *Fisheries Science*, 68 suppl I: 892 - 895, 2002.
- Kamisaka Y., T. Kurokawa, T. Suzuki, G. K. Totland, I. Ronnestad, M. Tagawa, M. Tanaka: Ontogenetic appearance and distribution of the digestive hormone, cholecystokinin (CCK) in fish. *Fisheries Science*, 68 suppl I: 963 - 964, 2002.
- Tanaka Y., O. Tominaga, T. Tsusaki, M. Tanaka: The factors influencing the growth and feeding of hatchery-raised Japanese flounder juveniles under various designs of experimental mass releases in the field. *Fisheries Science*, 68 suppl I: 1008 - 1009, 2002.
- Hashimoto H., A. Mizuta, N. Okada, T. Suzuki, M. Tagawa, K. Tabata, Y. Yokoyama, M. Sakaguchi, M. Tanaka, H. Toyohara: Japanese flounder, *reversed*, displays a randomization of metamorphic and visceral left-right asymmetries without correlation. *Fisheries Science*, 68 suppl II: 1301 - 1302, 2002.
- Dou S., R. Masuda, M. Tanaka, K. Tsukamoto: Feeding resumption, morphological changes and mortality during starvation in Japanese flounder larvae. *Journal of Fish Biology*, 60: 1363 - 1380, 2002.
- Harada S., S. R. Jeon, I. Kinoshita, M. Tanaka, M. Nishida: Phylogenetic relationships of four species of floating gobies

- (*Gymnogobius*) as inferred from partial mitochondrial cytochrome *b* gene sequences. Ichthyol. Res., 49: 324 - 332.
- 日比野学・木下 泉・太田太郎・田中 克：筑後川河口で採集されたアリアケシラウオ仔魚の形態. 魚類学雑誌 49 (2) : 103-108, 2002.
- 日比野学・太田太郎・木下 泉・田中 克：有明海湾奥部の干潟汀線域に出現する仔稚魚. 魚類学雑誌 49(2) : 109 - 120, 2002.
- 小路 淳・前原 務・武智昭彦・谷川貴之・村田憲之・田中 克：瀬戸内海中央部の燧灘において採集された仔稚魚. 日本水産学会誌 68(6) : 835 - 842, 2002.
- 小路 淳・田中 克：資料 瀬戸内海中央燧灘の破碎帯において採集された魚類稚仔. 水産増殖 50(1) : 123 - 128, 2002.
- Kai Y, Nakayama K, Nakabo T: Genetic differences among three color morphotypes of the black rockfish, *Sebastes inermis*, inferred from mt DNA and AFLP analyses. Molecular Ecology, 11: 2591 - 2598, 2002.
- Gwak, W. S., T. Tsusaki, M. Tanaka: Nutritional condition, as evaluated by RNA/DNA ratios, of hatchery-reared Japanese flounder from hatch to release. Aquaculture, 219: 503 - 514, 2003.
- Okada, N., Y. Takagi, M. Tanaka, M. Tagawa: Fine Structure of Soft and Hard Tissues Involved in Eye Migration in Metamorphosing Japanese Flounder (*Paralichthys olivaceus*). The Anatomical Record Part A, 273A: 663 - 668, 2003.
- Kaji, T., M. Kodama, H. Arai, M. Tanaka, M. Tagawa: Prevention of surface death of marine fish larvae by the addition of egg white into rearing water. Aquaculture, 224: 313 - 322, 2003.
- Dou, S., R. Masuda, M. Tanaka, K. Tsukamoto: Identification of factors affecting the growth and survival of the settling Japanese flounder larvae, *Paralichthys olivaceus*. Aquaculture, 218: 309 - 327, 2003.
- Harada, Y., I. Kinoshita, T. Kaneko, S. Moriyama, M. Tanaka, M. Tagawa: Response of Neotenic Goby, Ice Goby (*Leucopsarion petersii*), to Thyroid Hormone and Thiourea Treatments. Zoological Science, 20: 877 - 882, 2003.
- Harada, Y., S. Harada, I. Kinoshita, M. Tanaka, M. Tagawa: Thyroid Gland Development in a Neotenic Goby (Ice Goby, *Leucopsarion petersii*) and a Common Goby (Ukigori, *Gymnogobius urotaenia*) during Early Life Stages. Zoological Science, 20: 883 - 888, 2003.
- Masuda, R., J. Shoji, S. Nakayama, M. Tanaka: Development of schooling behavior in Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* during early ontogeny. Fisheries Science, 69: 772 - 776, 2003.
- Nakayama, S., R. Masuda, J. Shoji, T. Takeuchi, M. Tanaka: Effect of prey items on the development of schooling behavior in chub mackerel *Scomber japonicus* in the laboratory. Fisheries Science, 69: 670 - 676, 2003.
- Okada, N., M. Tanaka, M. Tagawa: Histological study of deformity in eye location in Japanese flounder *Paralichthys olivaceus*. Fisheries Science, 69: 777 - 784, 2003.
- Kai Y, Nakayama K, Nakabo T: Molecular phylogenetic perspective on speciation in the genus *Sebastes* (Scorpaenidae) from the Northwest Pacific and the position of *Sebastes coithin* in the subfamily Sebastinae. Ichthyological Research, 50: 239 - 244, 2003.
- Hossain, M. A. R., M. Tagawa, R. Masuda and M. Tanaka: Changes in growth performance and proximate composition in Japanese flounder during metamorphosis. J. Fish Biol., 63: 1283 - 1294, 2003.
- Nakayama, S., R. Masuda, T. Takeuchi and M. Tanaka: Effect of highly unsaturated fatty acids on escape ability from moon jelly-fish *Aurelia aurita* in red sea bream *Pagrus major* larvae. Fisheries Science, 69: 903 - 909, 2003.
- Kamisaka, Y., Y. Fujii, S. Yamamoto, T. Kurokawa, I. Ronnestad, G. K. Totland, M. Tagawa and M. Tanaka: Distribution of cholecystokinin-immunoreactive cells in the digestive tract of the larval teleost, ayu, *Plecoglossus altivelis*. Gen. Comp. Endocrinol., 134: 116 - 121, 2003.
- Okada N., M. Tanaka, M. Tagawa: Bone development during metamorphosis of the Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*): dif-

ferential responses to thyroid hormone. “The Big Fish Bang”. Proceedings of the 26th Annual Larval Fish Conference: 177 - 187, 2003.

Shoji J., M. Tanaka: Larval abundance, growth, and recruitment of Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* in the Seto Inland Sea. The Big Fish Bang (Ed. By H. Browman and A. B. Sliftesvik): 395 - 404, Bergen, Norway, 2003.

Shoji J., T. Maehara, M. Tanaka: Comparative diets and growth of two scombrid larvae, chub mackerel *Scomber japonicus* and Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius*, in the Seto Inland Sea, Japan. Ecology of Aquaculture Species and Enhancement or Stocks: Proceedings of the 30th US-Japan Meeting on Aquaculture: 93 - 103, 2003.

牧野 直・松丸 豊・田中 克：スズキ卵の発生に及ぼす水温と塩分の影響。水産増殖 51(1)：55-64, 2003.

有瀬真人・田中 克：ババガレイ飼育仔稚魚の形態発育および成長。日本水産学会誌 69(4)：602-610, 2003.

山下 洋・河村知彦・田中 克：生態の研究。日本水産学会70年史。日本水産学会誌 69(特別号)：41-50, 2003.

■里海生態保全学分野

Takami, H., T. Kawamura and Y. Yamashita: Effects of delayed metamorphosis on larval competence, and post-larval survival and growth of *Haliotis discus hannai*. Aquaculture 213: 311 - 322, 2002.

Sekino M., K. Saitoh, M. Aritaki, T. Yamada, M. Hara and Y. Yamashita: Micorosatellite-based pedigree tracing in a Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* hatchery strain: implications for hatchery management related to stock enhancement program. Aquaculture 221: 255 - 263. 2003.

Okumura Y., Y. Yamashita and S Isagawa: Sources of polychlorinated dibenzo-p-dioxines (PCDDs), polychlorinated dibenzofurans (PCDFs), and coplanar polychlorinated biphenols (Co-PCBs), and their bioaccumulation through the marine food web in Sendai Bay, Japan. J. Environ. Monit., 5(4): 610 - 618, 2003.

Asahida T., Y. Shinotsuka, Y. Yamashita, K. Saitoh, K. Hayashizaki and H. Ida: Influence of hatchery protocols on mitochondrial DNA variation in Japanese flounder juveniles. Journal World Aquaculture Soc, 34(2): 121 - 132, 2003.

Saitoh K., M. Takagaki and Y. Yamashita: Detection of Japanese flounder specific DNAs from gut contents of potential predators in the field. Fish. Sci. 69(3): 474 - 477, 2003.

Yamashita Y., O. Tominaga, H. Takami and H. Yamada: Comparison of growth, feeding and cortisol level in stone flounder *Platichthys bicoloratus* juveniles between estuarine and inshore nursery grounds. J. Fish Biol., 63(3): 617 - 630, 2003.

Takami H., D. Muraoka, T. Kawamura and Y Yamashita: When is the abalone *Haliotis discus hannai* Ino 1953 first able to use brown macroalgae?. Journal of Shellfish Research, 22(3): 795 - 800, 2003.

山下 洋・河村知彦・田中 克：生態の研究。日本水産学会誌 69(特別号)：41-50, 2003.

■沿岸資源管理学分野

Miyazaki, T., Shiozawa, S., Kogane, T., Masuda, R., Maruyama, K. and K. Tsukamoto: Developmental changees of the light intensity threshold for school formation in the striped jack *Pseudocaranx dentex*. Mar. Ecol. Prog. Ser. 192: 267 - 275, 2000.

Kuwada, H., Masuda, R., Shiozawa, S., Kogane, T., Imaizumi, K. and K. Tsukamoto: Effect of fish size, handling stresses and training procedure on the swimming behavior of hatchery-reared striped jack: implications for stock enhancement. Aquaculture 185(3-4): 245 - 256, 2000.

Masuda, R. and D.A.Ziemann: Ontogenetic changes of learning capability and stress recovery in the Pacific threadfin juveniles. J. Fish Biol. 56(5): 1239 - 1247, 2000.

Miyazaki, T., Masuda, R., Furuta, S. and K. Tsukamoto: Feeding behaviour of hatchery-reared Juveniles of the Japanese flounder following a period of starvation. Aquaculture 190(1-2): 129 - 138, 2000.

- Masuda, R. and K. Tsukamoto: Onset of association behavior in striped jack, *Pseudocaranx dentex*, in relation to floating objects. *Fish. Bull.* 98(4): 864–869, 2000.
- Masuda, R.: Frontiers of stock enhancement: A preview of the Second International Symposium on Stock Enhancement and Sea Ranching. *World Aquacul.* 32: 45–47, 2001.
- Ishizaki, Y., Masuda, R., Uematsu, K., Shimizu, K., Arimoto, M. and T. Takeuchi: The effect of dietary docosahexaenoic acid on schooling behaviour and brain development in larval yellowtail. *J. Fish Biol.* 58: 1691–1703, 2001.
- Masuda, R., Ostrowski, A. C., and D. A. Ziemann: Pachiness formation and development of schooling behavior in Pacific threadfin *Polydactylus sexfilis* reared with different dietary highly unsaturated fatty acid contents. *J. World Aquacul. Soc.* 32: 309–316, 2001.
- Hossain, M. A. R., Tanaka, M. and Masuda, R.: Predator-prey interaction between hatchery-reared Japanese flounder juvenile, *Paralichthys olivaceus*, and sandy shore crab, *Matuta lunaris*: daily rhythms, anti-predator conditioning and starvation. *The Journal of Experimental Marine Biology and Ecology* 267(1): 1–14, 2002.
- Masuda, R., Shoji, J., Aoyama, M. and Tanaka, M.: Chub mackerel larvae fed with fish larvae can swim faster than those fed with rotifers and *Artemia* nauplii. *Fisheries Science* 68(2): 320–324, 2002.
- Dou, S., Masuda, R., Tanaka, M. and Tsukamoto, K.: Feeding resumption, morphological changes and mortality during starvation in Japanese flounder larvae. *Journal of Fish Biology* 60: 1363–1380, 2002.
- 本藤 靖・益田玲爾・津崎龍雄：種苗生産したアカアマダイの巣穴形成能力の発現。栽培漁業 29(2)：85–89, 2002.
- 中村元彦・上野正博：漁獲量変動の水産依存性。水産海洋研究 66(2)：110–117, 2002.
- Masuda, R. and Ziemann, D.A.: Vulnerability of Pacific threadfin juveniles to predation by bluefin trevally and hammerhead shark: size dependent mortality and handling stress. *Aquaculture* 217: 249–257, 2003.
- Masuda, R., Keller, K., Ziemann, D.A. and Ogle, J.: Association with underwater structure in hatchery-reared and wild red snapper *Lutjanus campechanus* juveniles. *Journal of World Aquaculture Soc.* 34: 140–146, 2003.
- Dou, S., Masuda, R., Tanaka, M. and Tsukamoto, K.: Identification of factors affecting the growth and survival of the settling Japanese flounder larvae, *Paralichthys olivaceus*. *Aquaculture* 218: 309–327, 2003.
- Nakayama, S., Masuda, R., Shoji, J., Takeuchi, T. and Tanaka, M.: Effect of prey items on the development of schooling behavior in club mackerel *Scomber japonicus* in the laboratory. *Fisheries Science* 69: 670–676, 2003.
- Masuda, R., Shoji, J., Nakayama, S. and Tanaka, M.: Development of schooling behavior in Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* during the early ontogeny. *Fisheries Science* 69: 772–776, 2003.
- Nakayama, S., Masuda, R., Takeuchi, T. and Tanaka, M.: Effect of highly unsaturated fatty acids on escape ability from moon jelly-fish *Aurelia aurita* in red sea bream *Pagrus major* larvae. *Fisheries Science* 69: 903–909, 2003.
- Masuda R.: The critical role of docosahexaenoic acid in marine and terrestrial ecosystems: from bacteria to human behavior. In Browman HI and Skiftesvik AB(eds), *The Fish Big Bang-Proceeding of the 26th Annual Larval Fish Conference*, John Greig Grafisk AS, Bergen, Norway: pp.249–256, 2003.
- 益田玲爾：魚類における対捕食者行動の個体発生に関する研究。日本水産学会誌 69：547–549, 2003.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

- Kubota, S.: Parallel, pedomorphic evolutionary processes of the bivalve-inhabiting hydrozoans (Leptomedusae, Eirenidae) deduced from the morphology, life cycle and biogeography, with special reference to taxonomic treatment of *Eugymnanthea*. *Sci. Mar.*, 64

- (Supl.1): 241 - 247, 2000.
- Sasaki, K., Ueno, S., Iwanaga, S., Oshiro, N. and Kubota, S.: Some biological notes on *Lobatolampea tetragona* (Ctenophora: Lobatolampeidae) in Japan. Plankton Biol. Ecol., 48(2): 136 - 137, 2001.
- Yusa, Y., Yamato, S. and Marumura, M.: Ecology of a parasitic barnacle, *Koleolepas avis*: relationship to the hosts, distribution, left-right asymmetry and reproduction. J. Mar. Biol. Ass. U.K. 81: 781 - 788, 2001.
- Chang, C.Y., Kubota, S. and Shirayama, Y.: New marine gastrotrichs of the family Thaumastodermatidae (Gastrotricha: Macrodasyida) from Shirahama, Japan. Proc. Biol. Soc. Wash., 115(4): 769 - 781, 2002.
- Kubota, S., Iwanaga, S., Oshiro, N. and Torigoe, K.: New association of *Eugymnanthea japonica* (Hydrozoa, Leptomedusae, Eirenidae) with an oyster, *Dendrostrea sandvichensis* (Bivalvia, Ostreoida, Ostreidae), in Okinawa Island, Japan. Biol. Mag. Okinawa, 41: 51 - 54, 2003.
- Kubota, S.: A new occurrence of the medusa of the "intermedia" form of *Eutima japonica* (Hydrozoa, Leptomedusae, Eirenidae) in Okinawa Island, Japan. Biol. Mag. Okinawa, 41: 55 - 59, 2003.
- Genzano, G.N. and Kubota, S.: Synchronous mass release of mature medusae from the hydroid *Halocordyle disticha* (Hydrozoa, Halocordylidae) and experimental induction of different timing by light changes. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 39(4/6): 221 - 228, 2003.
- Kawamura, M., Ueno, S., Iwanaga, S., Oshiro, N., and Kubota, S.: The relationship between fine rings in the statolith and growth of the cubomedusa *Chiropsalmus quadrigatus* (Cnidaria: Cubozoa) from Okinawa Island, Japan. Plankton Biol. Ecol., 50(2): 37 - 42, 2003.
- 久保田信：ナガコガネグモ *Argiope bruennichii* フナムシ *Ligia exotica* を摂食．南紀生物 41 (2)：28, 2000.
- 久保田信・鳥越兼治：マツバガイ（軟体動物門，原始腹足類）の大形個体．南紀生物 42 (2)：99 - 100, 2000.
- 久保田信：森 義純・田名瀬英朋：和歌山県田辺湾に出現した大形のユウレイクラゲ（刺胞動物門，鉢虫綱）．南紀生物 42 (2)：125 - 126, 2000.
- 久保田信：和歌山県白浜町産アメフラシ（軟体動物門，後鰓類）の体色変異．南紀生物 42 (2)：139 - 140, 2000.
- 久保田信・山口寿之：多数の蔓脚類が着生したイボショウジンガニ（節足動物門，十脚類）．南紀生物，42 (2)：147 - 148, 2000.
- 坂井恵一・久保田信：能登半島で見つかったフカウラヒドラ *Fukaurahydra anthoformis* Yamada（刺胞動物，ヒドロ虫綱，オオウミヒドラ科）．のと海洋ふれあいセンター研究報告 6：1 - 7, 2000.
- 興田喜久男・久保田信・疋田 努：ニホンカナヘビとニホントカゲ（有鱗目，トカゲ亜目）の連続死．くろしお (19)：11 - 12, 2000.
- 久保田信・中口和光・郷 秋雄：豊潮丸での南西諸島産ヒドロ虫類相の調査．くろしお (19)：18 - 23, 2000.
- 久保田信：海面を滑走する淡水性アメンボ（半翅目，アメンボ科）．くろしお (19)：31 - 32, 2000.
- 久保田信：慶良間列島，阿嘉島で再び漂着したチレニアイガイ（軟体動物門，二枚貝綱）．みどりいし (11)：4, 2000.
- 久保田信・山本清彦・川勝正治：和歌山県で初めて出現した3種のコウガイビル類（扁形動物門，渦虫綱，三岐腸目）．南紀生物 43 (1)：6 - 10, 2001.
- 久保田信・土生紳吾：生きたヤクシマダカラ（前鰓類，タカラガイ科）の貝類に付着したウミサカヅキガヤ科（ヒドロ虫類，有鞘目）の群体．南紀生物 43 (1)：23 - 24, 2001.
- 久保田信：和歌山県白浜半島付近の海岸道路で最近事故死した3種の哺乳類．南紀生物 43 (1)：58, 2001.
- 今原幸光・岡本 洋・久保田信：紀伊水道東岸で定着したミドリイガイ（二枚貝綱，イガイ目）－和歌山県北部での初記録－．南紀生物 43 (1)：73 - 74, 2001.
- 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次：和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種，1976 - 2001．南紀生物 43 (2)：102 - 108,

2001.

梅本信也・久保田信：紀伊半島南部におけるハマダイコンの種内変異．南紀生物 43(2)：155-157, 2001.

淤見慶宏・久保田信：生きたフジツボ類が着生したメダカラ（軟体動物門，腹足綱，タカラガイ科）．南紀生物 43(2)：173-174, 2001.

久保田信：海面を滑走する1対の淡水性アメンボ（半翅目，アメンボ科）の追加記録．くろしお(20)：21-22, 2001.

久保田信：傘の上部に短い柄を形成したシイタケ（キシメジ科，ハラタケ目）．くろしお(20)：22-23, 2001.

久保田信：和歌山県田辺市新庄公園の排水溝に落下した動物．くろしお(20)：23-26, 2001.

鳥越兼治・久保田信・小川数也：ムツサング広島湾周辺海域（瀬戸内海）に産す．南紀生物 44(1)：53, 2002.

湊 宏・久保田信・土生紳吾：白浜町沿岸に漂着したオオクビキレガイ（腹足綱，有肺亜綱）．南紀生物 44(1)：64-65, 2002.

久保田信・小山安生：番所崎，特に“北浜”（和歌山県白浜町）へ打ち上げられた軟体動物貝殻目録(1)．南紀生物 44(1)：69-76, 2002.

久保田信・岩尾研二：慶良間列島阿嘉島沿岸で採取されたクラゲ類（刺胞動物門）．みどりいし(13)：19-22, 2002.

築地新光子・築地新チサ・久保田信：マツバガイ（軟体動物門，原始腹足類）の日本最大の野生個体．南紀生物 44(2)：106, 2002.

早川厚一郎・永井宏史・久保田信：キヒトデ（キヒトデ目，キヒトデ科）の異常個体．南紀生物 44(2)：140, 2002.

岸田拓士・久保田信：和歌山県白浜町沿岸に漂着したハクジラ類の歯．南紀生物 44(2)：155-156, 2002.

久保田信：和歌山県古座町の海岸道路で事故死したニホンテン（イタチ科）．くろしお(21)：6, 2002.

久保田信：貝殻のほぼ全体を生きたマガキ（軟体動物門，二枚貝類）で被われたヨメガカサ（軟体動物門，原始腹足類）の生貝．くろしお(21)：9, 2002.

久保田信：穂の中軸が二股に分かれた和歌山県白浜産のエノコログサ（イネ科）．くろしお(21)：29-31, 2002.

久保田信：本覚寺村貝1-35号に記録された和歌山県南部町堺港で水揚げされた軟体動物のリスト．本覚寺村貝(37)：13-18, 2002.

久保田信・田名瀬英朋：和歌山県白浜町の海岸付近におけるクマゼミの初鳴き．南紀生物 44(2)：114, 2002.

久保田信・小山安生：番所崎，特に“北浜”（和歌山県白浜町）へ打ち上げられた軟体動物貝殻目録(2)．南紀生物 44(2)：133-139, 2002.

田名瀬英朋・久保田信：和歌山県田辺湾から採集された稀種クロハコフグ（ハコフグ科，魚類）．南紀生物 44(2)：149-150, 2002.

檜山嘉郎・久保田信：和歌山県白浜町産の熱帯系ゴキブリ類3種（ゴキブリ目，ゴキブリ上科）．南紀生物 44(2)：153-154, 2002.

太田 満・久保田信：付着動物を含め貝殻の大部分を滑層で乳白色に白濁するほど厚く覆ったヤクシマダカラ（軟体動物門，腹足綱）．南紀生物 44(2)：125-126, 2002.

岩永節子・大城直雅・久保田信：日本で初めて記録されたギヤマンハナクラゲ *Timoides agassizii* (Anthomedusae, Pandeidae) の大量出現と刺胞障害．沖縄生物学会誌 41：61-66, 2003.

築地新光子・久保田信：日本で初めて確認されたベニクラゲ（刺胞動物門，花クラゲ目）の若返りとその後のポリプ群体の成長．南紀生物 45(1)：13-14, 2003.

築地新光子・久保田信：鹿児島湾に出現した多数のベニクラゲ（刺胞動物門，ヒドロ虫綱，花クラゲ目）とその若返りについて．日本生物地理学会会報 58：35-38, 2003.

奥泉和也・久保田信：日本海産ハナクラゲモドキ *Melicertum octocostatum*（軟クラゲ目，ハナクラゲモドキ科）の成熟クラゲ．日本生物地理学会会報 58：39-41, 2003.

- 久保田信：日本産の花クラゲ目と軟クラゲ目（ヒドロ虫綱）のクラゲの目録．南紀生物 45(1)：27-32, 2003.
- 久保田信：双子のマメトマト果実．くろしお(22)：23, 2003.
- 久保田信：南イタリア，レッツェ大学でヒドロ虫類（刺胞動物門）を研究－チチュウカイカイヤドリヒドラクラゲ（軟クラゲ目，エイレネクラゲ科）はベニクラゲの如く若返らず－．日伊生物学会会報(20)：11-7, 2003.
- 久保田信：和歌山県白浜町番所崎の通称“北浜”へ漂着した大形クラゲ類の季節変化．漂着物学会誌(1)：21-24, 2003.
- 久保田信：南方系植物果実複数種の和歌山県白浜町番所崎への稀な漂着記録．漂着物学会誌(1)：31-32, 2003.
- 久保田信：和歌山県白浜町臨海“北浜”に打ち上がったミドリイガイ．本覺寺杼貝(41)：15-17, 2003.
- 久保田信・的場 績：和歌山県白浜町番所崎の通称“北浜”の高潮線附近に生息する節足動物や蜘蛛形類，特にニセハマヒョウタンゴミムシダマシ（ゴミムシダマシ科）．くろしお(22)：25-26, 2003.
- 久保田信・榎山嘉郎・田名瀬英朋：番所崎，特に“北浜”（和歌山県白浜町）へ打ち上げられた魚類．くろしお(22)：31-33, 2003.
- 久保田信・水谷精一：北日本産のベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目，クラバ科）における退化後の不思議な運命．南紀生物 45(2)：107-109, 2003.
- 久保田信・小林亜玲・河原正人・上野俊士郎：瀬戸内海で初めて採集されたベニクラゲ（花クラゲ目，クラバ科）の成熟個体．南紀生物 45(2)：148-149, 2003.
- 河村真理子・Cinzia Gravili・久保田信：和歌山県田辺湾で採集された2個の口柄を有するヤセオベリア *Obelia dichotoma*（軟クラゲ目，ウミサカヅキガヤ科）の成熟クラゲ．南紀生物 45(1)：71-72, 2003.
- 岸田拓士・森阪匡通・久保田信・天野雅男：和歌山県白浜町番所崎の南浜にて発見されたハンドウイルカ *Tursiops truncatus*．漂着物学会誌(1)：25-28, 2003.
- 榎山嘉郎・久保田信・戸部博・中西弘樹：変わった型のココヤシの和歌山県白浜町番所崎への漂着記録．漂着物学会誌(1)：29-30, 2003.

■海洋生物進化形態学分野

- Manzanares, M., Wada, H., Itasaki, N., Trainor, P.A., Krumlauf, R. and Holland, P.W.H.: Conservation and elaboration of Hox gene regulation during evolution of the vertebrate head. *Nature*, 408: 854-857, 2000.
- Miyazaki, K., Ueshima, R. and Makioka, T.: Structure of the female reproductive system and oogenetic mode in a schizomid, *Schizomus sawadai* (Arachnida, Schizomida). *Invertebr. Reprod. Dev.*, 40: 1-7, 2001.
- Wada, H.: The origin of the neural crest and insights into evolution of the vertebrate face. H. Sawada (ed.), *Proceedings of the First International Symposium on the Biology of Ascidians*: pp.235-240, Springer-Verlag, 2001.
- Wada, H.: Origin and evolution of the neural crest: A hypothetical reconstruction of its evolutionary history. *Develop. Growth Differ.*, 43: 509-520, 2001.
- Wada, H. and Satoh, N.: Patterning the protochordate neural tube. *Curr. Opin. Neurobiol.*, 11: 16-21, 2001.
- Holland, P.W.H., Wada, H., Manzanares, M., Krumlauf, R. and Shimeld, S.: The origin of the neural crest. In, *Major events in early vertebrate evolution*, Taylor & Francis, London: pp.33-39, 2001.
- Miyazaki, K.: Occurrence of juvenile forms of a pycnogonid, *Ammothella biunguiculata* (Pycnogonida, Ammotheidae) in an actinian, *Entacmaea actinostoloides* (Anthozoa, Stichodactylidae). *Proc. Arthropod. Embryol. Soc. Jpn.*, 37: 43-44, 2002.
- Wada, H., Kobayashi, M., Sato, R., Miyasaka, H. and Shirayama, Y.: Dynamic insertion-deletion of introns in deuterostome EF-1a genes. *J. Mol. Evol.*, 54: 118-128, 2002.
- Miyazaki, K.: On the shape of foregut lumen in sea spiders (Arthropoda: Pycnogonida). *J. Mar. Biol. Ass. U.K.*, 82: 1037-1038,

2002.

Monn, M.H., Miyazaki, K. and Atlam A.E.: Histological and scanning electron microscopic study on the branchial crown of *Hydroides elegans* (Haswell, 1883) (Polychaeta, Serpulidae) with consideration of its functional and taxonomical value. *Proceedings of the International Conference on Biological Sciences*, 2(2): 128 - 145, 2002.

Oda, H., Wada, H., Tagawa, K., Akiyama-Oda, Y., Satoh, N., Humphreys, T., Zhang, S. and Tsukita, S.: A novel amphioxus cadherin that localizes to epithelial adherens junctions has an unusual domain organization with implication for chordate phylogeny. *Evol. Dev.*, 4: 426 - 434, 2002.

Sun, X., Okuyama, M., Miyazaki, K., Zhang, S. and Wada, H.: An ascidian RING finger gene is specifically expressed in a single cell of larval ocellus. *Gene*, 312: 111 - 116, 2003.

和田 洋：多細胞動物の発生と進化 脊椎動物への4つのステップ．蛋白質 核酸 酵素 46(10)：1340-1348, 2001.

宮崎勝己：サンゴイソギンチャクに寄生するフタツメイソウミグモの生活史．うみうし通信(37)：6-9, 2002.

和田 洋：ゲノムの多様性と形態の多様性，「ポストゲノムの分子生物学」(村上康文 編)，化学同人，京都：pp.65-78, 2003.

和田 洋：エンハンサーの進化，「ゲノムからみた生物の多様性と進化」(五條堀孝 編)，シュプリンガーフェアラーク，東京：pp.50-57, 2003.

■海洋生物多様性保全学分野

Shimanaga, M. and Shirayama, Y.: Response of benthic organisms to seasonal change of organic matter deposition in the bathyal Sagami Bay, central Japan. *Oceanologica Acta*, 23: 91 - 107, 2000.

Kitazato, H., Shirayama, Y., Nakatsuka, T., Fujiwara, S., Shimanaga, M., Kato, Y., Okada, Y., Kanda, J., Yamaoka, A., Masuzawa, T. and Suzuki, K.: Seasonal phytodetritus deposition and responses of bathyal benthic foraminiferal populations in Sagami Bay, Japan - Preliminary results from "Project Sagami". *Mar. Micropaleontol.*, 40: 135 - 149, 2000.

Shimanaga, M., Kitazato, H. and Shirayama, Y.: Seasonal patterns of vertical distribution between meiofaunal groups in relation to phytodetritus deposition in the bathyal Sagami Bay, Central Japan. *J. Oceanogr.*, 56: 379 - 387, 2000.

Fukushima, T., Shirayama, Y. and Kuboki, E.: The characteristics of deep-sea epifaunal megabenthos community two years after an artificial rapid deposition event. *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.*, 39(1): 17 - 27, 2000.

Sato, M. and Wada, K.: Resource utilization for decorating in three intertidal majid crabs (Brachyura: Majidae). *Mar. Biol.*, 137: 705 - 714, 2000.

Kato, M. and Itani, G.: *Peregrinamor gastrochaenans* (Bivalvia: Mollusca), a new species symbiotic with the thalassinidean shrimp *Upogebia carinicauda* (Decapoda: Crustacea). *Species Diversity*, 5: 309 - 316, 2000.

Sato M., Uchida, H., Itani G. and Yamashita H.: Taxonomy and life history of the scale worm *Hesperonoe hwanghaiensis* (Polychaeta: Polynoidae) newly recorded in Japan, with special reference to commensalism to a burrowing shrimp *Upogebia major*. *Zool. Sci.*, 18: 981 - 991, 2001.

Wada, H., Kobayashi, M., Sato, R., Miyasaka, H. and Shirayama, Y.: Dynamic insertion-deletion of introns in deuterostome EF-1a genes. *J. Mol. Evol.*, 54: 118 - 128, 2002.

Itani, G., Kato, M. and Shirayama, Y.: Behaviour of the shrimp ectosymbionts, *Peregrinamor ohshimai* (Mollusca: Bivalvia) and *Phyllodurus* sp. (Crustacea: Isopoda), through host ecdyses. *J. Mar. Biol. Ass. U.K.*, 82: 69 - 78, 2002.

Itani, G., Davie, P.J.F. and Takeda, M.: Taxonomic notes on *Acmaeopleura balssi* Shen, 1932 and *A. toriumii* Takeda, 1974 (Crustacea, Brachyura, Grapsidae) from Japanese waters. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A*, 28: 43 - 50, 2002.

Murakami, C., Adrianov, A. and Shirayama, Y.: Taxonomic study of the Kinorhyncha in Japan I. *Pycnophyes tubuliferus* Adrianov,

- 1989 (Kinorhyncha: Homalorhagida) from Japan. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 39(2/3): 113 - 127, 2002.
- Itani, G.: Two types of symbioses between grapsid crabs and a host thalassinidean shrimp. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 39(2/3): 129 - 137, 2002.
- Adrianov, A.V., Murakami, C. and Shirayama, Y.: Taxonomic study of the Kinorhyncha in Japan. II. *Condyloderes setoensis* n. sp. (Kinorhyncha: Cyclorhagida) from Tanabe Bay (Honshu Is.) -first representative of the genus in the Pacific ocean. Proc. Biol. Soc. Wash., 115: 205 - 216, 2002.
- Adrianov, A.V., Murakami, C. and Shirayama, Y.: Taxonomic study of the Kinorhyncha in Japan. III. *Echinoderes sensibilis* n. sp. (Kinorhyncha: Cyclorhagida) from Tanabe Bay. Zool. Sci., 19: 463 - 473, 2002.
- Adrianov, A.V., Murakami, C. and Shirayama, Y.: *Echinoderes aureus* n. sp. (Kinorhyncha: Cyclorhagida) from Tanabe Bay (Honshu Island), Japan, with a key to the genus Echinoderes. Species Diversity, 7(1): 47 - 66, 2002.
- Shirayama, Y.: Towards comprehensive understanding of impacts of marine organisms due to raised CO₂ concentration. Proceedings of the 5th International Symposium on CO₂ Fixation and Efficient Utilization of Energy: pp.177 - 181, 2002.
- Chang, C.Y., Kubota, S. and Shirayama, Y.: New marine gastrotrichs of the family Thaumastodermatidae (Gastrotricha: Macrodasyida) from Shirahama, Japan. Proc. Biol. Soc. Wash., 115(4): 769 - 781, 2002.
- Itani, G. and Kato, M.: *Cryptomya* (*Venatomya*) *truncata* (Bivalvia: Myidae): association with thalassinidean shrimp burrows and morphometric variation in Japanese waters. Venus, 61(3-4): 193 - 202, 2002.
- Kitazato, H., Nakatsuka, T., Shimanaga, M., Kanda, J., Soh, W., Kato, Y., Okada, Y., Yamaoka, A., Masuzawa, T., Suzuki, K. and Shirayama, Y.: Long-term monitoring of the sedimentary processes in the central part of Sagami Bay, Japan: rationale, logistics and overview of results. Prog. Oceanogr., 57: 3 - 16, 2003.
- Nakatsuka, T., Masuzawa, T., Kanda, J., Kitazato, H., Shirayama, Y., Shimanaga, M. and Yamaoka, A.: Particle dynamics in the deep water column of Sagami Bay, Japan. I: Origins of apparent flux of sinking particles. Prog. Oceanogr., 57: 31 - 46, 2003.
- Kato, Y., Kitazato, H., Shimanaga, M., Nakatsuka, T., Shirayama, Y. and Masuzawa, T.: 210Pb and 137Cs in sediments from Sagami Bay, Japan: sedimentation rates and inventories. Prog. Oceanogr., 57: 77 - 96, 2003.
- Shimanaga, M. and Shirayama, Y.: Sex ratio and reproductive activity of benthic copepods in bathyal Sagami Bay (1430 m), central Japan. Prog. Oceanogr., 57: 97 - 108, 2003.
- Yu, O.H., Suh, H.-L. and Shirayama, Y.: Feeding ecology of three amphipod species *Synchelidium lenorostratum*, *S. trioostegitum* and *Gitanopsis japonica* in the surf zone of a sandy shore. Mar. Ecol. Prog. Ser., 258: 189 - 199, 2003.
- Itani, G. and Uchino, T.: Burrow morphology of the goby *Taenioides cirratus*. J. Mar. Biol. Ass. U.K., 83: 881 - 882, 2003.
- 田名瀬英朋・石谷 大・中平有哉：田辺湾（和歌山県）から採集したイトヒキヨウジ（ヨウジウオ科魚類）. 南紀生物 42 (1) : 39 - 40, 2000.
- 久保田信・森 義純・田名瀬英朋：和歌山県田辺湾に出現した大形のユウレイクラゲ（刺胞動物門，鉢虫綱）. 南紀生物 42(2) : 125 - 126, 2000.
- 伊谷 行：ヒメアカイソガニ（短尾下目，イワガニ科）の伊豆・小笠原諸島における分布. 南紀生物 42(1) : 69 - 71, 2000.
- 齊藤暢宏・伊谷 行・布村 昇：日本産等脚目甲殻類目録（予報）. 富山市科学文化センター研究報告(23) : 11 - 107, 2000.
- 伊谷 行：和歌山県南部におけるヨコヤアナジャコの個体群特性. 南紀生物 43(1) : 1 - 5, 2001.
- 伊谷 行・藤原秀樹：ヘイケガニ，ウミサボテンを背負う. 南紀生物 43(1) : 47 - 49, 2001.
- 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次：和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種，1976 - 2001. 南紀生物 43(2) : 102 - 108, 2001.

- 田名瀬英朋：和歌山県田辺湾に生息するミドリイガイ（軟体動物門，イガイ科）に付着するアカフジツボ（節足動物門，フジツボ科）．南紀生物 43(2)：141-142, 2001.
- 伊谷 行：田辺湾産シオヤガイの相対成長．南紀生物 43(2)：161-162, 2001.
- 淤見慶宏・久保田信：生きたフジツボ類が着生したメダカラ（軟体動物門，腹足綱，タカラガイ科）．南紀生物 43(2)：173-174, 2001.
- 伊谷 行：巣穴の中のひそやかな多様性－アナジャコ類とともに生きる生物から－ [要旨]．日本ベントス学会誌 56：50-53, 2001.
- 田名瀬英朋・真鍋 豊：和歌山県田辺湾に出現した大型のミドリイガイ（軟体動物門，イガイ科）．南紀生物 44(1)：48-49, 2002.
- 白山義久・伊谷 結・村上知里・A.V. Adrianov：多様性の創出機構．月刊海洋，号外(29)：46-52, 2002.
- 久保田信・田名瀬英朋：和歌山県白浜町の海岸付近におけるクマゼミの初鳴き．南紀生物 44(2)：114, 2002.
- 田名瀬英朋・久保田信：和歌山県田辺湾から採集された稀種クロハコフグ（ハコフグ科，魚類）．南紀生物 44(2)：149-150, 2002.
- 久保田信・榎山嘉郎・田名瀬英朋：番所崎，特に“北浜”（和歌山県白浜町）へ打ち上げられた魚類．くろしお(22)：31-33, 2003.
- 田名瀬英朋：和歌山県田辺湾から採集された稀種クサモチアメフラシ（軟体動物門，アメフラシ科）．南紀生物 45(1)：49-50, 2003.
- 田名瀬英朋：和歌山県白浜町におけるアカギカメムシ（半翅目，カメムシ科）の採集記録．南紀生物 45(2)：143-144, 2003.
- 村上千里：動物動物に関する研究－日本における新分布域の報告－．日本海洋生物研究所年報(2003)：43-50, 2003.

II-3 学内・所内誌等

森林生物圏部門

■森林資源管理学分野

- Junji SANO, Shigenobu TAMAI and Makoto ANDO: A Preliminary Research of the Effects of Global Warming on the Species Composition and Vegetation Productivity in the Eastern, Mediterranean Region of Turkey -The Vertical Distribution of the Dominant Tree Species-. Proceedings of the International Workshop for the Research Project on the Impact of Climate Change on Agricultural Production system in Arid Areas (ICCAP): 49-52, 2003.
- Shigenobu TAMAI, Makoto ANDO, Junji SANO: Effect of climate changes on the species composition and productivity of plant communities in Cukurova Plain. Vegetation Sub-Group Progress Report, The Interim Report of ICCAP (The Research Project on the Impact of Climate Changes on Agricultural Production System in Arid Areas (ICCAP)), Research Team for ICCAP Project, Research Institute for Humanity and Nature, The Scientific and Technical Research Council of Turkey: 71-73, 2004.
- Shigenobu TAMAI, Makoto ANDO, Junji SANO: Stand structure of plant communities in Cukurova Plain. The Interim Report of ICCAP (The Research Project on the Impact of Climate Changes on Agricultural Production System in Arid Areas (ICCAP)), Research Team for ICCAP Project, Research Institute for Humanity and Nature, The Scientific and Technical Research Council of Turkey: 75-78, 2004.
- Makoto ANDO, Junji SANO and Shigenobu TAMAI: The Effects of Global Warming on the Tree Species Composition in Forests of the Eastern Mediterranean Region in Turkey -The Vertical Distribution of the Vegetation on the Basin of the Seyhan and

Ceyhan Rivers-. The Interim Report of ICCAP (The Research Project on the Impact of Climate Changes on Agricultural Production System in Arid Areas (ICCAP)), Research Team for ICCAP Project, Research Institute for Humanity and Nature, The Scientific and Technical Research Council of Turkey: 79-82, 2004.

Junji SANO, Shigenobu TAMAI and Makoto ANDO: An Interim Report on the effects of Global Warming on the Species Composition and Vegetation Productivity in the Eastern Mediterranean Region of Turkey -Species composition and environmental factors along the vertical distribution of trees in Cukurova Plain. The Interim Report of ICCAP (The Research Project on the Impact of Climate Changes on Agricultural Production System in Arid Areas (ICCAP)), Research Team for ICCAP Project, Research Institute for Humanity and Nature, The Scientific and Technical Research Council of Turkey: 83-87, 2004.

■森林環境情報学分野

Masami Shiba: Chronologie einiger Entwicklungen in Waldverwaltung und Forstwirtschaft in Japan. Manuskript zu den Lehrvorlesungen fuer Studierende der Forstwissenschaft, ETH Zuerich: 1-55, 2002.

柳 直文・中島 皇・佐藤修一・古本浩望・川村 誠：エゾシカ食害調査区の設定．京大演習林試験研究年報：17-21, 2000.

細見純嗣・神垣秀樹・中島 皇：芦生における天気予報の適中率．京大演習林試験研究年報：41-44, 2000.

馬渡和則・中島 皇：北海道演習林標茶区の気象．京大演習林試験研究年報：45-52, 2000.

馬渡和則・中島 皇：北海道演習林標茶区及び周辺の溪流水のpHとEC．京大演習林試験研究年報：21-30, 2001.

大橋健太・細見純嗣・岡部芳彦・中島 皇：芦生演習林，幽仙谷．天然林における樹木調査，－結果とプロットの設定・維持コスト－．京大演習林試験研究年報：9-13, 2002.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田泰桓・柳本 順・平井岳志・佐々木里也子・柴田昌三：ヒノキ天然林における測定結果からみた各樹高測定機器の精度・正確度および作業能率について－樹高測定機器の有用性の検討－．京都大学農学部附属演習林試験研究年報 1999年度：49-56, 2001.

柳本 順・柴田泰桓・平井岳志・橋田里也子・中川智之・柴田昌三：上賀茂試験地における天然生ヒノキの立木幹材積表の作成とその成長過程．京都大学農学部附属演習林試験研究年報 2000年度：9-17, 2002.

境慎二郎・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美・寺井厚海：伐採等の人為攪乱による鳥類の脱糞量の変化と種子供給の関係－伐採前後の比較－．演習林試験研究年報 2000年度：18-22, 2002.

■里地生態保全分野

檜山嘉郎・久保田信・白山義久・梅本信也：瀬戸臨海実験所構内植物リスト（1962-2002）瀬戸臨海実験所年報 15：30-37, 2002.

■里海生態保全学分野

栗田 豊・小向貴志・小野寺光文・佐伯光弘・富山 毅・山下 洋：東北太平洋沿岸域における天然ヒラメの新規加入量．東北底魚研究，東北区水産研究所 22：138-140, 2002.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

久保田信：田辺湾周辺海域の腔腸動物相 淡水水母目（刺胞動物門，ヒドロ虫綱）。瀬戸臨海実験所年報 13：36-37，2000.

久保田信：田辺湾周辺海域の腔腸動物相 鉢水母綱（刺胞動物門）。瀬戸臨海実験所年報 14：32-33，2001.

久保田信：田辺湾周辺海域の腔腸動物相・盤水母目・管水母目（刺胞動物門，ヒドロ虫綱）。瀬戸臨海実験所年報 15：38-39，2002.

檜山嘉郎・久保田信・白山義久・梅本信也：瀬戸臨海実験所構内植物リスト（1962-2002）。瀬戸臨海実験所年報 15：30-37，2002.

久保田信：和歌山県田辺湾およびその周辺海域から記録された有クラゲ類及び有櫛動物の目録 -生活史上でのポリプとクラゲの結合。瀬戸臨海実験所年報 16：30-35，2003.

■海洋生物多様性保全学分野

山本泰司・太田 満・田名瀬英朋：袋湾（紀伊半島南西部）より収集したヒメツバメウオと飼育経過。瀬戸臨海実験所年報 13：32-35，2000.

檜山嘉郎・久保田信・白山義久・梅本信也：瀬戸臨海実験所構内植物リスト（1962-2002）。瀬戸臨海実験所年報 15：30-37，2002.

II-4 一般誌等

森林生物圏部門

■森林環境情報学分野

中島 皇・濱本なお：いちばん東の演習林。北方林業 vol.5，No.，2000.

中島 皇：森林の多角的利用と大学演習林。森林利用学会誌 16：51-52，2001.

芝 正己：森のめぐみの連鎖を辿って，熊野林業 6：19-23，2002.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三：竹のある植物園めぐり 京都大学大学院農学研究科附属演習林上賀茂試験地。竹 75：85-88，2001.

柴田昌三：世界竹籐ネットワーク・ワークショップに参加して（一）開催の異議とトレーニング・ワークショップの内容。竹 76：20-22，2001.

柴田昌三：世界竹籐ネットワーク・ワークショップに参加して（二）見学地の感想とわが国竹産業界への示唆。竹 77：15-18，2001.

柴田昌三：エクアドルで開催された国際タケワークショップに参加して。竹 80：15-19，2002.

柴田昌三：コロンビア竹事情 (I) 自生タケ類。竹 81：18-20，2002.

柴田昌三：タケとササは木なの？草なの？。趣味悠々樹木ウォッチング：68-69，2002.

柴田昌三：コロンビア竹事情 (II) 竹林管理と経営の現状。竹 83：13-16，2003.

柴田昌三：コロンビア竹事情 (III) 竹材の利用。竹 84：18-21，2003.

柴田昌三：里山の中の新たな区別化．みどりのトラスト 40：1-2，2003．

柴田昌三：放置竹林の現状と背景．林業新知識 598：4-5，2003．

柴田昌三：荒廃竹林からの竹材生産とその他の管理．林業新知識 599：6-7，2003．

■里地生態保全分野

梅本信也：雑草と染色文化＜黒潮あらう八丈島＞－黄八丈を染めるコブナグサをめぐる－．月刊染色 *a* 233：54-56，2000．

梅本信也：和歌山県紀伊大島におけるメダケの利用．富士竹類植物園報告 45：125-129，2001．

梅本信也．紀州におけるダンチクの植物文化誌．熊野誌 47：6-22，2002．

梅本信也：紀伊大島におけるアオノクマタケランの植物文化誌．熊野誌 48：102-116，2002．

梅本信也：センダングサ種子の風散布．くろしお 21：14，2002．

梅本信也・京都大学ポケットゼミ紀伊大島植物研究グループ・伊藤操子：紀伊大島へのスイカズラ科ハクサンボクの人為移入と拡大．くろしお 21：21-25，2002．

梅本信也：ヘリトリゴケ雑記I．日本地衣学会ニュースレター 4：14，2002．

梅本信也：ヘリトリゴケ雑記II．日本地衣学会ニュースレター 7：25，2002．

梅本信也：ヘリトリゴケ雑記III．日本地衣学会ニュースレター 9：31-32，2002．

梅本信也：和歌山県紀伊大島の庭畑におけるメダケの利用．富士竹類植物園報告 46：25-30，2002．

梅本信也：モウソウチクの古導入と雑草化．富士竹類植物園報告 47：77-86，2003．

梅本信也：紀伊水道における“暖崖”（仮説）の提唱．南紀生物 45(1)：73-74，2003．

■河口域生態学分野

原田慈雄・木下 泉・西田 睦・田中 克：ウキゴリ属仔稚魚の黒色素胞分布様式における適応的側面と系統的側面．月刊海洋 24(号外)：194-202，2001．

田川正朋・中山耕至・田中 克：魚類の変態と初期生残．月刊海洋 29(号外)：161-166，2002．

■沿岸資源管理学分野

竹内俊郎・石崎靖朗・益田玲爾：ブリ仔魚の脳と行動の発達に影響を及ぼすドコサヘキサエン酸，月刊養殖 2000 年 12 月号：114-117，2000．

益田玲爾：魚の行動からさぐる資源変動機構．月刊海洋 号外(29)：167-172，2002．

Obaldo, L. G., Masuda, R.: Diet size affects shrimp feeding behavior and growth performance. Global Aquaculture Advocate. June: 67-68. 2003.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

久保田信：海洋生物を意匠に用いた琉球切手．くろしお(19)：35-36，2000．

久保田信：ナポリ・イスキアなど南イタリアでの生物学的研究を終えて．日伊生物学会会報 19：9-16，2000．

久保田信：不思議な生命体、クラゲのホットな話題．水産週報(1522)：5-7，2000．

久保田信：汝 夢見る人よ，海洋生物を知れ！．海産研News(39)：6，2000．

野崎眞澄・久保田信：フカウラヒドラ．新潟大学理学部附属臨海実験所研究概要・年次報告(30)：表紙の写真，2000．

- 檜山嘉郎・久保田信：世界のクラゲ切手 [4]. うみうし通信 (27) : 6-8, 2000.
- 檜山嘉郎・久保田信：世界のクラゲ切手 [5]. うみうし通信 (28) : 9-11, 2000.
- 久保田信：世界のクラゲ切手 [6]. うみうし通信 (30) : 9-11, 2001.
- 小野真由美・久保田信：クラゲの飼育にチャレンジー神秘の生命観を広げようー. マリンアクアリスト (19) : 68-73, 2001.
- 久保田信：和歌山県白浜町周辺は貝類の宝庫ー黒潮貝類同好会に入会してー付：会誌1-35号に記録された白浜町周辺海域産貝類リスト. 本覺寺杼貝 (36) : 25-42, 2002.
- 久保田信：日本のさまざまなジャンルの曲の歌詞に登用された腔腸動物. くろしお (21) : 19-21, 2002.
- 久保田信：軟体動物が歌詞に登用された様々なジャンルの日本の曲. 本覺寺杼貝 (37) : 44-48, 2002.
- 久保田信：研究室・研究所めぐり 41. 京都大学大学院理学研究科・附属瀬戸臨海実験所. 遺伝 56 (5) : 94-96, 口絵, 2002.
- 檜山嘉郎・久保田信：クラゲ, コインの図案に登場. うみうし通信 (35) : 裏表紙, 2002.
- 久保田信：海洋生物が歌詞に登用された日本の唄. くろしお (22) : 13-23, 2003.
- 久保田信：日本の唄の歌詞に登用されたクジラ目の曲とその心. 勇魚 (39) : 57-61, 2003.
- 久保田信：私の持っているクジラ類の本ーその1. 勇魚だより (70) : 2-3, 2003.

■海洋生物進化形態学分野

宮崎勝己：European Colloquium of Arachnology 参加記 (2). 遊絲 (6) : 8-11, 2000.

II-5 報告書等

森林生物圏部門

■森林生態保全学分野

- Tokuchi N., Hirobe M., Kondo K., Prokushkin, S. A., Matsuura Y., and Kajimoto T.: N CYCLING AT A *LARIX* STAND IN TURA, CENTRAL SIBERIA-PRELIMINARY WORK-. Proceeding of GCCA4 International Meeting. 乾燥地研究所研究報告, 2003.
- 平山貴美子・寄元道德・菊沢喜八郎：モジュールの動態に関する研究.ー京都と北海道における落葉広葉樹の葉フェノロジー比較ー. 平成11年度文部省国際共同研究経費大学等における地球圏ー生物圏国際共同研究計画（後期）「陸域生態系の地球環境変化に対する応答」成果報告書：p.127-129, 2000.
- 寄元道德・菊沢喜八郎：モジュール積算法による高木の着葉量の推定. 平成12年度文部省国際共同研究経費, 大学等における地球圏ー生物圏国際共同研究計画（後期）「陸域生態系の地球環境変化に対する応答」成果報告書：p.120-125, 2001.
- 中西麻美・中島弘起・徳地直子・武田博清：タイ国北部のチーク植栽地における有機物供給および分解様式, 平成12年度科学研究補助金 特定領域研究 (B) 「陸域生態系の地球環境変化に対する応答の研究」研究成果報告書：142-146, 2001.
- 徳地直子・中西麻美・武田博清：乾燥熱帯地域の土壌中の窒素動態, 平成12年度科学研究補助金 特定領域研究 (B) 「陸域生態系の地球環境変化に対する応答の研究」研究成果報告書：138-141, 2001.

■森林資源管理学分野

矢部勝彦・玉井重信・安藤 信・岩間憲治・韓 太平・張 文軍・谷川寅彦：半乾燥地・乾燥地における耐塩性植物の生態学特性と土壌改善の可能性－ケイリュウの耐塩性機構と土壌特性について－，日本生命財団研究助成金研究成果報告書：1-52，2003.

安藤 信：平成14年度 八丁平植生調査報告（森林植生）：1-88，2003.

■森林環境情報学分野

中島 皇：芦生の森と‘ナラ枯れ’，2004.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

柴田昌三：近ごろ私のまわりに現れた竹達の珍しいふるまい，富士竹類植物園報告 44：29-39，2000.

柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：都市近郊林の植生管理が小流域の環境および生態系に及ぼす影響（平成12年度河川環境管理財団・河川整備基金助成事業報告書）：210pp，2001.

柴田昌三：都市近郊林の植生管理が小流域の環境および生態系に及ぼす影響，第8回河川整備基金助成成果発表会概要集：4-5，2001.

柴田昌三：緑化工における郷土種の扱い－樹林とササの視点から－，第18回北海道植生建設業協会技術講演会資料：1-14，2002.

柴田昌三：第4回中国竹文化節に参加して，日本竹協会会報 3：1-2，2003.

柴田昌三：里山環境－現状と未来－，日本造園学会ランドスケープセミナー 里山生態系の調査手法と施工技术Ⅲテキスト：5-10，2003.

柴田昌三（編）：都市近郊二次林における伐採等の人為攪乱による生物相及び森林環境への影響評価（科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書）：188pp，2003.

中西麻美・中島弘起・徳地直子・武田博清：タイ国北部のチーク植栽地における有機物供給および分解様式，平成12年度科学研究補助金 特定領域研究(B)「陸域生態系の地球環境変化に対する応答の研究」研究成果報告書：142-146，2001.

徳地直子・中西麻美・武田博清：乾燥熱帯地域の土壌中の窒素動態，平成12年度科学研究補助金 特定領域研究(B)「陸域生態系の地球環境変化に対する応答の研究」研究成果報告書：138-141，2001.

中西麻美：伐採管理による地温，林内雨および溪流水の変化，平成12年度河川整備基金助成事業「都市近郊林の植生管理が小流域の環境および生態系に及ぼす影響」（代表：柴田昌三）研究成果報告書：13-18，2001.

Asami Nakanishi: Report to “Roundtable on Water and Forest” (Jap/Eng). Proceedings of Dialogue between the Ocean and the Freshwater Communities: Forests, River, Oceans and the Skies 水はめぐる，森・川・海・空…：104-108，2003.

■里地生態保全分野

梅本信也：郷土資源植物複合の適正保全するための新概念の提案，2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」：2-9，2001.

梅本信也：和歌山県土に伝承される資源植物名称，2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」：10-12，2001.

梅本信也・吉田元重：2000年度「わかやま学21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の

伝統的保全に関する研究」：13-28, 2001.

梅本信也・吉田元重・種坂英次：里山資源植物の伝統的利用と on situ 保全. 2000 年度「わかやま学 21」地域連携推進事業成果報告書「紀伊半島における郷土資源植物複合の伝統的保全に関する研究」：29-32, 2001.

梅本信也・中山祐一郎・山口裕文：採集から採種・系統育成の一般的技術と方法および問題点. “日本の重要雑草における標準系統の選抜育成. 平成 11 年度－平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書”：2-11, 2003.

■河口域生態学分野

田中 克：沿岸性魚類の初期生活史と望ましい環境, 海域・海岸線における環境創造のための計画知識, NPO 大阪湾研究センター技術者研修講座：pp.80-95, 2000.

田川正朋・田中 克：健苗性強化手法－内分泌生理に基づく強化. 平成 12 年度健苗育成技術開発委託事業研究報告：p.1-10, 2000.

山野目健・田川正朋：多回産卵魚マツカワにおける卵中甲状腺ホルモンの人為的操作の試み, および初期減耗に及ぼす効果の検討. 岩手県水産技術センター研究報告 2 巻：21-27, 2000.

田川正朋：フォトエッセイ研究室の動物達その 6 ヒラメ *Paralichthys olivaceus*. JSCE Newsletter 98：21-22, 2000.

田川正朋・田中 克：卵質に及ぼす母体由来ホルモンの影響. 平成 8～12 年度健苗育成技術開発事業 研究成果の概要（総括報告書）：pp.64-79, 2001.

田中 克：平成 11～12 年度科学研究補助金（基盤研究 B2）研究成果報告書：ヒラメ地域集団の生理生態的分化と遺伝的分化に関する研究：pp.1-120, 2001.

田川正朋：卵及び仔稚魚の適応生残に関する遺伝子機能の解明. 平成 13 年度水産育種の効率化基礎技術の開発後期報告書：p.327-331, 2002.

田中 克・中山耕至：ヒラメの遺伝的集団構造と地域的生理生態特性に関する研究. 平成 13 年度生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の開発研究成果報告書：p.52-53, 2002.

田中 克：栽培技術の根幹となる環境収容力：ヒラメ稚魚でのモデル的解析. 平成 11～13 年度科学研究補助金（基盤研究 B1）研究成果報告書：pp.169, 2002.

田中 克：交雑個体群有明海スズキの遺伝的集団構造と両側回遊性. 平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究 B2）研究成果報告書：pp.223, 2003.

■里海生態保全学分野

山下 洋・奥村 裕・鈴木敏之：仙台湾産有用魚介類における内分泌かく乱物質の生態的濃縮機構の解明. 農林水産業における内分泌かく乱物質の動態解明と作用機構に関する総合研究, 平成 13 年度研究報告：88-89, 2002.

山下 洋・栗田 豊：ヒラメ放流場の環境収容力に対応した適正放流手法の開発. 生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の開発, 平成 13 年度研究成果報告書, 独立行政法人水産総合研究センター：60-61, 2002.

高橋一生・杉崎宏哉・山下 洋・栗田 豊・神山孝史：ヒラメ（仙台湾～常盤北部沿岸域）漁場生産力変動評価・予測調査報告書（平成 13 年度）, 独立行政法人水産総合研究センター：18-23, 2002.

■沿岸資源管理学分野

上野正博：平成 12 年度漁場油濁被害防止対策事業報告書. 生物学的油濁処理技術開発・効果的利用検討事業年次報告書.（財）漁場油濁被害救済基金. 2001.

上野正博：平成13年度漁場油濁被害防止対策事業報告書. 生物学的油濁処理技術開発・効果的利用検討事業年次報告書.
(財)漁場油濁被害救済基金. 2002.

上野正博：平成14年度漁場油濁被害防止対策事業報告書. 生物学的油濁処理技術開発・効果的利用検討事業年次報告書.
(財)漁場油濁被害救済基金. 2003.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

岩永節子・大城直雅・久保田信：沖縄島における *Timoides agassizi* (刺胞動物門, ヒドロ虫綱) の大量出現. 平成11～12
年度海洋危険生物対策事業報告書, 沖縄県衛生環境研究所：34, 2001.

■海洋生物多様性保全学分野

山本泰司：フナムシの飼育展示と成長. 技術職員研修(第22, 23回)技術(研究)発表報告集(7)：37-40, 2000.

II-6 学会発表等

森林生物圏部門

■森林生態保全学分野

Tokuchi N., Hirobe M., Kondo K., Prokushkin, S. A., Matsuura Y., and Kajimoto T.: N CYCLING AT A *LARIX* STAND IN
TURA, CENTRAL SIBERIA -PRELIMINARY WORK-. GCCA4 International Meeting., 愛知県豊川市2003年11月.

Tokuchi, N., Fukushima, K., Mouri, K. and Ohte, N.: Changes of stream water chemistry after clear cutting using forest rotation.
American Geophysical Union, サンフランシスコ, 2003年12月.

Tokuchi N., Fukushima, K., Ohte, N. and Mouri, K.: Changing of stream-water chemistry after the disturbance of clear-cutting using
forest rotation as field laboratory. IUGG. 札幌市, 2003年7月.

Tokuchi, N., Fukushima, K., Mouri, K. and Ohte, N.: Changing of stream chemistry after the disturbance of clear cutting. IUGG.
Abstracts B340, 2003.

森下和路・寄元道徳：冷温帯林の優占的な低木3種の樹冠要素の可塑性. 第112回日林学術講集：8, 2001.

寄元道徳・平山貴美子・菊沢喜八郎：天然スギのモジュールの形態, 構造及び形態. -成木と若木の比較-. 第112回
日林学術講集：628, 2001.

高橋美雅・寄元道徳：自然下の光勾配に対する落葉性高木2種の樹冠と樹冠構成要素の反応. 第112回日林学術講集：
629, 2001.

平山貴美子・寄元道徳：芦生スギ・落葉広葉樹林におけるスギの実生更新の可能性. 第113回日林学術講集：568,
2002.

森下和路・寄元道徳：地形変化に対する低木3種(クロモジ, タンナサワフタギ, ツリガネツツジ)の空間分布と地上部
形態の反応. 第113回日林学術講集：574, 2002.

松山周平・寄元道徳：雌雄異株性樹木(カラスザンショウ)における開花・結実過程の性差と繁殖コスト. 第113回日林
学術講集：575, 2002.

人見清香・寄元道徳：スギ・落葉広葉樹林におけるナツエビネのフェノロジーパターンと繁殖生態学的特徴. 113回日
林学術講集：576, 2002.

- 森下和路・嵯元道德：生育系の異なる低木3種（クロモジ，タンナサワフタギ，ツリガネツツジ）の斜面傾斜への地上部の対応様式．第115回日林学術講集：417，2004.
- 高橋美雅・嵯元道德：異なる光環境に対する落葉性高木7種の若木の樹冠部の対応．第115回日林学術講集：431，2004.
- 保原 達・徳地直子・大手信人・中西麻美・勝山正則・金 秀珍・木庭啓介：マツ枯れのある森林集水域からの硝酸流出過程．第113回日林学術講集：69，2002.
- Ris Hadi Puruwant and Oohata, S.: Biomass and productivity of artificial teak forest in Indonesia. 11th Ann. Mtg. of Torical Ecological Society of Japan: 42, 2001.
- Ito, K., Ito, M., Kaku, T., Tanaka, S., Rinoie, O., and Oohata, S.: Comparison of soil from under 120woody species grown for 70years 1: Bioassay. Abstracts of World Congress on Allelopathy 3: 196, 2002.
- Ito, K., Ito, M., Kaku, T., Tanaka, S., Rinoie, O., and Oohata, S.: Comparison of soil from under 120woody species grown for 70years 2: Effects on floor vegetation. Abstracts of World Congress on Allelopathy 3: 197, 2002.
- Ito, K., Ito, M., Kaku, T., Rinoie, O., and Oohata, S.: Trees may control weeds around their trunks in non-competitive manners. Abstracts of WSSA 43: 19-20, 2003.
- 毛利浩一・西村和雄・大畠誠一：スギ林の皆伐および再造林後の経過年数に伴う土壌水・渓流水の成分変動．第112回日林学術講集：222，2001.
- 人見清香・中島 皇・大畠誠一：天然林流域から流出するリター量．第113回日林学術講集：616，2001.
- 中島 皇・大畠誠一・竹内典之・山中典和・酒井徹朗：芦生幽仙谷天然林の動態(1)．－大面積調査区における6年間の枯死量と成長量－．第113回日林学術講集：596，2002.
- 中島 皇・大畠誠一・人見清香：天然林からの流出物(3)．－平年の流出リター量と流出土砂量－．砂防学会研究発表概要集：260-261，2002.

■森林資源管理学分野

- 高橋絵里奈・竹内典之：東吉野村における永代木施業(II)，第111回日林学術講集：152-153，2000.
- 高橋絵里奈・竹内典之：東吉野村における永代木施業(III)，第112回日林学術講集：81，2001.
- 高橋絵里奈・竹内典之：東吉野村におけるスギ人工林の密度管理－間伐直後の林分のD-H関係－，第113回日林学術講集：25，2002.
- 松山知恵・竹内典之：11年生ミズメ人工林の林分構造と現存量，第113回日林学術講集：28，2002.
- 嶋田俊平・竹内典之：ヒノキ不成績造林地におけるヒノキと侵入広葉樹の成長解析－京都府美山町の24年生ヒノキ人工林を事例として－，第113回日林学術講集：29，2002.
- 中島 皇・大畠誠一・竹内典之・山中典和・酒井徹朗：芦生幽仙谷天然林の動態(I)－大面積調査区における6年間の枯死量と生長量－，第113回日林学術講集：596，2002.
- 松山知恵・竹内典之：若齢広葉樹人工林の現存量，第114回日林学術講集：61，2003.
- 高橋絵里奈・竹内典之：長伐期による高品質大径材生産のための直径管理，第114回日林学術講集：289，2003.
- 坂野上なお・兼友素子：木造在来工法住宅の選択プロセスと工法イメージ．林業経済学会2002年度秋季大会，2002年11月，京都．
- 大澤篤弘・安藤 信・川那辺三郎：スギが混交する冷温帯若齢天然生林の保育技術(II)．第111回日林学術講集：151，2000.3.
- 清水良訓・安藤 信・酒井富久美・川那辺三郎：RAPD-PCRによるスギ伏条繁殖パターンの検討．第111回日林学術講集：195，2000.3.

- 太田志乃・安藤 信：暖温帯構成樹種のマツ枯れ後の成長特性．第112回日林学術講集：29，2001.3.
- 玉井重信・矢部勝彦・安藤 信・韓 太平・張 文軍・王 林和：塩生植物，木茎柳の群落構造．第112回日林学術講集：43，2001.3.
- 小林達明・手嶋茂晴・山中典和・玉井重信・山倉拓夫・安藤 信・フェルナンド ペレイラ デアシス・アントニオ ロベルト リスボン デパウラ：ブラジル，リオ・グランデ・ド・ノルテ州パウ・ドス・フェロス村の土地利用とカーティンガー植生景観の関係．日熟生態会講：11，71，2001.6.
- 安藤 信・J. P. Kimmins・N. Robinson・M. Tsze：カナダ・BC州の海岸性ダグラスファー高齢二次林におけるヘムロック稚樹の更新状況．第114回日林学術講集：529，2003.3.
- 岩間憲治・矢部勝彦・玉井重信・安藤 信：塩類集積地の土壌環境と耐塩性植物の生態学的特性(1)－人工群落における一事例－．平成15年度農業土木学会講演要旨集：894-895，2003.7.
- 金子隆之・モンドリ谷研究グループ：芦生モンドリ谷16ha調査区と長期大面積研究．第115回日林学術講集：360，2004.3.
- 安藤 信・金子隆之・山崎理正・高柳 敦・山中典和・長谷川尚史・酒井徹朗・金子有子・大島誠一・竹内典之：芦生モンドリ谷集水域天然林16haの10年間の動態－スギが混交する冷温帯下部天然林の地形による変化－．第115回日林学術講集：446，2004.3.
- 岡田泰明・呉 初平・清水良訓・安藤 信：芦生モンドリ谷集水域上部の林相区分－スギが混交する冷温帯天然林における大面積調査地を用いて－．第115回日林学術講集：456，2004.3.

■森林環境情報学分野

- 中島 皇・大島誠一・竹内典之・山中典和・酒井徹朗：芦生幽仙谷天然林の動態(I)－大面積調査区における6年間の枯死量と生長量－，第113回日林学術講集：596，2002.
- 芝 正己・吉幸 朗・石川知明：持続可能な森林管理SFMのための空間配置と機能評価(I)－収穫計画と保全計画のリンク：概念と枠組み－，第112回日林学術講集：155-156，2001.
- 吉幸 朗・芝 正己・石川知明：持続可能な森林管理SFMのための空間配置と機能評価(II)－公社造林地をモデルとした解析事例－，第112回日林学術講集：157-158，2001.
- 稲葉 滋・ハンス・ルドルフ・ハイニマン・芝 正己：急傾斜地における林道開設のための岩掘削量予測モデル，第112回日林学術講集：237，2001.
- 石川知明・芝 正己：画像解析による空中写真からの詳細な林分情報抽出の試み，第112回日林学術講集：531，2001.
- Masami Shiba and Hans R. Heinimann: Effect of existing forest certification approaches on alternative silvicultural and harvesting strategies of plantation forests: opportunities or constrains to identifying the adaptive technical benchmark or thresholds on ground level practices?, Abstracts of International Seminar on New Roles of Plantation Forestry Requiring Appropriate Tending and Harvesting Operations: Abstracts of Presentation: 11 - 12, 2002.
- Akira Yoshikou, Masami Shiba and Tomoaki Ishikawa: A GIS-based interactive spatial decision support system for SFM-oriented alternative forest harvesting strategies in plantation forestry, Abstracts of International Seminar on New Roles of Plantation Forestry Requiring Appropriate Tending and Harvesting Operations: Abstracts of Presentation: 17 - 18, 2002.
- Masami Shiba: Effect of Ongoing Forest Certification Approaches on SFM-Oriented Management Strategies of Plantation Forests: Opportunities or constrains?, Proceeding of International Seminar on New Roles of Plantation Forestry Requiring Appropriate Tending and Harvesting Operations: Proceeding of Presentation: 96 - 107, 2003.
- Akira Yoshikou, Masami Shiba, and Tomoaki Ishikawa: A GIS-based interactive spatial decision support system for SFM-oriented alternative forest harvesting strategies in plantation forestry, Proceeding of International Seminar on New Roles of Plantation

- Forestry Requiring Appropriate Tending and Harvesting Operations: Proceeding of Presentation: 144 - 159, 2003.
- Masami Shiba: A GIS-based interactive Spatial Decision Support System (SDSS) for SFM-oriented alternative forest harvesting strategies in mountainous terrain, Proceeding of Austro 2003: High Tech Forest Operations for Mountainous Terrain: 1 - 10, 2003.
- 芝 正己・牧 大介：森林認証と森林利用・生産技術の連環性－技術への新たな要求－，第115回日林学術講集：109.
- 石川知明・石堂慶彦・山崎忠久・芝 正己・万木 豊：ボランティアのための間伐材簡易搬出法，第115回日林学術講集：646，2004.
- 芝 正己：FSC森林認証制度－森林の新たな価値連鎖創造への挑戦．北大－京大－琉大連携水圏フィールド科学シンポジウム，2003.
- 中島 皇・二村一男・馬渡和則・柳 直文・古本浩望・櫻木まゆみ：道東地域におけるエゾシカの食害と行動調査．－京都大学北海道演習林における事例－．第111回日林学術講集：334，2000.
- 中島 皇・山中典和：天然林流域からの流出物台風による出水後の溪床の状況と流出した岩石．平成12年度砂防学会研究発表会概要集：94-395，2000.
- 人見清香・中島 皇・大島誠一：天然林流域から流出するリター量．第112回日林学術講集：616，2001.
- 中島 皇・大島誠一・人見清香：天然林流域からの流出物，－平年の流出リター量と流出土砂量－．平成14年度砂防学会研究発表会概要集：260-261，2002.
- 中島 皇：天然林流域からの流出物．北大・京大・琉球大3大学連携シンポジウム，舞鶴水産実験所，2003.
- 中島 皇：Debris from the natural forest watershed in mountain regions of Japan．黒海東岸地域の交通と住居に関するシンポジウム，トルコ共和国トラブゾン，2003.

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

- Nakanishi, A., Shibata, H., Inokura, Y., Nakao, T., Toda, H., Sato, F., and Sasa, K.: Chemical characteristics in stem flow of Japanese cedar in Japan. 第6回酸性雨国際会議2000（つくば市，2000.12.10-16）
- 平田啓一・中西麻美・柴田昌三・大澤直哉：都市近郊林における小規模な除間伐が表層物質の移動に及ぼす影響．第52回日本林学会関西支部・日本林業技術協会関西・四国支部連合会合同大会（香川大学，高松市，2001.11.10）
- 中西麻美・中島弘起・武田博清：タイ国北部チェンマイのチーク植栽地における有機物供給と落葉分解様式．第52回日本林学会関西支部・日本林業技術協会関西・四国支部連合会合同大会（香川大学，高松市，2001.11.10）
- 保原 達・徳地直子・大手信人・中西麻美・勝山正則・金 秀珍・木庭啓介：マツ枯れのある森林集水域からの硝酸流出過程．第113回日本林学会大会（新潟大学，新潟市，2002.4.2-4）
- 牧野亜友美・森本淳子・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：都市近郊二次林における小面積伐採直後の木本植生の多様性の変化．第33回日本緑化工学会研究発表会（日本大学，藤沢市，2002.9.6-7）
- 中西麻美・平田啓一・境慎二郎・大澤直哉・柴田昌三：天然生ヒノキ二次林における伐採後の林地表層の状態の変化．第53回日本林学会関西支部・日本林業技術協会関西・四国支部連合会合同大会（愛媛大学，松山市，2002.10.26）
- 中西麻美：「海と淡水の間の対話 ～水はめぐる，森，川，海，空～」第3回世界水フォーラム・分科会（国際海洋研究所主催）（パネリスト参加），（京都宝ヶ池プリンスホテル，京都市，2003.3.17），
- 中西麻美：「海と淡水の間の対話 ～水はめぐる，森，川，海，空～」分科会報告，第3回世界水フォーラム・その他の分科会（林野庁主催）「水と森林円卓会議」，（大津プリンスホテル，大津市，2003.3.21）
- 牧野亜友美・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：都市近郊二次林における小面積伐採が木本植物の多様性に与える影響．第114回日本林学会大会（岩手大学，盛岡市，2003.3.27-30）

- 中西麻美・安川直樹・柴田昌三・酒井徹朗：自然観察会の参加者の森林に対するイメージの変容(I)．第114回日本林学会大会(岩手大学，盛岡市，2003.3.27-30)
- 安川直樹・中西麻美・柴田昌三・酒井徹朗：自然観察会の参加者の森林に対するイメージの変容(II)．第114回日本林学会大会(岩手大学，盛岡市，2003.3.27-30)
- 中西麻美・中島弘起・武田博清：タイ国チェンマイのチーク植栽地における無機態窒素の動態．第53回日本林学会関西支部・日本林業技術協会関西・四国支部連合会合同大会(広島県立女子大学，広島市，2003.11.8)
- 中西麻美：上賀茂試験地における里山生態系の保全に向けて．北大－京大－琉大連携水圏フィールド科学シンポジウム「森と里と海と生物」(京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所，舞鶴市，2003.12.8)
- 中西麻美：里から見た森・川・海・空．シップ・アンド・オーシャン財団第14回海洋フォーラム・ワークショップ「森・川・海・空のパートナーシップ」(パネリスト参加)(日本財団，東京都，2004.2.9)
- 柴田昌三：播種後1年半の間のモウソウチク(*Phyllostachys pubescens*)実生の成長について，第111回日林学術講集：155，2000.
- 森本淳子・柴田昌三・長谷川秀三・井上富実香：二次林へ導入した野生ツツジ類の初期成長－直播き，ポット苗植栽，自生苗の移植の可能性－，日緑工誌 25(4)：333-338，2000.
- 大藪崇司・柴田昌三・新畑 学・森本幸裕・小橋澄治：全国10ヶ所のモデル擁壁を用いた緑化に関する実験的研究，日緑工誌 25(4)：355-360，2000.
- 故選千代子・柴田昌三・丸山 宏：京都市近郊二次林における植生管理後の階層構造の変化について，平成12年度日本造園学会関西支部大会要旨集：11-12，2000.
- 柴田昌三：モウソウチクの開花，結実とその後の開花植栽地の変化，平成12年度ササ研究会，2000.
- 境慎二郎・柴田昌三：のり面緑化における鳥類の種子散布に関する予備的研究－人工とまり木と疑似餌による鳥類の誘因効果について－，日緑工誌 27(1)：351-354，2001.
- 柴田昌三：都市近郊林の植生管理が小流域の環境および生態系に及ぼす影響，第8回河川整備基金助成事業成果発表会～良好な河川環境をめざして～ 概要集：4-5，2001.
- 平田啓一・中西麻美・大澤直哉・柴田昌三：都市近郊林における小規模な除間伐が表層物質の移動に及ぼす影響，第52回日本林学会関西支部研究発表要旨集：2，2001.
- 故選千代子・森本幸裕・吉田博宣・柴田昌三：都市市街地における小規模緑地と鳥類の関係に関する研究．国際景観生態学会日本支部会報 6(2)：43-44，2001.
- 大藪崇司・柴田昌三・新畑 学・森本幸裕・小橋澄治：擁壁緑化における4樹種の生育評価－植栽後3年の気象要因の影響－，日緑工誌 28(1)：61-66，2002.
- 上村恵也・柴田昌三：自生ササ類の地下茎を用いたのり面緑化試験，日緑工誌 28(1)：240-243，2002.
- 牧野亜友美・森本淳子・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：都市近郊二次林における小面積伐採直後の木本植生の多様性の変化，日緑工誌 28(1)：286-289，2002.
- 中西麻美・平田啓一・境慎二郎・大澤直哉・柴田昌三：天然生ヒノキ二次林における伐採後の林地表層の状態の変化．第53回日本林学会関西支部研究発表要旨集：39，2002.
- 鈴木悠里・柴田昌三・田中和博・酒井徹朗：京都市市街地北部地域における活力度が高い樹木葉の色彩の評価，日緑工誌 29(1)：68-73，2003.
- 森本淳子・柴田昌三・長谷川秀三：野生ツツジ2種の種子発芽と実生の生育立地要求性－直播きによる野生ツツジ群落復元実験－，日緑工誌 29(1)：135-140，2003.
- 梁川俊晃・柴田昌三・上村恵也・徳永正夫・衣笠斗基子：表土マット移植工法を用いた法面緑化に関する調査研究，日緑工誌 29(1)：265-268，2003.

牧野亜友美・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：都市近郊二次林における小面積伐採直後の木本植物の多様性に与える影響．第114回日本林学会学術講演集：420，2003．

中西麻美・安川直樹・酒井徹朗・柴田昌三：自然観察会の参加者の森林に対するイメージの変容(I)．第114回日本林学会学術講演集：433，2003．

安川直樹・中西麻美・酒井徹朗・柴田昌三：自然観察会の参加者の森林に対するイメージの変容(II)．第114回日本林学会学術講演集：434，2003．

中村彰宏・小林望美・村上健太郎・橋本啓史・牧野亜友美・柴田昌三・森本幸裕：近畿3府県におけるアオモジの分布とデジタルマイクロプロブによる樹齢推定．第114回日本林学会学術講演集：502，2003．

牧野亜友美・森本淳子・柴田昌三・大澤直哉・中西麻美：里山構成樹種の萌芽特性．第34回日本緑化工学会大会研究交流発表会：21，2003．

■河口域生態学分野

田川正朋・Christopher L. Brown：ティラピア卵濾胞における甲状腺ホルモンの取り込み機構．2000年度日本水産学会春季大会．

岡田のぞみ・都木靖彰・青海忠久・田中 克・田川正朋：ヒラメ変態期の眼の移動に関与する骨および軟組織の電子顕微鏡観察．2000年度日本水産学会春季大会．

廣井準也・田川正朋・金子豊二・田中 克：海産・湖産アユふ化仔魚の海水耐性および体表塩類細胞の比較．2000年度日本水産学会春季大会．

Dody D. Trijuno, Satoshi Shiozawa, Jun Hirokawa, Masatomo Tagawa, and Masaru Tanaka: Development and metamorphosis of coral trout *Plectropomus leopardus* with special emphasis on digestive and endocrine systems．2000年度日本水産学会春季大会．

藤岡 崇・山口幹人・田中 克：石狩湾に出現するヒラメ天然稚魚の孵化時期および着底時期．2000年度日本水産学会春季大会．

梶 達也・辻 祥子・伊藤智幸・田中 克：南西諸島周辺海域から採集されたサバ型仔魚における鰾容積の日周変化．2000年度日本水産学会春季大会．

太田太郎・日比野学・中山耕至・磯田能年・木下 泉・田中 克：有明海湾奥部に出現するスズキ仔稚魚の日齢と成長．2000年度日本水産学会春季大会．

田中庸介・興石祐一・川崎大輔・富永 修・野上欣也・津崎龍雄・田中 克：若狭湾におけるヒラメ稚魚放流実験-XIV 浅海砂浜域周辺と沖側岩礁域におけるヒラメ稚魚の成長・摂餌の比較．2000年度日本水産学会春季大会．

小路 淳・前原 務・藤本 宏・岩本明雄・田中 克：瀬戸内海におけるサワラ仔稚魚の日間摂食量-2～天然仔魚の連続採集による推定～．2000年度日本水産学会春季大会．

小路 淳・藤本 宏・岩本明雄・田中 克：瀬戸内海におけるサワラ仔稚魚の日間摂食量-1～飼育実験による推定～．2000年度日本水産学会春季大会．

山口浩志・高井則之・上野正博・田中庸介・富永 修・田中 克・林 勇夫：若狭湾におけるヒラメ稚魚放流実験-15 炭素・窒素安定同位対比からみた放流海域の食物網構造．2000年度日本水産学会秋季大会．

磯田能年・太田太郎・日比野学・中山耕至・田中 克：有明海筑後川河口域におけるスズキ当歳魚の食性と成長．2000年度日本水産学会秋季大会．

小路 淳・藤本 宏・岩本明雄・田中 克：サワラ仔魚の摂餌開始期における魚類に対する選択的な捕食と飢餓耐性．2000年度日本水産学会秋季大会．

岡田のぞみ・都木靖彰・田中 克・田川正朋：眼の移動に異常を有するヒラメ稚魚の頭部組織の顕微鏡観察．2000年度

日本水産学会秋季大会.

橋本寿史・豊原治彦・木下政人・坂口守彦・岡田のぞみ・田川正朋・田中 克・鈴木 徹・横山芳博・水田 章・田畑和男：ヒラメの左右非対称性に関する分子生物学的研究－クローン魚を用いた解析. 2000年度日本水産学会秋季大会.

建田夕帆・有滝真人・平井慈恵・田中 克：ヌマガレイ仔稚魚の発育，成長，および低塩分適応能力の発達. 2000年度日本水産学会秋季大会.

青山光宏・小路 淳・村田 修・熊井英水・田中 克：異なった餌料条件下におけるマサバ仔稚魚の発育・成長. 2001年度日本水産学会春季大会.

小路 淳・田中 克：サバ型仔魚における魚食性の特化：サワラの一貫した魚食性とマサバの柔軟な魚食性. 2001年度日本水産学会春季大会.

原田靖子・原田慈雄・木下 泉・田中 克・田川正朋：幼形成熟性魚類シロウオ（ハゼ科）における甲状腺の発達と機能の検討. 2001年度日本水産学会春季大会.

堀田又治・有滝真人・田川正朋・田中 克：ホシガレイの変態・着底過程－ヒラメとの比較. 2001年度日本水産学会春季大会.

梶 達也・児玉雅章・荒井 寛・田川正朋・田中 克：ハガツオ仔魚の特異な消化系の発達. 2001年度日本水産学会春季大会.

岡本 崇・小林牧人・二瓶義明・松本 建・田川正朋・渡部終五：コイ普通筋筋原繊維ATPase活性およびミオシン重鎖アイソフォーム遺伝子発現の季節変化. 2001年度日本水産学会春季大会.

田川正朋：魚類の変態と初期生残. 平成13年度新プロ公開シンポジウム.

大槻直也・田中庸介・富永 修・津崎龍雄・村上直人・田中 克：ヒラメ人工種苗が他魚種の摂餌に及ぼす影響の検討. 2002年度日本水産学会大会.

小路 淳・田中 克：瀬戸内海中央部における仔稚魚の出現-2. 碎波帯において採集された仔稚魚. 2002年度日本水産学会大会.

小路 淳・前原 務・武智昭彦・谷川貴之・村田憲之・田中 克：瀬戸内海中央部における仔稚魚の出現-1. 稚魚ネットにより採集された仔稚魚. 2002年度日本水産学会大会.

M. S. Islam・日比野学・太田太郎・田中 克：Distribution and gut contents of larvae and juveniles of Japanese temperate bass and some cooccurring species in Chikugo River estuary. 2002年度日本水産学会大会.

和田敏裕・建田夕帆・有滝真人・平井慈恵・田中 克：ヌマガレイ仔稚魚期における低塩分適応と塩類細胞-1. 発育に伴う塩類細胞の変化. 2002年度日本水産学会大会.

建田夕帆・和田敏裕・有滝真人・平井慈恵・田中 克：ヌマガレイ仔稚魚期における低塩分適応と塩類細胞-2. 稚魚期における飼育塩分による塩類細胞の変化. 2002年度日本水産学会大会.

平井慈恵・田川正朋・金子豊二・田中 克：飼育水中イオンがスズキの鰓塩類細胞の分布に与える影響. 2002年度日本水産学会大会.

北野 忠・秋山信彦・上野信平・原田靖子・田川正朋：飼育条件下でのシロウオの形態変化に伴う甲状腺ホルモン濃度の変動. 2002年度日本水産学会大会.

岡田のぞみ・森田哲男・田中 克・田川正朋：変態が遅延していたヒラメ稚魚にみられた甲状腺系異常. 2002年度日本水産学会大会.

田川正朋・梶 達也・木下政人・田中 克：ヒラメ孵化仔魚の死亡に及ぼす収容密度とタンパク質添加の効果. 2002年度日本水産学会大会.

梶 達也・児玉雅章・荒井 寛・田中 克・田川正朋：卵白の添加による海産仔魚の浮上へい死防除の試み. 2002年度

日本水産学会大会。

田川正朋：仔稚魚の生理生態研究と資源変動研究の接点。新プロ変動系ワークショップ「海洋生物の変動」。

原田靖子・原田滋雄・木下 泉・北野 忠・秋山信彦・田中 克・田川正朋：幼型成熟性魚類シロウオおよびハゼ科魚類ウキゴリにおける甲状腺系と消化管の発達過程。水産学会近畿支部会。

和田敏裕・有滝真人・田中 克：ホシガレイ稚魚の低塩分環境下における成長ならびにプロラクチンと塩類細胞の動態。2003年度日本水産学会大会。

夕部泰弘・平井慈恵・中山耕至・田中 克：スズキ属仔稚魚の低塩分耐性の比較－ヒラスズキを中心に。2003年度日本水産学会大会。

中山慎之介・益田玲爾・田中 克：マサバ仔稚魚における群れ行動の発達と情報の伝達。2003年度日本水産学会大会。

夕部泰弘・日比野学・原田慈雄・田中 克：若狭湾西部海域沿岸砕波帯におけるスズキ属2種の出現比較。2003年度日本水産学会大会。

高木建司・田中庸介・富永 修・山下 洋・田中 克：成育場によるヒラメ稚魚の成長差解明：推定される要因。2003年度日本水産学会大会。

亀甲武志・甲斐嘉晃・中山耕至：AFLP法によるヤマトイワナ、ニッコウイワナの遺伝的識別。2003年度日本水産学会大会。

原田靖子・桑村勝士・木下 泉・田中 克・田川正朋：幼型成熟性魚類シラウオの甲状腺系および消化管の発達過程。2003年度日本水産学会大会。

北野 忠・秋山信彦・上野信平・原田靖子・田川正朋：シロウオの形態変化に及ぼす甲状腺ホルモンの影響。2003年度日本水産学会大会。

平井慈恵・原田慈雄・田川正朋・田中 克：カマキリ稚魚の淡水適応に及ぼす水温の影響。2003年度日本水産学会大会。

岡田のぞみ・田中 克・田川正朋：ヒラメ変態期の外部形態変化における甲状腺ホルモンの部位特異的影響。2003年度日本水産学会大会。

梶 達也・土橋靖史・田中 克・田川正朋：飼育水への卵白添加によるクエ・マハタ仔魚の浮上へい死防除の試み。日本水産学会中国四国支部大会。

原田靖子・桑村勝士・木下 泉・田中 克・田川正朋：シロウオとシラウオ－幼型成熟的な2魚種における甲状腺系の発達過程。2003年度日本魚類学会年会。

亀甲武志・甲斐嘉晃・中山耕至：琵琶湖流入河川におけるイワナ遺伝的多様性の経時的変化。2003年度日本魚類学会年会。

甲斐嘉晃・坂井恵一・土居内龍・中山耕至・中坊徹次：遺伝的に同定されたメバル3種の稚魚期における形態的特徴。2003年度日本魚類学会年会。

田中 克・太田太郎・日比野学・上田拓史・磯田能年・MD イスラム・鈴木啓太・中山耕至：“大陸沿岸遺存生態系”仮説：有明海特産魚類の成立・維持機構。2003年度日本魚類学会年会。

井関智明・水野晃秀・太田太郎・中山耕至・田中 克：西日本沿岸域における外来種タイリクスズキの生態。2003年度日本魚類学会年会。

小路 淳・Elizabeth W. North・Edward D. Houde：チェサピーク湾奥部の高濁度水塊におけるホワイチ仔魚の摂餌～物理環境と餌料生物密度の影響～。2003年度水産海洋学会。

小路 淳・田中 克：瀬戸内海中央部におけるサワラ仔魚の水平分布、餌料生物環境、成長および加入：1995年と1996年の比較。2003年度水産海洋学会。

田川正朋：カレイ類の変態に関与する2つの時間軸。平成15年度新プロ公開シンポジウム。

Hossain, M. A. R., M. Tanaka and R. Masuda: Does learning help Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, juveniles to avoid its

- predator, kinsengani, *Matuta lunaris*? The 24th Larval Fish Conference, Alabama USA, November 2000.
- Trijuno, DD., Tanaka M., Shiozawa S., Yoseda K.: What is metamorphosis in teleost?: Case study in a grouper, coral trout *Plectropomus leopardus*. The 24th Larval Fish Conference, Alabama USA, November 2000.
- Hirai, N., Tagawa M., Yube Y., Hibino M., Tanaka M.: Development of euryhalinity in Japanese sea bass *Lateolabrax japonicus* and contribution of stepwise salinity decline to freshwater survival. The 24th Larval Fish Conference, Alabama USA, November 2000.
- Shoji J., Tanaka M.: What does induce early selection for fast growth during post-first-feeding stage in completely piscivorous larvae of Japanese Spanish mackerel, *Scomberomorus niphonius* (Scombridae)? The 24th Larvae Fish Conference, Alabama, USA, November 2000.
- Kamisaka, Y., Totland GK., Tagawa M., Kurokawa T., Tanaka M., Ronnestad I.: Ontogeny of Cholecystokinin-producing cells in the digestive tract of Atlantic halibut (*Hippoglossus hippoglossus*) larvae. International Symposium on Nutrition and Feeding in Fish. Miyazaki Japan, May 2000.
- Tagawa M., Brown CL.: Entry of thyroid hormones into tilapia oocyte. 4th International Symposium on Fish Endocrinology. Seattle USA, August 2000.
- Hirai N., Tanaka M., Tagawa M., Secor DH.: Osmoregulatory responses in striped bass *Morone saxatilis* larvae: survival, growth, yolk absorption, and development of chloride cells in body skin. International congress on the biology of fish. Aberdeen Scotland, July 2000.
- Hirai N., Tanaka M., Tagawa M., Secor DH.: Osmoregulatory responses in striped bass *Morone saxatilis* larvae: survival, growth, yolk absorption, and development of chloride cells in body skin. International congress on the biology of fish. July 23 - 27, Aberdeen, Scotland. (WWW.fishbiologycongress.org), Fish migration and passage: p.83 - 96.
- Tanaka M.: Three important viewpoints for further advances in ELH research- learned from 25 years experience. The 25th Larval Fish Conference, Sandy hook, NJ, USA, August 2001.
- Shoji J., Tanaka M.: Early appearance of piscivory of Pacific mackerel *Scomber japonicus* larvae and its significance as a survival strategy. The 25th Larval Fish Conference, Sandy hook, NJ, USA, August 2001.
- Kaji T., Kodama M., Arai H., Tagawa M., and Tanaka M.: Highly specialized development of the digestive system for piscivory in striped bonito *Sarda orientalis* larvae. The 25th larval Fish Conference. Sandy hook, NJ, USA, August 2001.
- Shoji J., Tanaka M.: Early appearance of opportunistic piscivory of Pacific mackerel *Scomber japonicus* larvae and its significance as a survival strategy. The 25th Larval Fish Conference, Sandy hook, NJ, USA, August, 2001.
- Muturo, D. B. and M. Tanaka: Growth performance of Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* juveniles at different fish sizes, water temperatures and feeding regimes in the laboratory. 70th Anniversary of JSFS International Commemorative Symposium, Yokohama, October 2001.
- Hossain, M. A. R. and M. Tanaka: Compensatory growth response in juvenile Japanese flounder *Paralichthys olivaceus*: effects of starvation and subsequent feeding. 70th Anniversary of JSFS International Commemorative Symposium, Yokohama, October 2001.
- Tanaka, Y., O. Tominaga, T. Tsuzaki and M. Tanaka: The factors influencing the growth and feeding of hatchery-raised Japanese flounder juveniles under various designs of experimental mass release. 70th Anniversary of JSFS International Commemorative Symposium, Yokohama, October 2001.
- Trijuno DD, Shiozawa S., Yoseda K., Tagawa M. and Tanaka M.: Metamorphosis in coral trout *Plectropomus leopardus*: morphology, biochemical and physiological aspects. 70th anniversary of the JSFS international commemorative symposium. Yokohama, October 2001.

- Hirai N., Tagawa M., Kaneko T., Secor DH, Tanaka M.: Freshwater adaptation in Japanese sea bass and striped bass: A comparison of chloride cell distribution during their early life history. 70th anniversary of the JSFS international commemorative symposium. Yokohama, October 2001.
- Kamisaka Y., Kurokawa T., Suzuki T., Totland GK, Ronnestad I., Tagawa M., Tanaka M.: Ontogenetic appearance and distribution of the digestive hormone, cholecystokinin (CCK) in fish. 70th anniversary of the JSFS international commemorative symposium. Yokohama, October 2001.
- Hashimoto H., Mizuta A., Okada N., Suzuki T., Tagawa M., Tabata K., Yokoyama Y., Sakaguchi M., Tanaka M., Toyohara H.: Japanese flounder, reversed, displays a randomization of metamorphic and visceral left-right asymmetries without correlation. 70th anniversary of the JSFS international commemorative symposium. Yokohama, October 2001.
- Shoji J., Maehara T., Tanaka M.: Can recruitment success/failure in an inherent piscivore, Japanese Spanish mackerel *Scomberomorus niphonius* (Scombridae), support match/mismatch hypothesis? 70th Anniversary of the JSFS International Commemorative Symposium. Yokohama, October 2001.
- Kaji T., Shoji J., Aoyama M., Tanaka M.: Highly specialized development of digestive system in piscivorous scombrid larvae. 70th Anniversary of the JSFS International Commemorative Symposium. Yokohama, October 2001.
- Tanaka M.: Critical biological issues for further successful stock enhancement in a Japanese flounder *Paralichthys olivaceus*. 2nd International Symposium on Stock Enhancement and Sea Ranching, Kobe, January 2002.
- Ueda, H., A. Terao, M. Hibino and M. Tanaka: How can planktonic copepods in river estuaries survive in a flood? 8th International Conference on Copepod. Keelung, Taiwan, July 2002.
- Tanaka M., Kawai S., Kurokawa T.: Early ontogeny of the digestive system in teleosts- Generality and variability. The 26th Larval Fish Conference, Bergen, Norway, July 2002.
- Okada N., Tanaka M., Tagawa M.: Bone development during the metamorphosis of Japanese flounder. The 26th Larval Fish Conference, Bergen, Norway, July 2002.
- Shoji J., Tanaka M.: Significance of prey fish for larval growth and survival of a piscivore, Japanese Spanish mackerel (*Scomberomorus niphonius*: Scombridae): Is the recruitment determined during the early larval period? The 26th Larval Fish Conference, Bergen, Norway, July 2002.
- Shoji J., Tanaka M.: Variability in larval growth of a piscivore, Japanese Spanish mackerel (*Scomberomorus niphonius*: Scombridae): implication for recruitment. 132nd Meeting of the American Fisheries Society, Baltimore, USA, August 2002.
- Kaji T., Kodama M., Arai H., Tanaka M., Tagawa M.: Prevention of surface death of marine fish larvae by addition of egg white into rearing water. Texas Chapter of the American Fisheries Society Annual Meeting. Galveston USA, January 2003.
- Islam Md H., Hibino M., Ohta T., Ueda H., Tanaka M.: Distribution and feeding habits of dominant fish larvae and juveniles related to a continental relict copepod in Chikugo estuary, Ariake Bay, Japan. The 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.
- Tanaka M., Fujiwara K., Nemoto M.: Is stock enhancement an effective tool for recovering reduced aquatic resources? The 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.
- Tanaka Y., Tominaga O., Tsusaki T., Tanaka M.: Feeding performance of released Japanese flounder juveniles in relation to variability of food availability. 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.
- Shoji J., North E., Houde ED: Feeding, growth and mortality of white perch *Morone americana* larvae around the estuarine turbidity maximum of upper Chesapeake Bay: contrasting years. 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.
- Wada T., Aritaki M., Tanaka M.: Effects of low-salinity on the growth and development of spotted halibut juveniles with reference to prolactin and chloride cells responses. The 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.

Nakayama S., Masuda R., Tanaka M.: Development of schooling behavior in chub mackerel *Scomber japonicus* with emphasis on dietary condition and social transmission. The 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.

Takeda Y., Wada T., Aritaki M., Tanaka M.: Ontogenetic development of freshwater adaptability in closely related flatfish: starry flounder *Platichthys stellatus*, stone flounder *P. bicoloratus* and their hybrids, The 27th Larval Fish Conference, Santa Cruz USA, August 2003.

Tanaka M.: A new integrative science for environments: Linkage of forest-human habitation-marine systems supporting a movement “The Sea Yearns for the Forest.” 4th SEASTAR2000 workshop, Bangkok, December 2003.

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

上野俊士郎・河村真理子・佐々木克明・久保田信・山口麻美：最近のヒクラゲ（刺胞動物門：立方クラゲ綱）の出現と若干の生物学的観察．2001年度日本海洋学会春季大会，2001．

上野俊士郎・久保田信・築地新光子・河村真理子・藤井直紀・田名瀬英朋・檜山嘉郎・山本善万・興田喜久男：山口県阿武町奈古筒尾と和歌山県白浜町番所崎の沿岸域で見られたオキクラゲの多数個体の出現．2001年度日本海洋学会秋季大会，2001．

湊 宏・久保田信・土生紳吾：白浜町沿岸に漂着したオオクビキレガイ．南紀生物同好会平成13年度秋の研究発表大会，2001．

久保田信：不老不死のベニクラゲ（ヒドロ虫類）の生活史について．南紀生物同好会平成14年度秋の研究発表大会，2002．

河村真理子・白山義久・久保田信：田辺湾におけるヒドロクラゲ類の水平分布の季節変動とその生活史型の関係．2002年度日本プランクトン学会大会，2002．

岩永節子・大城直雅・久保田信：大型ヒドロクラゲ *Timoides agassizii* の大量出現と刺症被害．沖縄生物学会第39回大会，2002．

河村真理子・上野俊士郎・岩永節子・大城直雅・久保田信：沖縄本島におけるハブクラゲの成長と平衡石中の輪紋の関係．2002年度日本海洋学会秋季大会，2002．

Shin Kubota: Medusa release of *Eugymnanthea inquilina* (Leptomedusae, Eirenidae). 5th Workshop of the Hydrozoan Society in Geelbek, South Africa, 2003.

Shin Kubota: Distinction of two forms of *Turritopsis nutricula* (Hydrozoa, Clavidae) in Japan, and their ability of reverse to young hydroid from medusa. 7th International Conference on Coelenterate Biology, 2003.

Mariko Kawamura, Yoshihisa Shirayama and Shin Kubota: The seasonal change of planktonic coelenterate abundance at inner and outer sites of Tanabe Bay, Wakayama, western Japan. 7th International Conference on Coelenterate Biology, 2003.

Arei Kobayashi, Syunshirou Ueno, Mariko Kawahara and Shin Kubota: Expansion of geographical distribution of bivalve-inhabiting hydrozoans in the southwestern coasts of the Japan Sea. 7th International Conference on Coelenterate Biology, 2003.

久保田信：日本には2型（2種？）のベニクラゲ（ヒドロ虫綱，花クラゲ目）がいる－両者は“若返り”可能．2003年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会，2003．

■海洋生物進化形態学分野

Katsumi Miyazaki: Comparative morphology of the circulatory system in pycnogonids (Arthropoda, Pycnogonida). 18th International Congress of Zoology, 2000.

- 宮崎勝己・鈴木浩文：フタツメイソウミグモ・プロトニムフォン幼生の内部形態。日本節足動物発生学会第36回大会，2000。
- 金城その子・白山義久・和田 洋：ミトコンドリアDNA配列に基づくナガウニ科の系統関係と幼生骨格形態の進化。日本動物学会第71回大会，2000。
- 宮崎勝己：サンゴイソギンチャクに寄生するウミグモに関するいくつかの知見。日本節足動物発生学会第37回大会，2001。
- 宮崎勝己：サンゴイソギンチャクへのウミグモの内部寄生について。日本動物学会第72回大会，2001。
- 金城その子・和田 洋：ナガウニモドキ（ホンウニ目ナガウニモドキ科）の幼生形態と系統関係。日本動物学会近畿支部大会，2001。
- 金城その子・白山義久・和田 洋：ナガウニ科における幼生骨格の形態多様性と進化。東京大学海洋研究所ワークショップ「海洋の生命史：分子のアプローチの現状と展望」，2001。
- 金城その子・下出信次・白山義久・和田 洋：ナガウニ科のウニ類における幼生骨格形態の多様性と進化。日本進化学会第3回大会，2001。
- 金城その子・下出信次・白山義久・和田 洋：ウニ類における幼生形態の変異と野外での垂直分布との関係。日本ベントス学会第15回大会，2001。
- 松原未央子・小松美英子・和田 洋：分子系統から支持されるイトマキヒトデ科とニチリンヒトデ科の近縁性。日本動物学会近畿支部研究発表会，2001。
- 松原未央子・小松美英子・和田 洋：ミトコンドリアDNAと18S rDNAに基づくヒトデ類の分子系統学的解析。日本動物学会第72回大会，2001。
- Katsumi Miyazaki and Günther Pass: Morphology of the circulatory system in sea spiders (Arthropoda, Pycnogonida). 20th European Colloquium of Arachnology, 2002.
- 宮崎勝己・Günther Pass：フタツメイソウミグモ循環器官系の形態について。日本動物学会第73回大会，2002。
- Shota Kakoi and Hiroshi Wada: *Pax37* and molluscan shell diversification. BSDB and Genetics Society joint spring meeting on Evolution of Developmental Mechanisms, 2002.
- Mioko Matsubara, Mieko Komatsu and Hiroshi Wada: The expression of *Ets* homologue in starfish embryogenesis and the evolution of larval skeleton in Echinoderm. BSDB and Genetics Society joint spring meeting on Evolution of Developmental Mechanisms, 2002.
- 松原未央子・将口栄一・佐藤矩行・赤坂甲治・小松美英子・和田 洋：ヒトデ*Ets*相同遺伝子 (*ApEts*) の発現および棘皮動物の骨片形成に関与する分子間の関係性の進化。日本発生生物学会第35回大会，2002。
- 松原未央子・将口栄一・佐藤矩行・赤坂甲治・小松美英子・和田 洋：SM50転写制御機構から見る棘皮動物の骨片の進化。日本進化学会第4回大会，2002。
- 宮崎勝己・Günther Pass：フタツメイソウミグモ *Ammothella biunguiculata* の循環器官系：その形態と機能。日本節足動物発生学会第39回大会，2003。
- 宮崎勝己・牧岡俊樹：節足動物鋏角類における卵巣構造と卵形成様式の多様性と統一性について。日本動物学会第74回大会，2003。
- Sonoko Kinjo, Yoshihisa Shirayama and Hiroshi Wada: Phylogenetic relationships and morphological diversity in the family Echinometridae (Echinoidea, Echinodermata). 11th International Echinoderm Conference, 2003.
- 梶 昭太・和田 洋：二枚貝類の殻形態の進化及びその背景にある殻形成について。日本進化学会第5回大会，2003。
- 梶 昭太・和田 洋：二枚貝類の殻形態の進化及びその背景にある殻形成について。日本動物学会第74回大会，2003。
- 松原未央子・小松美英子・和田 洋：ヒトデ綱モミジガイ目の分子系統学的解析。日本進化学会第5回大会，2003。

三瀬武史・猪早敬二・工藤明・和田 洋：脊椎骨の進化：カタユウレイボヤPax1/9とメダカPax1の転写制御に着目したアプローチ．日本動物学会第74回大会，2003．

■海洋生物多様性保全学分野

金城その子・白山義久・和田 洋：ミトコンドリアDNA配列に基づくナガウニ科の系統関係と幼生骨格形態の進化．日本動物学会第71回大会，2000．

金城その子・白山義久・和田 洋：ナガウニ科における幼生骨格の形態多様性と進化．東京大学海洋研究所ワークショップ「海洋の生命史：分子のアプローチの現状と展望」，2001．

金城その子・下出信次・白山義久・和田 洋：ナガウニ科のウニ類における幼生骨格形態の多様性と進化．日本進化学会第3回大会，2001．

金城その子・下出信次・白山義久・和田 洋：ウニ類における幼生形態の変異と野外での垂直分布との関係．日本ベントス学会第15回大会，2001．

上野俊士郎・久保田信・築地新光子・河村真理子・藤井直紀・田名瀬英朋・檜山嘉郎・山本善万・興田喜久男：山口県阿武町奈古筒尾と和歌山県白浜町番所崎の沿岸域で見られたオキクラゲの多数個体の出現．2001年度日本海洋学会秋季大会，2001．

河村真理子・白山義久・久保田信：田辺湾におけるヒドロクラゲ類の水平分布の季節変動とその生活史型の関係．2002年度日本プランクトン学会大会，2002．

Mariko Kawamura, Yoshihisa Shirayama and Shin Kubota: The seasonal change of planktonic coelenterate abundance at inner and outer sites of Tanabe Bay, Wakayama, western Japan. 7th International Conference on Coelenterate Biology, 2003.

Sonoko Kinjo, Yoshihisa Shirayama and Hiroshi Wada: Phylogenetic relationships and morphological diversity in the family Echinometridae (Echinoida, Echinodermata). 11th International Echinoderm Conference, 2003.

●●● III. 学会と社会における活動 ●●●

森林生物圏部門

●併任・委員会委員等

芝 正己：三重県環境保全事業団技術顧問，三重県ビオトープ研究会幹事，森林認証制度研究会代表幹事，UFJ総合研究所森林経営コンサルティング指導員，富村環境研究事務所技術指導員，アマタ株式会社森林認証部門技術指導員

●学協会委員等

徳地直子：日本生態学会編集委員

竹内典之：日本林業技術協会京大支部長，同関西支部監査

●学会・講演会等開催（センター主催～共催）

中島 皇：京都大学フィールド科学教育研究センターシンポジウム「芦生の森と「ナラ枯れ」

●学会・講演会の開催（個人）

徳地直子：森・山・川を考える若手研究者の会，2003年10月

●地域貢献

徳地直子：和歌山県立有田中央高校清水分校「しみずタイム」講演

寄元道德：京都市立高等学校理科教員・自然観察教育研修講師（芦生研究林），公開講座「森のしくみと働き」講師（芦生研究林）

坂野上なお：大学等地域開放特別事業「ウッズサイエンス」（有田中央高校清水分校共催）講師

安藤 信：「世界文化遺産（京都）緩衝地帯の森林景観の回復・保全指針」に係わる森林景観の保全指針検討会及び調査

芝 正己：森林の新たな価値連鎖の創造－FSC国際森林認証制度－，京都大学木質科学研究所公開講座「森と木と生活」NPO法人 そまの会（滋賀県朽木村）所有森林模擬認証審査・森林管理指導吉川林業（山口県）所有森林模擬認証審査・森林経営管理指導気仙地方森林組合（岩手県）管理森林の森林認証・CoC技術指導SBC信越放送（ラジオ部門）出演：FSC国際森林認証制度について

中島 皇：芦生研究林公開講座地球環境子ども村自然体験教室（亀岡市生涯学習部）総合学習「由良川上流」（綾部市立豊里小学校）

竹内典之：公開講座「森のしくみと働き」講師

里域生態系部門

●併任・委員会委員等

山下 洋：京都海区漁業調整委員会委員，舞鶴市大学連携センター検討会委員，（独）水産総合研究センター水産工学研究所（生物影響検討WG委員，同調査検討委員会委員），水産庁（水産バイオテクノロジー適正利用検討会委員），学振（特別研究員等審査会専門委員），（独）科学技術振興機構（地域振興事業評価委員会委員）

柴田昌三：関西空港二期島埋立地植栽調査委員会委員長（株関西空港），高松塚古墳壁画緊急保存対策検討会ワーキンググループ委員（文化庁），緑の公共事業アクションプラン策定に係る政策検討会議委員（京都府），関西地域における植物資源のリサイクル技術に関する検討委員会委員及び幹事会幹事長（日本道路公団），グリーンマネジメント技

術委員会委員（国土交通省近畿地方整備局），井手町豊かな緑と清流を守る検討委員会委員長（京都府井手町）

田中 克：京都海区漁業調整委員会委員，琵琶湖海区漁業調整委員会委員，海洋生物環境研究所運営委員，大阪湾周辺海域における水質と漁業生物への影響調査委員会委員，漁場環境修復推進調査検討委員会委員，関西国際空港環境監視検討委員会委員，学位授与機構審査臨時専門委員，独立行政法人水産総合研究センター養殖研究所運営評価会議委員，科学技術振興機構地域振興事業評価委員会委員，日本学術振興会特別研究員等審査専門委員，日本学術振興会科学研究費補助金審査委員会委員，水産庁水産バイオテクノロジー適性利用検討委員会委員

●学協会委員等

田中 克：日本水産学会（理事，学会賞選考委員，水産増殖懇話会委員，近畿支部評議員），日本水産増殖学会（評議員），日本水産海洋学会（幹事），日本魚類学会（評議員，平成15年度日本魚類学会実行委員），Journal of Applied Ichthyology（編集委員），6th International Flatfish Ecology Symposium（大会委員長），Journal of Applied Ichthyology（editorial board），Aquatic Living Resources（Scientific Advisory Committee）

山下 洋：日本水産学会（編集委員），水産海洋学会（学会賞委員）

柴田昌三：日本造園学会（企画委員会委員），日本緑化工学会（理事，学会誌編集委員長，環境林研究部会長，学会賞選考委員会委員，大会特集号編集委員会委員長），竹文化振興協会（研究誌編集委員会委員），京都竹文化振興財団（評議員），森林再生支援センター（評議員），竹資源有効活用コンソーシアム（アドバイザー），グリーン購入コンソーシアム（アドバイザー），大阪CDMネットワーク（アドバイザー）

西村和雄：財団法人自然農法国際研究開発センター理事，NPO有機農業認証協会理事長，NPO日本有機農業研究会幹事，社団法人安全農産供給センター顧問，国際協力事業団の海外研修生に対する講義（年二回，沖縄国際センターおよび兵庫国際センターにて），NPO地球デザインスクールにて毎月第二土日「ぐうたら農学校」講義と現地実習

山河重弥：日本雑草学会（和文誌編集委員）

上野正博：日本水産学会（報文審査員），日本海洋学会（教育問題研究部会委員）

梅本信也：日本雑草学会（学術活動と組織運営を考える会幹事，用語委員会委員）

●学会・講演会等開催（センター主催～共催）

北大－京大－琉球大連携水圏フィールド科学シンポジウム「森と里と海と生物」舞鶴水産実験所 2003.12.8（山下・益田・上野）

京都大学フィールド科学教育研究センター創設記念シンポジウム「21世紀のフィールド科学」2003.11.7

●学会・講演会の開催（個人）

柴田昌三：日本緑化工学会環境林研究部会第9回研究会（主催），日本造園学会第8回ランドスケープセミナー（講師），日本地盤工学会関西支部滋賀地域地盤研究会（講師）

●学会賞等

中山慎之介・益田玲爾・竹内俊郎・田中 克：日本水産学会 論文賞（2003）

益田玲爾：第2回国際栽培漁業シンポジウム ベスト口頭発表賞（2002）

上坂裕子・田川正朋・田中 克：日本水産学会創立70周年記念シンポジウム ベストポスター賞

中山慎之介・益田玲爾・田中 克：第27回アメリカ水産学会仔稚魚研究会議 ベスト口頭発表賞

●地域貢献

柴田昌三：上賀茂試験地一般公開自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」、高知県春野町里山再生委員会設立総会（講演），
大阪産業創造館（講演），全日本竹産業連合会熊本大会（講演）

中西麻美：芦生演習林公開講座「森のしくみと働き」，上賀茂試験地一般公開自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」

梅本信也：黒潮文化研究会・代表

田中 克：公開講座「森のしくみと働き」講師 2001年7月29日

田中 克：環境省有明海・八代海総合調査評価委員会ヒアリング 2003年9月25日

田中 克：滋賀県漁業協同組合連合会主催シンポジウム「魚が語る琵琶湖」にパネラーとして参加 2003年10月24日

基礎海洋生物学部門

●併任・委員会委員等

久保田信：和歌山県立自然博物館協議会委員

●学協会委員等

大和茂之：南紀生物同好会（編集委員）

和田 洋：日本動物学会近畿支部委員（2002-2003年度）

●学会・講演会等開催（センター主催～共催）

大和茂之・和田 洋・田名瀬英朋：公開講座「島島海の生物観察会（11月22日）」日本動物学会近畿支部・フィールド
センター共催

●学会賞等

和田 洋：平成13年度 日本動物学会奨励賞

●地域貢献

久保田信・田名瀬英朋・太田 満・山本泰司：水辺環境教室（12月6日）白浜町生活環境課主催（地元小学生と保護者52名）

●●● IV. 国際的活動 ●●●

森林生物圏部門

●国際研究プロジェクト

安藤 信：文部科学省 総合地球研究所共同研究員（乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響）。

芝 正己：FSC Japan設立準備WG Program (FSC International, Asia-Pacific Regional)。

●外国人客員研究員等

安藤 信：トルコ・チクロバ大学Mustafa Artar氏を（総合地球研）植生グループ共同研究員として招聘：2004.2/6-2/2（京都・鳥取）。

●海外訪問者

芝 正己：Iris Lingenfelder (DEFINIENS Imaging GmbH, Germany) 技術情報交換James Sandom (FSC Asia-Pacific Regional Office, United Kingdom) 検討会。

●招聘研究員

安藤 信：中国人留学生を研究生（呉初平）として受け入れ。

●海外フィールド調査等

安藤 信：乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響（トルコ），2003.8/21-9/6。

芝 正己：森林管理・CoC認証システムの実態調査（ドイツ・スウェーデン・スイス）。

徳地直子：2003年9月 シベリア。

●出張研修

芝 正己：森林管理・CoC認証システムの海外実態調査（ドイツ・スウェーデン・スイス）。

IUFRO (International Union of Forest Research Organization) Division3 Mid-Term Officeholder's Meeting (Sweden).

Austro2003 International Conference (Austria).

IUFRO S3.06 Coordinator: officeholder COFE (Council on Forest Engineering, USA): membership International Editorial Board of International Journal of Forest Engineering, Canada (Canada).

徳地直子：2003年7月 アメリカ合衆国，アメリカ生態学長期研究会参加と生態学長期研究サイトの見学。

中島 皇：トルコ国黒海工科大学・黒海東岸地域の交通と住居に関するシンポジウム参加・講演および森林の見学と研究打ち合わせ。

里域生態系部門

●国際研究プロジェクト

田中 克：韓国南西沿岸域におけるスズキとタイリクスズキの同所的分布に関する研究，韓国，2003年。

山下 洋・田中 克：タイ国ブラパ大学（タイ湾奥部河口域の生物生産に関する調査）。

山下 洋・田中 克：タイ国ブーケット海洋生物センター（アンダマン海沿岸域における森里海連環共同研究）。

山下 洋・益田玲爾：タイ国トラン沿岸域フィールド調査 2003年度。

益田玲爾：アメリカハワイ（アクアカルチャー2004）。

●海外調査・国際学会等

柴田昌三：第4回中国竹文化節，第7回世界竹会議。

柴田昌三：インド・ミゾラム州における竹開花予定地予備調査，タイ・沿岸部における水系に関する予備調査。

西村和雄：ベトナム国におけるコーヒーの有機栽培の可能性について調査（社団法人日本国際民間協力会のJICAのODA法人枠で）。

中西麻美：総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」に関するフィールド調査。

2003.6.12-2003.6.16：ビエンチャン（ラオス），バンコク（タイ）

2003.7.14-2003.7.29：ビエンチャン，ウドムサイ県（ラオス）

2003.9.9-2003.9.21：ビエンチャン，ルアンパバン県，ボンサリ県，ウドムサイ県（ラオス），バンコク（タイ）

2003.12.10-2003.12.20：ビエンチャン，ウドムサイ県（ラオス）

田中 克：第27回アメリカ水産学会仔稚魚研究集会（セッションコンビナー） Santa Cruz USA, August 2003.

田中 克：第4回SEASTAR2000ワークショップ（講演：タイ湾沿岸域における森里海連環学の展開），タイ王国バンコク市，Dec. 11-13.

●招聘研究員

2003年：JSPS外国人特別研究員2名（韓国，ニュージーランド）：招へい外国人学者1名（韓国）

●留学生

2003年：博士後期課程学生1名（バングラデシュ）

基礎海洋生物学部門

●在外研究等

宮崎勝己：オーストリア・ウィーン大学・動物学研究科，京大・ウィーン大間学術交流事業（2004年1月9日-2月10日）

●招聘研究員

JSPS外国人特別研究員1名（韓国）

●留学生

国費留学生1名（インド）

●●● V. 教育活動 ●●●

森林生物圏部門

●院生・学生（2003年4月現在）

研修員：平山貴美子

D3：毛利浩一・横山恭子・高橋絵里奈

D2：森下和路・リス・ハディ・プルワント・佃 誠玄

D1：高橋美雅

M2：松山周平・新井宏受・平山香織・嶋田俊平・藤野貴之・松山知恵

M1：福島慶太郎・尾崎健一郎・安井美樹子・中尾友一・尾崎敬子

4回生：近藤千真・上田実希・岡田泰明

研究生：伊藤幹二・呉 初平

●課題研究・修士論文・博士論文テーマ

・課題研究

岡田泰明：芦生モンドリ谷集水域上部の林相区分 スギが混交する冷温帯天然林における大面積調査地を用いて

近藤千真：シベリアにおけるカラマツの物質生産に関する研究

上田実希：硝酸還元酵素活性を用いた針葉樹の窒素吸収量の推定

・修士論文

松山周平：ウルシ属2種（ヤマウルシ，ヌルデ）における季節的繁殖行動パターンと栄養成長及び経年的繁殖行動との関わり

福島慶太郎：森林の成立に伴う物質循環機構の変化に関する研究

平山香織：森林樹木が形成する土壌の性質 ～芦生における森林構成数種の樹幹下表層土の生理的・科学的特徴～

新井宏次：14Cを用いた森林土壌の年代測定に関する研究

嶋田俊平：森林ボランティア活動の意義に関する研究 - 森林所有者の意識及び森林ボランティアの取り組みに着目して -

藤野貴之：簡易水分計付貫入試験機による含水率測定手法の確立

●講義・集中講義・実習（講義名と対象者，他大学の場合は大学名）

・全学共通教育

竹内典之：森林資源学セミナー（新入生向け少人数セミナー）

安藤 信：生物圏の科学 - 生命・食料・環境 -（1～4回生）

中島 皇：原生的な森林の利用と管理（新入生向け少人数セミナー），森里海連環学実習（1～4回生）

・農学部

大島誠一：森林育成学（3回生），森林科学演習（4回生）

竹内典之：森林基礎科学Ⅳ（1回生），演習林実習Ⅰ（2回生），雪氷学基礎論（3回生），演習林実習Ⅲ（3回生），演習林実習Ⅳ（3回生），森林科学演習（4回生）

安藤 信：森林基礎科学Ⅳ（1回生），森林植物学（3回生），森林総合実習および実習法（3回生），森林科学演習（4回生）

芝 正己：森林科学実習Ⅳ（2回生）、森林管理システム及び応用技術論（3回生）、森林総合実習および実習法（3回生）、森林科学演習（4回生）

徳地直子：森林基礎科学Ⅳ（1回生）、森林科学実習Ⅳ（2回生）、森林育成学（3回生）、森林科学演習（4回生）

中島 皇：雪氷学基礎論（3回生）、森林総合実習および実習法（3回生）、食料環境経済学実習（3回生）、森林科学演習（4回生）

寄元道德：演習林実習Ⅰ（2回生）、森林総合実習および実習法（3回生）、森林科学演習（4回生）

坂野上なお：森林総合実習および実習法（3回生）、森林科学演習（4回生）

・大学院

大畠誠一：森林育成学専攻演習、森林育成学専攻実験

竹内典之：森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験

安藤 信：森林育成学特論Ⅱ、森林育成学専攻演習、森林育成学専攻実験

芝 正己：森林情報学特論Ⅱ、森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験

徳地直子：森林育成学特論Ⅱ、森林育成学専攻演習、森林育成学専攻実験

中島 皇：森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験

寄元道德：森林育成学専攻演習、森林育成学専攻実験

坂野上なお：森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験

・他大学・各種学校

芝 正己：情報処理学演習（京都府立大学）、森林生産環境学（愛媛大学）

中島 皇：フィールドワーク（京都造形芸術大学）、地域資源管理学演習（名古屋大学）

徳地直子：森林生態学特論（京都府立大学）、ウッズ・サイエンス（和歌山県立有田中央高校）

坂野上なお：ウッズ・サイエンス（和歌山県立有田中央高校）

里域生態系部門

●院生・学生（2003年4月現在）

D3：甲斐嘉晃・上坂裕子

D2：磯田能年・土居内龍・原田靖子・建田夕帆

D1：MD イスラム・井関智明・夕部泰弘・和田敏裕

M2：丸川祐理子・中山慎之介・渡邊 薫・井上健彦

M1：小林あや・鈴木啓太・高木健司・福田野歩人

4回生：武田 和・松田克洋

●課題研究・修士論文・博士論文テーマ

・課題研究

武田 和：日本周辺海域におけるヒラメの遺伝的集団構造

松田克洋：キジハタの活動性の日周変化

・修士論文

井上健彦：1新種を含むインド・太平洋産マエソ属 *Saurida undosquamis* 種群の分類学的研究

渡邊 薫：若狭湾砂浜域におけるヒラメ稚魚の夜行性捕食者の探索

中山慎之介：マサバ仔稚魚における視覚による情報伝達能力の発達

丸川祐理子：日本海におけるヒラメ稚魚の性比の地理的変異

小林あや：クロマグロ仔稚魚の耳石日周輪による成長と生残の解析

鈴木啓太：安定同位対比による有明海産スズキの回遊履歴解析

高木建司：成育場によるヒラメ稚魚の成長差とその要因の解析

福田野歩人：ヒラメの卵黄吸収期の死亡に対してふ化以前のハンドリングが及ぼす影響

・博士論文

甲斐嘉晃：フサカサゴ科魚類メバル複合種群の分類学的研究

上坂裕子：仔稚魚期における消化ホルモンコレヒストキニンの発現と動態

磯田能年：有明海産スズキの食性、成長、成熟に関する研究

土居内龍：イボダイ科魚類の系統分類学的研究

原田靖子：幼形成熟魚シロウオ及びシラウオの甲状腺系に関する研究

建田夕帆：ヌマガレイとイシガレイ仔稚魚の低塩分適応能力の発達に関する研究

Md イスラム：有明海産特産種仔稚魚の分布と食性に関する研究

井関智明：外来魚タイリクスズキの分布、成長、成熟に関する研究

夕部泰弘：ヒラスズキ仔稚魚の成長と食性に関する研究

和田敏裕：ホシガレイの初期生態と放流技術に関する研究

●講義・集中講義・実習（講義名と対象者、他大学の場合は大学名）

・全学共通教育

山下 洋：森里海連環学実習（1～4回生）、海洋環境と生物資源（新入生向け少人数セミナー）

西村和雄：生物圏の科学－生命・食料・環境－（1～4回生）、照葉樹林の構造と維持（新入生向け少人数セミナー）

山河重弥：南紀における里域生物調査実習（新入生向け少人数セミナー）

梅本信也：南紀における里域生物調査実習（新入生向け少人数セミナー）、森林資源学ゼミナール（新入生向け少人数セミナー）、森里海連環学実習（1～4回生）

・農学部

田中 克：資源生物科学概論Ⅲ（2回生）、海洋生物生態学（3回生）、海洋生物資源学演習（4回生）

山下 洋：資源生物科学概論Ⅲ（2回生）、資源生物科学基礎実験（2回生）、海洋生物科学技術論と実習Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（2回生）

柴田昌三：緑地植物学（4回生）、森林科学演習（4回生）

田川正朋：資源生物科学基礎Ⅱ（1回生）、動物生理学（2回生）、資源生物科学基礎実験（2回生）、海洋生物科学技術論と実習Ⅰ（2回生）、海洋生物生理学（3回生）、資源生物科学実験及び実験法（3回生）、海洋生物資源学演習（4回生）

益田玲爾：海洋生物科学技術論と実習Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（2回生）

西村和雄：森林科学演習（4回生）

山河重弥：植生調査法と実習（3回生）

上野正博：海洋生物科学技術論と実習Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（2回生）

梅本信也：植生調査法と実習（3回生）

中西麻美：森林科学実習Ⅳ（2回生）

中山耕至：資源生物科学基礎Ⅱ（1回生），資源生物科学基礎実験（2回生），海洋生物科学技術論と実習Ⅰ（2回生），資源生物科学実験及び実験法（3回生），海洋生物資源学演習（4回生）

・大学院

田中 克：海洋生物増殖学特論，海洋資源生物学専攻演習，海洋資源生物学専攻実験

柴田昌三：森林育成学特論Ⅰ，森林育成学専攻演習，森林育成学専攻実験

田川正朋：海洋資源生物学特論，海洋資源生物学専攻演習，海洋資源生物学専攻実験

西村和雄：森林情報学専攻演習，森林情報学専攻実験

中西麻美：森林情報学専攻演習，森林情報学専攻実験

中山耕至：海洋資源生物学専攻演習，海洋資源生物学専攻実験

柴田昌三：（地球環境学舎）景観生態保全論，里山再生論，景観マネジメント野外実習

・他大学・各種学校

田中 克：水産資源学（滋賀県立大学）

山下 洋：水産資源学（滋賀県立大学），臨海実習（京都教育大学附属高校）

柴田昌三：緑化学概論（京都造形芸術大学），竹林の整備と竹の利用（福井県立農林水産大学校），法面緑化（淡路景観園芸学校）

益田玲爾：臨海実習（京都教育大学），資源培養のための栽培漁業（高知大学）

基礎海洋生物学部門

●院生・学生（2003年4月現在）

D5：嶋村（金城）その子

D4：栗原晴子

D2：三瀬武史

D1：川村真理子・梶 昭太・松原美央子

M1：小林亜玲

●課題研究・修士論文・博士論文テーマ

・博士論文

嶋村（金城）その子：ナガウニ科における幼生骨格形態の多様性と進化

栗原晴子：Effects of raised concentration of CO₂ on marine organisms.（二酸化炭素濃度の増加が海洋生物に与える影響）

●講義・集中講義・実習（講義名と対象者，他大学の場合は大学名）

・全学共通教育

白山義久：南紀における里域生物調査実習（新入生向け少人数セミナー）

・理学部

白山義久：海洋生物学 (2回生)，無脊椎動物学 (2回生)，臨海実習第1部 (2回生)，臨海実習第2～4部 (3回生)

久保田信：無脊椎動物学 (2回生)，臨海実習第1部 (2回生)，臨海実習第2～4部 (3回生)

大和茂之：臨海実習第1部 (2回生)，臨海実習第2～4部 (3回生)

宮崎勝己：臨海実習第1部 (2回生)，臨海実習第2～4部 (3回生)

和田 洋：臨海実習第1部 (2回生)，臨海実習第2～4部 (3回生)

田名瀬英朋：臨海実習第1部 (2回生)，臨海実習第2～4部 (3回生)

・大学院

白山義久：動物系統解析論A・B，海洋生物特性論，海洋生物学ゼミナール

久保田信：動物系統解析論A・B，海洋生物特性論，海洋生物学ゼミナール

大和茂之：動物系統解析論A・B，海洋生物特性論，海洋生物学ゼミナール

宮崎勝己：動物系統解析論A・B，海洋生物特性論，海洋生物学ゼミナール

和田 洋：動物系統解析論A・B，海洋生物特性論，海洋生物学ゼミナール

田名瀬英朋：動物系統解析論A・B，海洋生物特性論，海洋生物学ゼミナール

・他大学・各種学校

白山義久：公開臨海実習夏季・春季，放送大学面接授業

久保田信：公開臨海実習夏季・春季，臨海実習 (大阪市立大学)，生物学臨海実習 (大阪大学)

大和茂之：公開臨海実習夏季・春季，臨海実習II (奈良女子大学)，臨海実験臨海実習演習1・2 (関西学院大学)

宮崎勝己：公開臨海実習夏季・春季，生物実習 (滋賀県立膳所高校)，野外実習A-II臨海実習 (奈良教育大学)，臨海実習 (動物) (和歌山大学)，臨海実習 (兵庫県立尼崎小田高校)

和田 洋：公開臨海実習夏季・春季，生物実習 (滋賀県立膳所高校)

田名瀬英朋：公開臨海実習夏季・春季，放送大学面接授業，臨海実習 (植物) (和歌山大学)，臨海実習 (大阪教育大学)，野外実習A-II臨海実習 (奈良教育大学)，生物学夏季実習 (京都教育大学)

■ 森林ステーション

森林生態研究プロジェクト

森林生態研究プロジェクトは、森林資源の持続的な利用・再生と保全の手法を開発するための生態学的な基礎情報の収集とLTERサイトとしての整備を目的として、2003年春からセンター所属の研究林・試験地において開始された。2003年は研究プロジェクトの立ち上げ年であったことから、各研究林・試験地の自然林において地形測量（5～10m間隔）をともなったプロットの設定と毎木調査（DBH \geq 5cm）を行った。また各研究林・試験地のプロット内の一部（1ha内外）或いは全域に、開口面積が0.5m²の種子回収トラップを定期的に（5～10mに区切られたメッシュの格子点と中央）多数設置した。それぞれの研究林と試験地の自然林タイプと設置されたプロットサイズ及び種子回収トラップ数は以下の表の通りである。

	自然林タイプ	プロットサイズ (ha)	種子トラップ数
北海道研究林・標茶	北方落葉広葉樹林	4.00	221
・白糖	北方針広混交林	3.60	218
芦生研究林	冷温帯針広混交林	6.00	281
和歌山研究林	モミ・ツガ林	4.00	213
上賀茂試験地	ヒノキ林	0.64	145
徳山試験地	暖温帯常緑広葉樹林	0.56	128

森林環境研究プロジェクト

森林環境研究プロジェクトは森林生態系における環境創造機能の定量化を行うために、森林生態系の物質循環からみた環境保全機能の解明、森林流域系の物質収支の把握、森林流域系の水土保持機能の把握を3つの柱とした研究を実施している。それぞれの課題は、各地の研究林（北海道研究林（標茶・白糖）、芦生研究林、和歌山研究林）が所有するわが国を代表する森林生態系を対象として行われ、2003年度にはじめられた。

第1の課題である森林生態系の物質循環からみた環境保全機能の解明として、まだ未解明の部分の多い森林生態系における物質循環の把握と同時に、わが国を代表する森林生態系において成長の制限要因となることの多い窒素に関し、その動態の把握から森林の状態を推察し、現在増加が指摘されている窒素を含む酸性降水の影響について考察することを目的としている。

さらに、森林流域単位での物質収支を明らかにし、酸性雨など人為的な影響に対する森林のもつ環境保全機能についての把握を行っている。さらに、森林の水土保持機能はダムに代わるものとして期待が高まっているが、定量化が十分でないためその評価が難しい。そこで、母材・植生・林齢などの異なる森林集水域を設定し、そこからの水・土砂流出量を測定し、森林のもつ水土保持機能を定量的に把握している。集水域・量水堰堤の設置およびその維持管理には継続的なサポート体制が必要であり、長期にわたり研究目的で森林を管理することができる研究林に求められる研究課題のひとつであるといえる。森林のもつ環境保全機能は気象の年変動などの影響を受け、長期に測定することが望まれ、今後の継続がぜひとも必要である。

森林資源共存研究プロジェクト

森林資源共存研究プロジェクトにおいて設定している課題は以下の通りである。

- ・大課題：地域資源との共存を可能にする森林の管理および利用手法の開発

- ・中課題：地域資源共存型森林管理技術の確立
- ・小課題：「針葉樹人工林の針広混交林化および長伐期大径材生産のための施業体系の確立」

本来、大課題の下に複数の中課題、さらにその下に複数の小課題が設定されることが望ましいわけだが、15年度にスタートし得たのは、ひとつの中課題の下に設定されたひとつの小課題のみであった。こうした現状を招いた理由は、ひとえに担当者の力不足によるものである。この場を借りてお詫びしたい。

さて、上記の小課題は、最終的には以下の2つの目標を達成するために設定している。その目標とは、第一に針葉樹人工林を広葉樹との混交林へ導くための施業体系の確立、第二に長伐期大径材生産のための施業体系の確立である。現在、針葉樹人工林一辺倒の森林造成は見直しを迫られており、造林不成績地を中心に、広葉樹との混交林へ導くための指針が求められている。しかしそれだけでなく、人工林の適切な管理を続けることで、長伐期大径材生産への道を開き、国際競争力のある森林経営も目指さなければならない。現代は、林業経営がきわめて困難な時代であり、これを打開するための指針の作成を目指している。

2003年度には、北海道、和歌山、芦生の各研究林のスタッフにより、これまで重ねられてきた人工林調査の結果の整理が実施された。これを元に、今後各フィールドに新たなプロット設定を行う予定である。針広混交林への誘導に関しては3研究林に、長伐期大径材生産に関しては和歌山研究林でのプロット設定を予定している。

芦生研究林

1921年に旧知井村の九ヶ字共有林の一部(4,179.7ha)に、教育・研究を目的として、99年間の地上権を設定して設置された。北緯35°18'、東経135°43'、標高355～959mに位置し、年平均気温11.7℃、年降水量2,353mmである。冬季には1～2mの積雪がある。京都市の北約35km、福井・滋賀の両県境に接する京都府の東北部に位置し、由良川の源流域にあたる。面積は4,185.6haで、スギを主体とした人工林250ha(人工林率6%)と天然林からなる。天然林のうち1,800haは伐採跡地に再生した森林で、残りは地上権設定以降人の手が加わっていない原生的なものとなっている。気候区分では日本海型と太平洋型の移行帯に位置し、植生区分では暖温帯林と冷温帯林の移行帯にもあたるため、植物の種数が多い。天然林の植生は、標高約600mまでは、コナラ、ウラジロガシ、ソヨゴなどの暖温帯林構成種が見られる。それ以上の標高域ではブナ、ミズナラを主にした冷温帯林構成種が見られ、斜面中腹から尾根周辺には天然生のスギを混じえる。日本海側の多雪地域に特有な種も多い。大規模面積の冷温帯天然林としては西日本で屈指であり、森林生態系の長期的な動態把握を行っている。多様性に富んだ森林は、様々な教育・研究に最適なフィールドであり、社会教育の場としても広く利用されている。

2003年度における芦生研究林の利用者総数は延べ15,426名であった。その内訳は、教育面を主体とした利用者数が全体の10%を占める1,547名(公開講座を含む研究林実験・実習等)、研究を目的とする利用者数が11.3%の1,748名となっており、教育面と研究面の利用者数はほぼ拮抗している。これ以外の社会的側面での森林環境教育・利用とも言える見学・自然観察等やハイキングなどの利用者数は12,114名と全体の78.5%をも占めており、当該研究林の利用部分で最も高い比率となっている。なお、会議・施設調査等の目的で間接的に利用した総数は17名であった。

教 育

教育面(研究林実験・実習等)の申請総数は38件あり、そのうち学内からが21件(農学部：14、総合人間学部：7)、他大学等からが17件(大学：4、高校：6、中学校：2、小学校：3、その他：2)であった。芦生研究林が主体となって実施し、例年多くの参加者を集める公開講座は今年も開催され、初回から数えて今回で13回目となった。

研 究

研究面では51件の申請を受け付けた。このうち学内の利用が38件(農学研究科：30、理学研究科：5、情報学研究科1：人間・環境学研究科1：木質科学研究所1)、他大学等からが5件(大阪大学、島根大学、森林総合研究所関西支所、兵庫県立人と自然の博物館)であった。

社会連携（貢献）

その他の社会活動・利用面（環境教育、自然体験・見学、ハイキング・森林浴等）では40件の申請があった。この中で、美山町立自然文化村と京都府青少年山の家が従来から行っている芦生研究林の原生林観察・ハイキングでは延べ3,475名の利用があった。また、滋賀県側からの団体利用としては、朽木村観光協会、江若交通、森林文化協会大阪事務所などであり、延べ310名の利用があった。芦生の原生的な自然に触れたい、自然を守りたいという一般からの要望が多いため、前年に引き続いてマスコミ・報道機関からの取材申請（毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、京都新聞等）も相当数にのぼった。

近年の社会変化に伴う森林に対する価値や役割の高まり、また一方でその文化的・教育的便益性への認識等を反映して、教育面、研究面、社会利用面（一般利用・社会活動）とも、その利用形態の変化が顕著になってきている。教育・研究面では、利用分野の拡大と利用目的の多様化、小・中・高校の自然学習、森林教育のための情操教育的利用の増加が著しくなっている。社会利用面は、単に森林・樹木の観察学というだけでなく、しっかりした目的をもった利用（指導者の研修・教育等）が増えてきている。ただし、比較的大きな団体や中小グループによる徒歩入林の頻度の増加、無許可での入林者の増加等により、原生的な自然に対する環境負荷や攪乱のリスク、トイレ・ゴミ等の衛生環境の問題、事故・迷い込みなどのさまざまな問題も一方で生じてきている。このような状況に対処していくため、林内に赤外線式のセンサーカウンターを設置し入林者数に関する定常的な調査を行った。

2002年に33林班（事務所構内）に隣接する民有林で確認されたカシノンガキクイムシによるナラ枯れが研究林の林分でも発生した。その後、5・8・9・33林班等でも大径木の枯死や周辺域への広がりが確認され、緊急に演習林長を中心に調査研究チームがつくられ調査と防除に取りかかった。これに対しては大学内で緊急的に予算措置（総長裁量経費：715万円）がとられた。

本研究林では、天然林や人工林における再生・維持機構関連、動物による食害・防除、環境関連、資源管理など、多岐に渡る研究が行われた。

北海道研究林

北海道研究林は標茶区と白糠区からなる。標茶区は1949年に、白糠区は1950年に、いずれも旧陸軍省軍馬補充部用地跡に設置された。標茶区は根釧原野のほぼ中央、釧路湿原の北東端の緩やかな丘陵地に位置する（北緯43° 19'、東経144° 37'、標高30～149m）。面積は1,446.8haで、人工林率は29%、年平均気温は5.7℃、年降水量は1,157mmである。夏季は海霧による日照不足のため湿潤低温で、冬季は乾燥した北西季節風のため気温が-30℃まで低下して季節凍土が発達するなど、気象条件が厳しい。天然林の植生は針葉樹を欠き、ミズナラ、ヤチダモをはじめとする落葉広葉樹からなる。白糠区は、阿寒山群の南端に位置する（北緯43° 01'、東経143° 57'、標高64～270m）。面積は880.4ha、人工林率は14%である。年平均気温は、標茶区と比較すると海岸線に近いためにやや高く7.3℃で、年降水量は1,318mmである。天然林はトドマツ、ハルニレ、ミズナラなどからなる針広混交林で、標茶区に分布しない種も見られる。自然環境の異なる両区を用いて、天然林の動態、森林再生技術の開発等の比較試験が進められ、夏季と冬季には樹木識別、森林計測、雪氷調査法等の実習が行われている。

教 育

全学共通教育：

- ・新入生向け少人数セミナー「北海道東部根釧地方の自然景観」

白糠区研究管理棟を拠点に6名の新入生を迎えて6泊7日のセミナーを実施した。長尾前総長、田中センター長の参加も得て、充実したセミナーを実施することができた。

農学部教育：

- ・演習林（研究林）実習Ⅲ「夏の北海道」と演習林（研究林）実習Ⅳ「冬の北海道」

いずれも農学部森林科学科3回生を対象とするもので、フィールド実習を主とする6泊7日の実習である。夏の実習は山下教授と小崎教授（農学研究科）、冬の実習では田中センター長と3名の院生（TA）の応援を得、それぞれ21名と12名の学生との合宿実習を実施した。

研 究

別記森林系プロジェクト研究を推進するとともに、(1)人工林の施業法に関する研究としてカラマツ人工林間伐試験、(2)天然生林の林分構造とその動態に関する調査、(3)林木の生物被害（野鼠、エゾシカ）調査とその防除法に関する研究等を行った。

社会連携（貢献）

2003年度は所在地住民への知識の還元を主眼とした行事を計7回開催した。標茶区では標茶町教育委員会、標茶小学校、弥栄小学校、中御卒別小学校との共催5回、標津町川北生涯学習センターとの共催1回で、延べ141名の小学生を対象に「ジュニアサイエンス&ものづくり」を開催し、白糠区では町民を対象とした「身近にある自然に対する理解を深めるための自然林観察会」を11名の町民の参加を得て実施した。

和歌山研究林

吉野林業地に比較的近い暖温帯林と冷温帯林の境界域に、研究と実地演習を目的として、1926年に99年間の地上権を設定して設置された。有田川支流の湯川川最上流部に位置し（北緯34° 04′、東経135° 31′）、面積842.0ha、標高455～1,261mにあり、年平均気温は12.3℃、年降水量は2,647mmである。地質は中生層に属し、土壌は比較的肥沃であるが、地形は急峻で、各所に断崖や滝が見られる。天然林は、標高約700～1,000m付近はモミ、ツガが主で一部広葉樹を交えた針広混交林、標高約1,000m以上の稜線に近い部分はブナ、ミズナラ、カエデ類、ヒメシャラなどが優占する落葉広葉樹林である。戦後の拡大造林期に植栽されたスギ、ヒノキを中心に、センター研究林の中で人工林率が52%と最も高い。モミ・ツガ林の動態研究のほか、急峻かつ多雨な条件下における持続的森林資源管理に関する試験研究が行われている。近年では、地元の小・中・高等学校を対象とした森林・林業・環境に関する社会教育活動にも力を入れている。

教 育

2002年度から和歌山研究林において、地元清水町にある有田中央高等学校清水分校の生徒を対象とした正規の授業である“ウッズサイエンス”が開講された。この“ウッズサイエンス”は清水町の主要産業である林業を理解するための林業実習を中心とした“キャリア体験学習”であり、技術職員の協力を得ながら、3年生を対象として進路選択などに役立っている。また、様々な研究課題を通じて、京都大学あるいは他大学の卒業論文や修士論文が作成されている。

研 究

和歌山研究林の特徴として天然性のモミ・ツガ林や高い人工林率が挙げられる。これらの林分を対象として、モミ・ツガ林の調査、スギの過密林分における間伐法の検討が行われた。そのほかの課題として、若齢ミズメ林の成長経過調査、森林集水域における物質循環に関する研究、森林生態系の浄化機能に関する研究、年輪年代法導入例拡大のための基礎研究、紀伊半島下の地下電気伝導率構造の研究など林学・農学にとどまらない多様な研究利用があった。これらの課題を通じて和歌山研究林を利用している研究者の所属も、京都大学のみならず多くの国立・私立大学や研究所にわたっていた。

社会連携（貢献）

一般開放事業としては、例年清水町内の小学生を対象として、“豊かな感性の育成”などを目的とした天然林の観察会が催されている。周囲を山に囲まれた地域ではあるが、日頃は森林に接することが少なくなっている。研究林では森林の働きや人との関わりに関する講義を行って森林に対する理解を深め、森林内を散策しながら樹木の名称を覚えたり、木材や木の実を用いた工作を通じたりして、身近な存在である森を再認識して親しんでもらうよう活動を行っている。

■ 里域ステーション

上賀茂試験地

1926年に設置され、1949年に現在地（北緯35° 04′、東経135° 46′、標高109～225m）に移転した。面積は47.0haで、人工林率は32％である。年平均気温は14.6℃、年降水量は1,582mmである。面積の60％を占める天然林は、1970年代以降にマツ枯れでアカマツが激減し、コナラ、ソヨゴなどの広葉樹と林齢100年前後のヒノキの混交林へと遷移している。設置当初から、世界各地の植物園、研究所など（現在、約120機関）との相互協力のもとに種子交換を行い、多くの外国産樹種の導入育成による樹木園造成を進めてきた。特にマツ属の収集と育成に重点が置かれた。現在は、樹木園および見本林園の再整備を進め、マツ属の成長量や気象の観測など基礎データを蓄積するとともに、二次林の成長量、植生変化についても調査している。本学から北に5kmと交通至便で、森林科学、生物学分野を始め、幅広い分野の試験研究および実習の場として、他大学、他機関からも数多く利用されている。

2003年度は教育18件（フィールド研2、農学部4、他学部3、他大学5、一般4）、研究47件（フィールド研5、農学部25、他学部9、他大学6、一般2）、社会貢献9件＋113名の申請を受け入れた。延べ利用者総数は2,693人であった。

教 育

教育ではフィールド研、農学部の教員が指導する森林科学や土壌学の実習が行われた。この中には、毎年恒例の森林科学科新生ガイダンス及び歓迎会が含まれている。この実習は大学院も含めて、入学式後の最初の土曜日に設定される。講義室で学科長や専攻長によるガイダンスが行われ、その後試験地の見本林や樹木園の見学や各研究室のスタッフによる研究室紹介が池の横の芝生で盛大に繰り広げられる。学生諸君にとっては、印象的な会のように、社会に出た卒業生がいつも懐かしがる実習である。他学部では理学部、総合人間学部、地球環境学堂、他大学では京都造形芸術大学、京都府立大学、京都精華大学によるそれぞれのテーマに沿った実習が行われた。また、大阪教育大学附属高校による「樹木がわかる林学実習」もあった。

研 究

研究ではフィールド研、農学部の利用申請が約6割を占めた。利用は主に大学院生であり、大学院生の博士論文や修士論文の作成のための利用や学部生の卒業論文や課題研究のための利用は、大学ならではの利用形態で、教育かつ研究利用と言えるであろう。年間155日、117日など1年のおよそ半分や3分の1を上賀茂試験地に出向いて研究をした大学院生がいた。他学部では理学部、情報学研究科、地球環境学堂、人間・環境学研究科、他大学では数は少ないものの、大阪大学、名城大学、東京大学、北海道大学など全国の大学の利用があった。この他、ナラ枯れに関連する調査（京都府林業試験場）や試験地を含んだ地域の環境調査（総合地球環境学研究所）などがあった。

社会連携（貢献）

社会貢献では開始から6年目になる上賀茂試験地一般公開自然観察会が11月に実施された。定員50名を越える応募があり、参加者は59名となかなか盛況である。見学の利用も京都そぞろ歩きの会、兵庫森林林業技術センター、茨城県林業技術センター、滋賀県立琵琶湖博物館、岡山市半田山植物園など全国からあった。このほか、一般入林者として113名の利用があった。最近、利用のルールを守らない一般利用者が多くなっている。一般利用は利用のルール・注意事項を読んで、それを守る人が入林簿に必要事項を記入することになっている。どこの森林でもマナーの低下が心配されているが、十分な利用法の周知とルールの徹底が必要になってきている。

徳山試験地

徳山試験地の前身は、1931年に設置された徳山砂防演習地である。1942年に砂防演習地の移転の際、徳山試験地として設置され、1966年に現在地（北緯34° 04′、東経131° 50′）に移転した。面積は41.9ha、標高は102～351mで、比較的急斜面が多い。気候区分は瀬戸内型で、年平均気温は15.2℃、年降水量は1,911mmで梅雨期に集中し、早春と夏季の乾燥が著しい。人工林率は49％で、その4割は移転以前に植栽された林齢70年以上のヒノキ林である。照葉樹林帯に属す

るが、面積の45%を占める二次林にはアカマツと落葉広葉樹が混交する。産地、系統別に植栽されたマツ属の生育比較試験や、マツ属の病虫害に対する抵抗性に関する研究が行われてきた。現在は、文化財建造物の補修用資材として必要とされながらも資源の枯渇が懸念されている桧皮（ひわだ）について、桧皮の生産と、剥皮が幹の成長および材質に及ぼす影響に関する調査が進められている。瀬戸内地域にわずかに残された天然生の照葉樹林の植生動態についての研究も行われている。

教育・研究・地域貢献

7月21日～23日まで、徳山試験地と室積海岸を訪ねて試験地及び周辺の自然の理解を目的としたポケットセミナーが開催された。内容は、かつて薪炭林として伐採を受けたところが萌芽更新によって根本から数本に分岐して生長し林冠が閉鎖するまでに植生が回復している試験地内にある照葉樹林の巡検、試験地内にある70年生ヒノキ人工林において行われている桧皮の剥皮試験林の見学、また今では瀬戸内海域で唯一と言ってよい室積海岸（山口県南東部の瀬戸内海に面したところにある）にある照葉樹林の原生的な自然植生の巡検、というものであった。その他には、地元小学校の遠足の一環として、試験地内の樹木園の見学などの利用があった。

研究利用に関しては7件の申請があり、マツの材線虫関連、低木種の繁殖生態、人工林の資源管理、自然災害関連、桧皮の剥皮試験など、京都大学に限らず、他大学からの利用もあった。その他、試験地内の天然林における30年に渡って追跡されている森林植生の回復・動態調査が行われた。

北白川試験地

農学部が創設された翌年の1924年に、林学科（現・森林科学科）の苗畑として、本学北部キャンパスの北東部（北緯35° 02'、東経135° 47'、標高60m）に設置された。面積は1.3haで、そのうち苗畑が0.3ha、見本園が0.7haを占める。年平均気温は15.1℃、年降水量は1,465mmである。亜寒帯から暖温帯下部に至る国内産250種と、外国産170種（アジア・オセアニア原産100種、欧州・北米原産70種）、その他栽培品種80種の計500種が見本樹として植栽されている。国内の植物さく葉標本3万3千点が標本室に保存されており、また材鑑室には、各研究林および試験地から集められた裸子植物4科20種、被子植物34科86種の材鑑標本が収められている。森林科学を始めとする生物系分野の樹木観察などの実習や、苗畑や温室を用いた動植物の試験研究に多く利用されている。

教 育

京都大学北部構内に位置する本試験地（1.40ha）は、センターの施設としては唯一キャンパス内にある。0.32haの実験苗畑と0.70haの見本園を有し、実験苗畑では各種の試験研究・調査が行われ、見本園は身近に樹木識別実習ができる貴重な存在となっている。

2003年度の教育・研究利用者は延べ1,464名であった。内訳は教員が160名、学生が1,304名であった。教育利用は6件、138名で、森林科学科、地域環境工学科、食品生物科学科、応用生命科学科の主に樹木識別実習として活用された。研究利用は農学部を主体に1,326名、32の研究テーマの申請を受けた。その主な内容はマツ材線虫病、植生のLAIおよび水ストレスの計測、物質循環と動植物の相互作用システム、樹木の硝酸同化、ツツジ族の半常緑性の意義、あて材や木部細胞形成、土壌水の採取方法など、多岐に及ぶ。教育・研究の場として、益々その活用度が高まるものと思われ、本年度は主に苗畑の整備を行った。

研 究

本試験地は1923年の農学部設置の翌年に林学苗畑として出発し、当初から見本園が計画された。1990年の全域調査では79科204属500種が確認された。しかし植栽樹木によっては老齢化・高木化あるいは高密度化による農場等の構内施設や周辺民家への影響も否めない。本年度は一部大径木を伐採、剪定した。今後は後継樹木の育成が課題である。

社会連携（貢献）

本試験地は京都大学北部構内に緑を提供する憩いの場であり、見学・自然観察を目的に利用する本学関係者や一般市

民も多い。本年度のオープンキャンパスでは受験生92名の参加があった。

紀伊大島実験所

紀伊半島南端串本町潮岬の東1.5kmにある紀伊大島中央部の須江地区（北緯33° 28'、東経135° 50'、標高約100m）に位置する。1937年に大島暖帯植物試験地として設置された後、1967年に亜熱帯植物実験所と改称された。面積は11.8haである。暖流黒潮の影響を強く受け、気候は温暖で年平均気温は16.9℃、年降水量は2,500～2,600mmである。所内の自然植生は、スダジイやヤマモモ、ヤブニッケイ、タブノキなどの多種多様な照葉樹とその林縁および林床植物からなる。実験所全体が和歌山県鳥獣保護区に指定され、鳥類や昆虫類も種類が豊富である。また、観賞用ツバキと花ウメ系統を自然樹形で多数保存している。通時プロジェクトとして紀伊大島生物相の史的解明、教官研究として照葉樹林文化圏と黒潮文化圏における資源植物複合の*on situ*保全、伝統的管理水田における希少雑草の動態に関する研究を進めている。他研究機関との共同研究のほか、本学院生学生対象の授業やセミナー、地元住民を対象とした観察会や講演会も随時行われている。

■ 海域ステーション

舞鶴水産実験所

1972年、京都市に移転した農学部水産学科の跡地に設置された。面積は2.0ha、北緯35° 29'、東経135° 22'にあり、年平均気温は14.3℃、年降水量は1,786mmである。京都大学から北北西64kmに位置する。海の生き物と環境に関する多面的な研究を展開しており、沿岸に暮らす魚類・海藻類・無脊椎動物の生活史や環境との関わりについての野外研究と飼育実験の研究、ならびに魚類の系統分類学的研究を主に行っている。特に、ヒラメなど浅海域を成育場とする魚種や、スズキなどの海と川を行き来する両側回遊性魚種については国内有数の研究拠点である。日本海側で唯一の大学附置水産実験所であり、国内外の研究者の研究拠点として、さらに理科系教員ならびに他大学学生の実習拠点としても広く利用されており、関連試験研究機関と連携した研究も積極的に進めている。また、地域には大学がないことから社会教育に貢献すべく、市民を対象とした公開講座や見学会を開催している。

実験所の業務は、1)大学院生および学部学生に対する沿岸環境学や海洋生物学の教育、2)実験所のスタッフによる研究活動、3)他大学や他研究機関の研究者に対して研究のための機材と場を提供することなどである。また、実験所に滞在して調査研究を行う必要のある学生および研究者は宿泊設備も利用できる。

研究棟

2002年3月に完成。一階には試料処理室、分析実験室、資材室、軽工作室を備え、二階には教官・学生・外来研究者の研究室を備える。

飼育棟

2002年3月に完成。4つの恒温室と大型水槽室からなり、試料固定室や資材室を備えている。別棟のろ過室で5μmまでろ過した清浄海水が供給される。

実習宿泊施設

臨海実習ならびに長期滞在大学院生などの宿泊施設として、1984年1月に完成。2段ベッド4個の宿泊室が5部屋の他に、教官ならびに外来研究者用宿泊室3部屋を備えている。また食堂施設も設置され、例年利用者が多い4月から11月まで昼食と夕食のサービスがある。

実習調査研究船

フィールドの調査研究及び臨海実習には、緑洋丸と白浪丸が利用されている。

緑 洋 丸：1990年3月竣工

FRP製、全長16.5m、幅4.0m、ディーゼル370馬力、総トン数18トン、最大速力21。25ノット、最大搭載人員30名。

主要装備：ADCP、ジャイロ、自動操舵装置、レーダープロッタ、DGPS、魚群探知機、漁労ウィンチ、観測ウィンチ

白 浪 丸：1980年3月竣工

FRP製、全長12m、ディーゼル40馬力、総トン数4.6トン、最大速力12ノット、最大搭載人員12名。

主要装備：レーダー、GPS、魚群探知機、漁労ウィンチ

その他に、船外機付き伝馬船2隻、手漕ぎボート3隻

年間延べ利用者数

利用年度	農学部学生	農学研究科 修士課程 院 生	農学研究科 博士課程 院 生	他研究科 他 学 部 学 院 生	本学教職員	他大学 教職員 学 生	他研究機関	合 計
2000	547	2116	2817	209	165	266	637	6757
2001	607	1896	2159	501	190	452	242	6047
2002	687	1641	2318	675	219	353	914	6807
2003	883	1153	1115	523	297	465	624	5060

実 習

京都大学農学部 海岸生物科学技術論と実習	(20名)	2000.7.18-8.1
大阪教育大学教育学部 生命科学実験I	(17名)	2000.8.7-11
京都大学農学部 水理学実験	(30名)	2000.9.4-7
京都大学農学部 海岸生物科学技術論と実習	(36名)	2001.7.24-8.7
大阪教育大学教育学部 生命科学実験I	(17名)	2001.8.8-12
岐阜大学教育学部 臨海実験法	(14名)	2002.8.20-25
京都大学農学部 水理学実験	(23名)	2002.9.3-6
京都大学少人数セミナー 海洋環境と生物資源	(7名)	2002.7.5-8
大阪教育大学教育学部 生命科学実験I	(16名)	2002.8.5-9
岐阜大学教育学部 臨海実験法	(12名)	2002.8.8-13
京都大学農学部 海岸生物科学技術論と実習	(42名)	2002.8.19-30
京都大学農学部 水理学実験	(25名)	2002.9.2-5
京都大学大学院地球環境学堂、学舎（舞鶴野外実習）	(11名)	2002.9.17-20
東京水産大学水産学部	(12名)	2002.11.25-29
京都大学少人数セミナー 海洋環境と生物資源	(9名)	2003.7.11-13
京都教育大学附属高等学校 臨海実習	(49名)	2003.7.28-8.1
京都大学森里海連環学実習	(14名)	2003.8.6-9
京都大学農学部 海洋生物科学技術論と実習	(34名)	2003.8.20-9.2
京都大学農学部 水理学実験	(33名)	2003.9.8-11
大阪教育大学教育学部 生命科学実験I	(23名)	2003.9.16-20
岐阜大学教育学部 臨海実習	(16名)	2003.9.25-30

舞鶴水産実験所船舶運航表
 緑洋丸（船長 佐藤一夫，甲板責任者 上野正博）

年 月 日	調 査 名	代表研究者	所 属	
2003 年	2 月 3 日	舞鶴湾重金属分布調査	新井 崇臣	東大海洋研
	2 月 4 日	舞鶴湾重金属分布調査	新井 崇臣	東大海洋研
	4 月 9 日	視察	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	5 月 1 日	メバル稚魚採集	山下 洋	舞鶴水産実験所
	5 月 6 日	アマダイ飼育実験用採泥	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	5 月 7 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
	5 月 14 日	コノシロ卵採集	田中 克	京大農学研究科
	5 月 19 日	コノシロ卵採集	田中 克	京大農学研究科
	5 月 22 日	採卵用アジ親魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	5 月 23 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
	5 月 29 日	採卵用アジ親魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	6 月 5 日	採卵用アジ親魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	6 月 12 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	6 月 13 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
	6 月 17 日	採卵用アジ親魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	6 月 18 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
	6 月 23 日	採卵用アジ親魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	6 月 26 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	6 月 30 日	アジ親魚捕獲	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	7 月 1 日	ヒラメ稚魚採集	田中 克	京大農学研究科
	7 月 7 日	アミ採集	青海 忠久	福井県立大
	7 月 9 日	ヒラメ稚魚採集	田中 克	京大農学研究科
	7 月 10 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	7 月 17 日	採卵用アジ親魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	7 月 25 日	アミ採集	青海 忠久	福井県立大
	7 月 28 日	ヒラメ稚魚採集	田中 克	京大農学研究科
	7 月 29 日	磯調査（京都教育大付属校）	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	7 月 30 日	環境マネジメントセミナー	今井 一郎	京大地球環境
	7 月 31 日	磯調査（京都教育大付属校）	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	8 月 1 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	8 月 5 日	アジ幼稚魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	8 月 7 日	森里海連関実習（海洋観測・磯調査）	山下 洋	舞鶴水産実験所
	8 月 11 日	アジ幼稚魚採集	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
	8 月 18 日	遠隔生態観測システム水中テスト	森 義昭	京大メディアセンター
	8 月 19 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	8 月 21 日	臨海実習（海洋観測）	藤原 建紀	京大農学研究科
	8 月 22 日	臨海実習（磯調査）	鯨坂 哲朗	京大農学研究科
	8 月 29 日	臨海実習（海洋観測）	山下 洋	舞鶴水産実験所
	9 月 1 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	9 月 19 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
	10 月 7 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
	10 月 10 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	10 月 20 日	アラメガレイ稚魚採集	青海 忠久	福井県立大
10 月 22 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所	
11 月 6 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所	
11 月 19 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所	
12 月 9 日	視察（フィールド研職員）	益田 玲爾	舞鶴水産実験所	
12 月 25 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所	
2004 年	1 月 30 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	2 月 13 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	3 月 9 日	底生生物調査	上野 正博	舞鶴水産実験所
	3 月 25 日	クロソイ稚魚採集	山下 洋	舞鶴水産実験所

舞鶴水産実験所船舶運航表
ブルーフィン（船外機船 船長 佐藤一夫）

年 月 日	調 査 名	代表研究者	所 属
2003 年 1 月 17 日	メバル追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
1 月 20 日	メバル追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
2 月 5 日	舞鶴湾環境調査	盛田 孝一	東大海洋研
2 月 7 日	メバル追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
3 月 11 日	メバル追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
3 月 20 日	水中撮影	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
3 月 24 日	水中撮影	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
4 月 16 日	メバル追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
6 月 25 日	メバル追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
8 月 11 日	アカアマダイ追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
8 月 12 日	アカアマダイ追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
8 月 13 日	アカアマダイ追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
8 月 15 日	アカアマダイ追跡調査	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
8 月 16 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
8 月 20 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
8 月 25 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
9 月 8 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
9 月 9 日	キジハタ生態調査	松田 克洋	京大農学部
9 月 11 日	キジハタ生態調査	松田 克洋	京大農学部
9 月 16 日	キジハタ生態調査	松田 克洋	京大農学部
9 月 17 日	キジハタ生態調査	松田 克洋	京大農学部
9 月 18 日	キジハタ生態調査	松田 克洋	京大農学部
9 月 24 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
10 月 1 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
10 月 7 日	アカアマダイ追跡調査	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
10 月 8 日	アカアマダイ追跡調査	三田村 啓理	京大院情報
10 月 14 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
10 月 15 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
10 月 16 日	アカアマダイ追跡調査	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
10 月 27 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
11 月 13 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
11 月 17 日	アカアマダイ追跡調査	益田 玲爾	舞鶴水産実験所
11 月 18 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
11 月 20 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部
12 月 15 日	アカアマダイ追跡調査	横田 高士	京大農学部

舞鶴市民「夏休み まいづる 水の旅」	(90 人 益田)	2000.7.21
舞鶴ロータリークラブ 施設見学	(120 人 益田)	2000.10.22
舞鶴市立吉原小学校 施設見学	(28 名)	2000.11.10
福井県立小浜高等学校 施設見学	(24 名 益田)	2001.5.9
舞鶴市夏季教頭研究会 施設見学	(40 名 益田)	2001.8.22
京都府立海洋高等学校 施設見学・授業	(23 名 益田・上野)	2001.11.21
水産実験所30周年記念講演会 舞鶴市商工観光センター	(120 名)	2002.4.19
産経新聞 くかがやき未来塾夏休み特別版 「神秘の島と海の力－日本海体験スクール」>	(30 名)	2002.7.23
舞鶴市民「夏休み 海からの見学会」	(50 人 益田)	2002.7.31
舞鶴市小学校教育研究会 施設見学	(24 名 益田)	2002.8.19
四明ほろにが会（京都大学農学部OB）施設見学	(30 名)	2002.8.9

舞鶴市立城北中学校総合学習講師	(上野)	2002.10.4
社会福祉法人みずなぎ学園 施設見学	(10人 益田)	2002.10.17
京都府生物教育会 講義・実習・施設見学	(200名 益田)	2002.10.19
舞鶴市立三笠小学校 施設見学	(79名)	2002.10.25
舞鶴市立中舞鶴小学校 施設見学	(202名)	2002.11.8
京都府立海洋高等学校 施設見学	(200名 益田・上野)	2002.11.20
ミニシンポジウム：クラゲと魚と人の営み	(20名 益田)	2003.1.22
舞鶴市立新舞鶴小学校 施設見学	(128人)	2003.4.22
京都府立高等学校家庭科研究会 講演	(10名 上野)	2003.8.4
京都大学生生活協同組合 施設見学	(40名 益田)	2003.10.18
京都府立海洋高等学校 施設見学	(23名 益田)	2003.11.14
京都府綾部地方振興局 H15年消費生活講座	(40名 上野)	2003.11.21
舞鶴地域産学連携セミナー舞鶴商工観光センター	(山下・益田・上野)	2003.12.19

瀬戸臨海実験所

1922年、理学部附属臨海研究所として、紀伊半島西岸の田辺湾口に位置する番所崎桔梗平と呼ばれた場所（北緯33°41′、東経135°20′）に設置された。敷地4.1ha、島実験地2.7ha、建物5,680m²からなる。周辺の気候は温暖で、冬季の平均気温は7℃前後であり、夏季は27℃前後まで上がる。降水量は梅雨時と台風シーズンに特に多い。付近の海域は、黒潮分流の影響を強く受けており、周辺の表面水温は年平均で約20℃である。冬季でも12℃以下になることは稀であり、一方で夏季も29℃を越えることはほとんどない。表面水の塩分は31～35psuで、透明度は約8m、潮位差は1.4～2.0mに達する。周辺の海岸・海中の多様な景観や、そこに見られる豊富な生物相は、現在も比較的良好に保護されており、所員や外来研究者（延べ約1,500人・日）による研究、学内外の臨海実習（延べ約1,500人・日）などに利用されている。

主要建物

研究棟：鉄筋コンクリート二階建て（1,232m²）。教員・学生等のオフィスの他、各種実験室、生物実習室、外来研究室、飼育室等を備える。

図書資料保管庫：鉄筋コンクリート平屋建て（198m²）。書庫、閲覧室等を備える。

特別研究室：木造平屋建て（173m²）。保存建物。実験室、資料室等を備える。

宿泊棟：鉄筋コンクリート二階建て（588m²）。宿泊室（10室）等を備える。宿泊定員50名。

実験水槽室：鉄筋コンクリート三階建て（2,701m²）。水槽室（一般有料公開部分（水族館）を含む）、事務室、技官室等を備える。

主要研究機器

透過型電子顕微鏡、走査型電子顕微鏡、凍結乾燥装置、各種光学顕微鏡、万能投影機、水中カメラ、STDセンサー、CNコーダ、恒温培養装置、DNAシーケンサー、ディープフリーザー、ドラフトチェンバー、精密秤等。

蔵書

2003年度末現在、単行本として、和書1,038冊・洋書4,112冊を所蔵している。特に海洋探検報告・無脊椎動物分類学の分野が充実している。同じく雑誌は、和雑誌789タイトル・洋雑誌1,643タイトルを揃える。特に1930年以降の海洋生物関係の雑誌は、ほぼ完備している。

船舶等

ヤンチナ3：1988年3月進水。FRP製、全長11.25m、幅2.60m、深さ1.06m、ディーゼル164馬力、総トン数3.0トン、最大速力25ノット、巡航速力20ノット、最大搭載人員23名。電動巻上機、GPS航法装置、カラー魚群探知

機等を装備する。

ゾエアⅡ：1979年1月進水。FRP製和船、全長4.82m、幅1.45m、深さ0.59m、ガソリン9.5馬力、総トン数0.93トン、最大搭載人員5名。

他にFRP製手漕ぎボート2隻、ワゴン車2台、トラック1台を所有する。

出版物

・ Publications of the Seto Marine Biological Laboratory

海洋生物学に関する学術論文を掲載する英文定期刊行物。1949年創刊。各巻約400ページで、2003年度までにVol. 39まで発行済み。発行部数は480部で交換のみで配布する非売品。

・ Special Publication Series

Publications of the Seto Marine Biological Laboratoryの不定期版。旧名Special Publications from the Seto Marine Biological Laboratory Series。Vol. Iは1958年発行。2003年度までにVol. VII (Supplement) (2004)まで発行。

・ 瀬戸臨海実験所年報

和文の実験所年報。1987年創刊。年1巻発行。各巻約40ページで、2003年度までに第16巻まで発行。

実 習

2003年度

(学校・実習科目・実習期間・受講学生数)

京都大学理学部生物系臨海実習Ⅰ	8/7-8/14	延112人・日
京都大学理学部生物系臨海実習Ⅰ	9/7-9/14	延 48人・日
京都大学理学部生物系臨海実習Ⅱ*	3/21-3/27	延 70人・日
京都大学理学部生物系臨海実習Ⅲ*	3/15-3/20	延 54人・日
京都大学理学部生物系臨海実習Ⅳ	8/7-8/14	延 32人・日
京都大学理学部海洋無機分析実習	7/21-7/23	延 48人・日
京都大学全学共通科目生物学実習Ⅱ	2/20-2/23	延 80人・日
京都大学防災研究所地球惑星科学専攻実習	9/15-9/16	延 44人・日
京都大学大学院人間・環境研究科海洋化学・水圏化学実習	8/4-8/7	延 52人・日
京都大学ポケット・ゼミ「紀伊半島南部の里域生物相調査」	10/22-10/24	延 24人・日
京都大学瀬戸臨海実験所公開臨海実習	9/7-9/14	延 72人・日
京都大学瀬戸臨海実験所公開臨海実習	3/16-3/22	延126人・日
和歌山大学教育学部臨海実習(植物)	4/17-4/21	延 30人・日
奈良女子大学理学部臨海実習Ⅱ	5/13-5/18	延 96人・日
大阪教育大学教育学部教員養成課程臨海実習	5/29-6/3	延 90人・日
放送大学面接授業	6/14-6/15	延 40人・日
奈良教育大学教育学部野外実習A-II臨海実習	6/16-6/20	延 60人・日
和歌山大学教育学部臨海実習(動物)	6/29-7/3	延 30人・日
大阪市立大学大学院理学研究科臨海実習	7/13-7/19	延154人・日
滋賀県立膳所高等学校第34回生物実習	7/25-7/28	延 76人・日
大阪大学大学院理学研究科生物学臨海実習	7/30-8/4	延108人・日
信州大学理学部計測化学特論実習	8/4-8/7	延 24人・日
兵庫県立尼崎小田高等学校臨海実習	8/18-8/20	延 18人・日
関西学院大学理工学部臨海実験臨海実習演習(1.2)	8/21-8/25	延115人・日
京都教育大学生物学教室生物学夏季実習Ⅱ	8/26-8/30	延 65人・日
滋賀大学教育学部臨海実習	9/4-9/7	延 96人・日

大阪千代田短期大学幼児教育学科磯観察実習

10/7-10/9 延 48人・日

龍谷大学環境フィールドワーク臨海実習

3/8-3/11 延 72人・日

*前年度末に実施

(計)	京都大学	10件	延 564人・日
	公開臨海実習	2件	延 198人・日
	他大学国立	9件	延 599人・日
	公立	1件	延 154人・日
	私立	3件	延 235人・日
	その他	3件	延 134人・日
(総計)		28件	延1884人・日

月	有 料						無料	前年度 有 料
	個人		団体		計			
	大人	小人	大人	小人	名	円	名	名
4	3,081	542	175	2	3,800	1,678,990	0	3,995
5	3,446	435	115	468	4,464	1,850,680	38	5,059
6	2,303	206	25	20	2,554	1,186,610	0	3,058
7	4,153	883	139	97	5,272	2,242,000	100	4,709
8	8,388	2,784	20	94	11,286	4,514,880	15	11,119
9	3,491	331	59	0	3,881	1,808,460	0	4,223
10	2,598	234	202	329	3,363	1,435,380	43	3,293
11	2,801	352	326	245	3,724	1,600,620	14	3,136
12	1,525	166	26	0	1,717	792,460	0	2,101
1	2,452	311	30	0	2,793	1,273,710	0	2,878
2	2,714	266	76	6	3,062	1,420,820	0	2,736
3	4,012	681	0	135	4,828	2,089,010	42	5,265
計	35,969	7,191	1,193	1,396	50,744	21,893,600	252	51,572

上記の集計には、臨海実習等実験所を利用した学生や教官、ならびに外来研究者等の来訪者は含まれていない。

利用者数

2003年度

学内	66名	232日	(内外国人	2名	4日)
他国立大学	83名	468日	(内外国人	4名	39日)
公立大学	7名	33日	(内外国人	0名	0日)
私立大学	72名	101日	(内外国人	0名	0日)
公立研究所・博物館	2名	8日	(内外国人	1名	6日)
国内その他	68名	262日	(内外国人	0名	0日)

小計 298名 1104日 (内外国人 7名 49日)

国外 11名 28日

合計 309名 1132日

■ コレクション・附属施設の紹介

斧蛇館（芦生研究林）

1992年4月に事務所構内に開設された。芦生研究林の森林や林業に関係した資料や道具を集め、展示している。芦生研究林の沿革、植生、地形や気象の概況を始めとして、世界の森林の解説、主要樹種の材鑑、ツキノワグマやクマハギについての解説がある。さらに、ツキノワグマ・カモシカなどの大型動物や鳥類の剥製、マムシなどの標本、木材生産・製炭事業等の林産物生産の記録、木地師が作ったと伝えられる杓子などの製品も展示されている。

樹木園と標本館（上賀茂試験地）

これまで上賀茂試験地で導入が試みられた外国産樹種は4,300種に及ぶが、半数は発芽に至らず、現在生育しているのはツツジ科、バラ科、マツ属など99科、350属、約750種である。マツ属は世界各地に分布する約100種のうち85種が生育している。タケ類も14属88種があり、モウソウチクにおける67年目の開花が確認されるなど、タケ類の開花周期の観測も行われている。「竹の家」とも呼ばれる標本館には、第二次世界大戦以前に収集された樹木の材鑑標本や木材標本など5千点、種子標本が700点など、約1万点の標本を有する。マツ類の球果・種子・針葉が系統的に整理されているほか、モウソウチクの地下茎の形態標本や世界各地のタケ程や竹製品の収集がある。

紀伊大島植物標本室（紀伊大島実験所）

塚本洋太郎博士によって1940年前後に採集された紀伊大島高等植物およびシダ植物標本（約100点）と、1997～1999年に紀伊大島で採集された高等植物、シダ植物およびコケ植物標本（重複証拠標本、888点）が保管されている。また、紀伊大島の伝統的生業道具も蒐集、保管されている。

水産生物標本館（舞鶴水産実験所）

魚類を中心に水産生物標本を収蔵する建物として1984年1月に完成し、わが国では最大の30万点の魚類標本を所蔵している。日本近海に分布する魚類はほぼ網羅（3千種、5万点）し、広義のサバ型魚類については世界最大（90種、5千点）のコレクションを有する。さらに、南米、アフリカ、ニュージーランド近海の底魚（500種、5万点）コレクションも世界屈指である。また、海藻標本（400種、1万点）は日本海沿岸に分布する種をほぼ網羅している。これらの標本は系統順に標本室に配列されており、博物館として研究者だけではなく一般にも公開されている。

水族館（瀬戸臨海実験所）

1930年から一般公開（有料）されており、わが国の臨海実験所が運営する水族館としては、唯一、博物館法による博物館相当施設の指定を受けている。展示水槽は230トン級1槽をはじめとして計53槽約464トンからなる。飼育生物は、和歌山県沿岸に生息する海産動物を中心として展示しており、無脊椎動物の展示は特に充実している。2003年の年間飼育動物は、無脊椎動物364種、魚類251種、総計8,014点以上にのぼる。差支えない範囲で、飼育生物を生態観察や実験材料として研究者に供給している。また、実験用水槽設備の提供や、実験材料の採集・ストックにも応じている。

畠島（瀬戸臨海実験所）

畠島は、田辺湾の南東部に位置し、1968年に実験地として取得された。島内は多彩な地形・底質からなり、生物相も多様性に富んでおり、ここだけで湾内一帯の海岸生物相を一通り観察できる。このため、学内外の臨海実習に広く活用されるとともに、田辺湾生物相の長期的な変動に関する研究の拠点として重要な役割を果たしている。1960年代より、毎年のウニ類の定点観測や、5年毎の畠島全島調査などが継続して実施されている。最近では、島の陸上植物相に関するモニタリング調査も紀伊大島実験所と共同で始められている。

京都大学フィールド科学教育研究センター規程

第一条 この規程は、京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。

第二条 センターは、フィールド科学に関する教育研究を行うことを目的とする。

第三条 センターに、教育研究部及び管理技術部を置く。

2 教育研究部に次の部門を置く。

企画研究推進部門

森林生物圏部門

里域生態系部門

基礎海洋生物学部門

第四条 センターに、センター長を置く。

2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。

3 センター長の任期は、二年とし、再任を妨げない。

4 センター長は、センターの所務を掌理する。

第五条 センターに、その重要事項を審議するため、協議委員会を置く。

2 協議委員会に関し必要な事項は、別に定める。

第六条 センターに、その運営に関する事項についてセンター長の諮問に応ずるため、運営委員会を置く。

2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

第七条 センターの事務組織については、京都大学分課規程（平成十二年達示第十号）の定めるところによる。

第八条 この規程に定めるもののほか、センターの内部組織については、センター長が定める。

附 則

この規程は、平成十五年四月一日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター協議員会規程

第一条 この規程は、京都大学フィールド科学教育研究センター規程（平成十五年達示第八号）第五条第二項の規定に基づき、フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の協議員会に関し必要な事項を定めるものとする。

第二条 協議員会は、次の各号に掲げる協議員で組織する。

- 一 センター長
 - 二 センター所属の専任の教授
 - 三 前二号以外の京都大学の教授のうちから、協議員会の議を経てセンター長の委嘱した者 若干名
- 2 第一項第三号の協議員の任期は、二年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の協議員の任期は、前任者の残任期間とする。

第三条 センター長は、協議員会を招集し、議長となる。

- 2 センター長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名した協議員が前項の職務を代行する。

第四条 協議員会は、協議員（海外渡航中の者を除く。）の過半数が出席しなければ、開くことができない。

- 2 協議員会の議事は、出席協議員の過半数で決する。
- 3 前二項の規程にかかわらず、協議員会の指定する重要事項については、協議員（海外渡航中の者を除く。）の三分の二以上が出席する協議員会において、出席協議員の四分の三以上の多数で決する。

第五条 協議員会の事務を処理するため、協議員会に幹事を置き、事務官を充てる。

第六条 この規程に定めるもののほか、協議委員会の運営に関し必要な事項は、協議員会が定める。

附 則

この規程は、平成十五年四月一日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター運営委員会規程

第一条 この規程は、京都大学フィールド科学教育研究センター規程（平成十五年達示第八号）第六条第二項の規定に基づき、フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の運営委員会に関し必要な事項を定めるものとする。

第二条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 センター所属の教官のうちからセンター長の命じた者 若干名
- 二 前号以外の京都大学の専任の教官のうちからセンター長の委嘱した者 若干名
- 2 前項第二号の委員の任期は、二年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第三条 センター長は、運営委員会を招集し、議長となる。

- 2 センター長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名した委員が前項の職務を代行する。

第四条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、開くことができない。

第五条 運営委員会に必要な応じて専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会の委員は、運営委員会の議に基づきセンター長が委嘱する。

第六条 運営委員会は、必要があるときは、委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

第七条 運営委員会の事務を処理するため、運営委員会に幹事を置き、事務官を充てる。

第八条 この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し必要な事項は、運営委員会が定める。

附 則

この規程は、平成十五年四月一日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター長候補者選考規程

第一条 フィールド科学教育研究センターのセンター長候補者の選考については、この規程の定めるところによる。

第二条 センター長候補者は、京都大学の専任の教授のうちから、フィールド科学教育研究センターの協議員会において選出する。

第三条 前述の協議員会は、協議員（海外渡航中の者を除く。）の三分の二以上の出席を必要とする。

第四条 センター長候補者の選出は、出席協議員の単記無記名投票による選挙によって行う。

第五条 投票における過半数の得票者を当選者とする。

2 前項の投票において過半数の得票者がいないときは、得票多数の二名について決選投票を行い、得票多数の者を当選者とする。ただし、得票同数のときは、年長者を当選者とする。

3 第一項の投票の結果、得票同数の者があることにより決選投票における被投票者の二名を定めることができないときは、年長者を先順位として定める。

4 決選投票には、被投票者は加わらないものとする。

第六条 センター長候補者の選出を行う協議員会は、センター長の任期満了による場合には満了の日の三十日以前に、その他による場合には速やかに開催するものとする。

第七条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、協議員会の議を経てセンター長が定める。

附 則

1 この規程は、平成十五年四月一日から施行する。

2 フィールド科学教育研究センター設置後初めて任命されるセンター長の選考については、この規程にかかわらず、京都大学フィールド科学教育研究センター設置準備委員会の推薦する候補者について、総長が行うものとする。

京都大学フィールド科学教育研究センターの内部組織に関する内規

第1条 この内規は、京都大学フィールド科学教育研究センター規程（平成15年達示第8号、以下「センター規程」という。）第8条の定めるところにより、京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）に置かれる内部組織に関し、必要な事項を定めるものとする。

第2条 センター規程第3条の定める管理技術部に、次の室及び部門を置く。

企画情報室

森林フィールド管理部門

里域フィールド管理部門

水域フィールド管理部門

第3条 センターに、森林、里域、海域の各ステーションを置く。

2 ステーションに別表の施設を置く。

第4条 第2条第1項の企画情報室及び前条第2項の施設に室長及び施設長を置き、本学の教授、助教授又は講師をもって充てる。

2 室長及び施設長は、センター長の命を受け、当該室及び施設の業務を総括する。

3 室長及び施設長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 室長及び施設長は、センター長が任命する。

附 則

1 この内規は、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

別表（第3条第2項関係）

ステーション名	施 設 名		所 在 地
森 林	芦 生 研 究 林		京都府北桑田郡美山町
	北 海 道 研 究 林	[標茶区]	北海道川上郡標茶町
		[白糠区]	北海道白糠郡白糠町
	和 歌 山 研 究 林		和歌山県有田郡清水町
里 域	上 賀 茂 試 験 地		京都市北区
	徳 山 試 験 地		周南市
	北 白 川 試 験 地		京都市左京区
	紀伊大島実験所		和歌山県西牟婁郡串本町
海 域	舞鶴水産実験所		舞鶴市
	瀬戸臨海実験所		和歌山県西牟婁郡白浜町

京都大学フィールド科学教育研究センター協議員会から京都大学フィールド科学教育研究センター教授会に付託又は委任する審議事項に関する申し合せ

(平成15年4月23日決定)

京都大学フィールド科学教育研究センター協議員会は、次に掲げる事項の審議を京都大学フィールド科学教育研究センター教授会に付託又は委任する。

(付託する事項)

1. センター長候補者の推薦に関する事項
2. 教員（教授・助教授・講師）候補者の推薦に関する事項
3. 組織改編に関する重要な事項

(委任する事項)

1. 教員（助手）の人事に関する事項
2. 規程その他重要な内規の制定改廃に関する事項
3. 予算に関する事項
4. 教員の兼業に関する事項
5. 外部資金等の受入れに関する事項
6. その他管理運営に係る重要な事項

京都大学フィールド科学教育研究センター教授会内規

(平成15年4月23日制定)

- 第1条 この内規は、京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の教授会に関し、必要な事項を定めるものとする。
- 第2条 教授会は、センターの専任教授で組織する。
- 2 教授会は、必要に応じその議を経て、前項に規定する以外の者に教授会への出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。
- 第3条 教授会は、次の各号に掲げる事項を審議する。
- (1) センター長候補者の推薦に関する事項
 - (2) 教員（教授、助教授、講師）候補者の推薦に関する事項
 - (3) 組織改編に関する重要な事項
 - (4) 教員（助手）の人事に関する事項
 - (5) 規程その他重要な内規の制定改廃に関する事項
 - (6) 予算に関する事項
 - (7) 教員の兼業に関する事項
 - (8) 外部資金等の受入れに関する事項
 - (9) その他管理運営に係る重要な事項
- 第4条 センター長は、教授会を招集し、その議長となる。
- 2 センター長に事故がある場合は、あらかじめセンター長が指名する教授が前項の職務を代行する。
- 3 教授会は、毎月1回開催することを原則とする。ただし、やむを得ない場合は、この限りではない。
- 4 前項のほか、センター長は、特に必要と認める場合又は第2条の構成員2名以上の要求がある場合は、臨時に、教授会を招集するものとする。
- 第5条 センター長は、前条の招集に際しては、緊急やむを得ない場合を除き、教授会開催日の5日前までに、審議する議題を添えて構成員に通知しなければならない。
- 第6条 教授会は、構成員の過半数の出席がなければ、開会できないものとする。
- ただし、海外渡航（私事渡航を除く。）中の者は、構成員の算定から除くものとする。
- 第7条 教授会の議事は、特別の定めのある場合を除き、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長が決する。
- 第8条 教授会に、必要に応じ、委員会を置くことができる。
- 2 委員会の組織・運営その他に関しては、教授会の議を経て、センター長が定める。

第 9 条 教授会の事務は、農学部等事務部総務課において処理する。

第10条 この内規に定めるもののほか、教授会の運営その他に関し必要な事項は、教授会の議を経て、センター長が定める。

附 則

この内規は、平成15年4月23日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター教員会議内規

(平成15年4月23日制定)

第1条 京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）に教員会議を置く。

第2条 教員会議は、センター長及び教授、助教授、講師、助手で構成する。

第3条 教員会議は、次の事項を審議する。

- (1) センターにおける教育・研究の企画、実施及び教育・研究成果に関する事項
- (2) その他センターの運営に関する事項で、センター長が附議することを必要と認めた事項

第4条 センター長は、教員会議を招集し、議長となる。

- 2 議長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名する教授が職務を代行する。
- 3 教員会議は、3ヶ月に1回開催することを原則とする。ただし、やむを得ない場合は、この限りではない。
- 4 前項のほか、センター長は特に必要と認めたとき又は構成員3名以上の要求があったときは、随時招集することができる。

第5条 センター長は、前条の招集に際しては、緊急やむを得ない場合を除き、教員会議開催日の5日前までに、審議する議題を添えて構成員に通知しなければならない。

- 2 構成員は、センター長に対し、議案としたい事項を申し出ることができる。
- 3 前項の申し出は、原則として教員会議開催日の7日前までに行うものとする。

第6条 教員会議は、構成員の過半数が出席しなければ開会することができない。ただし、海外渡航（私事渡航を除く。）中の者は、構成員の算定から除くものとする。

第7条 教員会議の議事は、特別の定めのある場合を除き、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長が決する。

第8条 教員会議に、必要に応じ、委員会を置くことができる。

- 2 委員会の組織・運営その他に関しては、教員会議の議を経て、センター長が定める。

第9条 教員会議の事務は、企画情報室において処理する。

第10条 この内規に定めるもののほか、教員会議の運営その他に関し必要な事項は教員会議の議を経て、センター長が定める。

附 則

この内規は、平成15年4月23日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター 教授、助教授及び講師候補者選考内規

(平成15年4月23日制定)

- 第1条 京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の教授、助教授及び講師候補者選考は、この内規により、協議員会において行う。
- 第2条 教授候補者を選考する必要がある場合、協議員会は教授会に選考の事前審査を行わせるものとする。
- 第3条 教授会は、前条に基づき選考の基本方針を審議し、その都度次の5名からなる教授候補者選考委員会（以下「選考委員会」という。）を置く。
- (1) 教授会の議を経て、センター長が教授会構成員のうちから委嘱した者 3名以上
 - (2) センター長が必要と認めた場合には、教授会の議を経て、教授会構成員以外の本学の専任教員 若干名
- 第4条 選考委員会は、前条の基本方針に基づき、教授候補者として推薦すべき候補者1名を選定し、その候補者について、次の資料を教授会に提出し事前審議を経た後、協議員会に推薦する。
- (1) 選考委員の連署による推薦理由書
 - (2) 履歴書
 - (3) 研究業績一覧
- 第5条 教授候補者の選考に関する協議員会は、構成員の3分の2以上の出席がなければ、開会することができない。ただし、海外渡航（私事渡航を除く）中の者は、構成員の算定から除くものとする。
- 第6条 教授候補者の決定は、出席協議員の4分の3以上の同意がなければ、行うことができない。
- 第7条 助教授、講師候補者の選考決定は、前5条の規定に準じて行うものとする。
- 第8条 この内規は、協議員会において出席協議員の3分の2以上の同意がなければ、改正できない。

附 則

この内規は、平成15年4月23日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター助手選考に関する申し合せ

(平成15年4月23日決定)

1. 京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の助手ポストが空席になった場合、あるいは空席になることが確定した場合、当該助手が配置されている分野担任教授は、後任の助手候補者をセンター長に推薦する。当該分野担任教授が欠けている場合は、センター長が当該分野の所属する部門関連教授と協議して助手候補者を推薦する。
2. センター長は、次の資料を添えて助手候補者を教授会に推薦する。
 - (1) 推薦理由書
 - (2) 履歴書
 - (3) 研究業績一覧
3. 助手候補者の選考に関する教授会は、構成員の3分の2以上の出席がなければ、開会することができない。ただし、海外渡航（私事渡航を除く）中の者は、構成員の算定から除くものとする。
4. 助手候補者の決定は、出席教授の4分の3以上の同意がなければ、行うことができない。

附 則

この申し合せは、平成15年4月23日から施行する。

京都大学フィールド科学教育研究センター 研修員の取扱いに関する内規

(平成15年4月23日制定)

第1条 京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）における研修員の取扱いについては、京都大学研修規程の定めるところによるほか、この内規によるものとする。

第2条 研修員として受入れできる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- 1 博士の学位を有する者
- 2 大学院博士課程において研究指導の認定を受けた者
- 3 教育、研究機関等において、現に教育、研究等の職に従事している者で、大学卒業後5年以上又は大学院修士課程修了後3年以上の者
- 4 その他前各号に準ずる学力があるとセンター長が認めた者

附 則

この内規は、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

京都大学フィールド科学教育研究センター研究生内規

(平成15年4月23日制定)

- 第1条 京都大学フィールド科学教育研究センターにおいて特定事項の研究を志望する者が
あるときは、研究生として入学を許可することがある。
- 第2条 研究生として入学することができる者は、京都大学研究生規程（昭和50年12月9日
達示第37号。以下「規程」という。）第2条によることとし、国費外国人留学生及び
私費外国人留学生を含むものとする。
- 第3条 規程第4条第2項にいう「教授会（またはこれに代わる機関）」は、教授会とする。
- 第4条 研究生の入学は4月1日又は10月1日とする。ただし、特別の事情があるときは、こ
の限りではない。この場合の入学は、原則として毎月1日とする。
- 第5条 研究生の在学期間は、原則として6ヶ月以上1年以内とする。ただし、引き続き研究
の継続のため在学を志望する者には、その願い出により教授会の議を経て、その都
度6ヶ月以上1年以内に限り、在学期間の延長を許可することがある。
- 2 在学期間は、入学を許可された日の属する会計年度の末日までとし、翌年度に係る
期間は延長として取扱う。ただし、外国人留学生については、この限りではない。
- 3 在学期間は、継続して3年を超えることができないものとする。
- 第6条 研究生として入学及び延長を希望する者は、あらかじめ指導を受けようとする教員
の内諾を得るものとする。
- 第7条 出願に際し必要な書類については、別に定める。

附 則

この内規は、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

京都大学フィールド科学教育研究センター外部資金等受入れ内規

(平成15年4月23日制定)

(趣 旨)

第1条 京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）における受託研究、民間等共同研究（研究員のみを含む。）及び奨学寄附金（以下「外部資金等」という。）の受入れに関しては、京都大学受託研究取扱規程、京都大学民間等共同研究取扱規程及び京都大学奨学寄附金委任経理事務取扱規程に定めるもののほか、この内規によるものとする。

(申込み)

第2条 外部資金等を受入れようとする者は、外部資金等の申込者（以下「委託者等」という。）からの所定の様式による申込書を、センター長に提出するものとする。

(受入れ可否の決定)

第3条 センター長は、第2条の提出を受けたときは、教授会に諮ったうえ、外部資金等の受入れの可否を決定するものとする。

2 教授会は、申込みのあった外部資金等が、センターの設置目的に合致し、支障をきたさないものであること並びに委託者等、申込みの趣旨及び条件等について、審査するものとする。

3 センター長は、教授会に諮った外部資金等のうち、総長が受入れを決定するものについては、その受入れを総長に申し出るものとする。

(報 告)

第4条 センター長は、受入れを決定した外部資金等並びに総長に受入れを申し出た外部資金等については、協議員会に報告するものとする。

附 則

この内規は、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

京都大学フィールド科学教育研究センター 営利企業の事業に関与する兼業に関する申し合せ

(平成15年4月23日決定)

京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の専任教員が、営利企業の事業に関与する兼業（以下「営利企業兼業等」という。）を行う場合は、この申し合せによるものとする。

1. 営利企業兼業等は、前以てセンター内の兼業審査会の承認を得るものとする。
2. 営利企業兼業等をしようとする者は、営利企業兼業等開始の2か月前までに基本条件が明記された書類を添付のうえ、文書をもってセンター長に審査願出を行うこと。
3. 営利企業兼業等はその内容が基礎研究、応用研究及び研究開発、技術開発指導の範囲内にあって、次の基本条件に適合しなければならない。
 - (1) 月間報酬の合計額が給与本俸額（月額）を超えないこと。ただし、指定職の者については、指定職発令直前の給与本俸額（月額）を限度とする。
 - (2) 兼業に従事する時間は、1週間1日以内又は1週合計1日相当以内とする。
 - (3) 上記（2）には、一般の兼業を含む。
4. 兼業審査会は、申請者の申し出を基に次の内容を審査する。
 - (1) 本務に支障がないこと。
 - (2) 兼業先企業の性格・目的が公序良俗に反しないこと。
 - (3) 兼業しようとする教員の占めている職と兼業先との間に、利害及び権限に係る関係がなく、かつ、当該教員が法令上の権限を有する公的機関の審議会等の委員に委嘱されていないこと。
 - (4) 兼業内容が、上記3の基本条件に適合していること。
5. 兼業審査会で承認された件は、協議員会に報告する。
6. 兼業審査会は次の職をもって組織する。
 - (1) センター長
 - (2) 専任教授
 - (3) 総務課長

附 則

この申し合せは、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

京都大学フィールド科学教育研究センター利用規程

(平成15年4月23日制定)

(趣旨)

第1条 京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「センター」という。）の利用については、この規程に定めるところにより行い、センターの有効な管理、運営を図ることを目的とする。

(利用範囲)

第2条 センターを利用することができる者は、次の各号のいずれかに該当するものとする。

- (1) センターにおいて学生実習、講義及び研修を行う者
- (2) センターにおいて研究を行う教職員及び大学院生、学生
- (3) その他、各施設長（センターの内部組織に関する内規第4条第1項に規定する施設長をいう。）が適当と認めた者

(利用内容)

第3条 センターは、次の各号に該当する活動を行う場合に利用できる。

- (1) 京都大学及び他大学のカリキュラムに明記された実習・講義等の教育活動
- (2) センター長又は各施設長が適当と認めた研究活動
- (3) センター長又は各施設長が適当と認めた研修、開放事業などの教育活動

(利用申請)

第4条 センターの各施設の利用を希望する者は、各施設で別に定める利用要項に従い、「利用申請書」を各施設長に提出し、許可を得なければならない。

(利用許可)

第5条 利用許可は、各施設長が行う。但し、国有財産に関わる場合の取り扱いについては、別に定める。

(利用許可の取消)

第6条 センター長及び各施設長は、次の各号のいずれかに該当し、センターの運営に支障をきたすと判断される場合は、前条の規定による利用許可を取消し、利用を中止させることができる。

- (1) センターにおいて使用する必要が生じたとき
- (2) 気象災害等により利用に危険が生じたとき
- (3) 利用者が、この規程及び各施設で別に定める利用要項及び利用心得、利用許可条件に違反したとき

- 2 前項による利用許可の取消等によって、利用者に損害を及ぼすことがあっても、センター長及び各施設長はその責任を負わない。

(遵守義務)

第7条 利用者は、各施設で別に定める利用要項及び利用心得等を遵守しなければならない。

(賠償責任)

第8条 利用者が、故意又は重大な過失によりセンターの施設設備及び備品等に損害を与えた場合は、その損害を賠償しなければならない。

(利用の報告)

第9条 センター長又は各施設長は、必要に応じ、利用者に対して利用の内容について報告を求めることができる。

- 2 利用者は、各施設を利用した成果を公表した場合は、各施設長宛への報告を義務とする。

(利用箇所の復旧・回復)

第10条 利用者は、利用終了後直ちに利用箇所を原状に復旧・回復しなければならない。

(責任の所在)

第11条 センターを利用中に生じた事故については、センターは一切その責任を負わない。

(雑 則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センター各施設の利用に関し必要な事項は、センター長及び各施設長が別に定める。

附 則

この規程は、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

京都大学フィールド科学教育研究センター管理技術部組織規程

(平成15年4月23日制定)

(設 置)

第1条 京都大学フィールド科学教育研究センター技術職員の専門的業務を円滑かつ効率的に処理するため、「京都大学教室系技術職員に係る組織要項（平成3年1月22日総長裁定）」に基づき、技術職員に係る組織として京都大学フィールド科学教育研究センター管理技術部を置く。

(組 織)

第2条 管理技術部に、次に掲げる室及び部門並びに班を置く。

	企画情報室
森林フィールド管理部門	芦生研究林管理技術班
	北海道研究林管理技術班
	和歌山研究林管理技術班
里域フィールド管理部門	上賀茂試験地管理技術班
	徳山試験地管理技術班
	北白川試験地管理技術班
	紀伊大島実験所管理技術班
水域フィールド管理部門	舞鶴水産実験所管理技術班
	瀬戸臨海実験所管理技術班

(技術官及び技術官補)

第3条 管理技術部は、技術官及び技術官補をもって構成する。

2 技術官及び技術官補は、技術職員をもって充てる。

(技術部長)

第4条 管理技術部に技術部長を置く。

2 技術部長は、管理技術部を統括する。

3 技術部長は、京都大学フィールド科学教育研究センター長をもって充てる。

(技 術 長)

第5条 第2条に定める部門に技術長を置き、技術官をもって充てる。

2 技術長は、部門の業務を統括整理し、所属する技術職員に対し、技術的な指導・育成等を行う。

(技術班長)

第6条 第2条に定める班に技術班長を置き、技術官をもって充てる。

- 2 技術班長は、班の業務を整理し、極めて高度な専門的知識、技術等に基づく業務を担当すると共に、班に所属する技術職員に対し、技術的な指導・育成等を行う。

(技術主任)

第 7 条 第2条に定める班に技術主任を置き、技術官をもって充てる。

- 2 技術主任は、高度な専門的知識、技術等に基づき業務を処理すると共に、担当する業務に従事する技術職員に対し、技術的な指導・育成等を行う。

附 則

この規程は、平成15年4月23日から施行し、平成15年4月1日から適用する。

フィールド科学教育研究センター職員配置表

平成 16 年 3 月 31 日現在

区 分	教 授	助教授	講 師	助 手	小計	行 (一)		行 (二)	小計	合計	非常勤職員
						事務職員	技術職員	技術職員			
研 究 室	(センター長) 田中 克 大畠 誠一 竹内 典之	田川 正朋 徳地 直子 安藤 信 芝 正己 (柴田昌三)	中島 皇 西村 和雄	中山 耕至 嵩元 道德 坂野上なお 中西 麻美	11					11	黒河七菜子 植田 晶子
事 務 部						(専門員) 岸下 進			1	1	山本みゆき
企画情報室	(企画情報室長) 竹内 典之						○境 慎二郎 △柴田 泰征 橋田理也子		3	3	
図 書 室						青合 薫			1	1	
芦 生 研 究 林		(研究林長) 芝 正己			1	(掛長) 長野 敏 (主任) 登尾まゆみ (主任) 城山 智博	○林 英夫 △大牧 治夫 △紺野 絡 細見 純嗣 大橋 健太 岡部 芳彦 伊藤 雅敏 鬼塚 恵美		11	12	中野 初子 中野はるみ 山口サト子
北 海 道 研 究 林	(研究林長) 竹内 典之					(掛長) 伊藤 真策 (主任) 山下 敦子 田中 隆司	[標茶区] ○中根 勇雄 △長谷川 孝 柳 直文 村尾 佳典 [白糠区] △古本 浩望 △渡邊 康弘 馬渡 和則		10	10	川村由紀枝 谷口多見子
和 歌 山 研 究 林		(研究林長) 徳地 直子		坂野上なお			○藤井 弘明 上西 久哉 浅野 善和 向 昌宏 太田 健一	松場 京子 松場 輝信	7	7	山田 幸三
上 賀 茂 試 験 地	(試験地長) 大畠 誠一			中西 麻美	1		◎光枝 和夫 ○山内 隆之 柳本 順 黒田 真人 中川 智之 荒井 亮		6	7	奥田 綱正 北村伊都子
徳 試 験 山 地			(試験地長) 西村 和雄				△秋田 豊 平井 岳志 大吞 和夫		3	3	近森 道子 藤井美喜子
北 白 川 試 験 地		(試験地長) 安藤 信					◎二村 一男 △佐藤 修一		2	2	奥田 綱正 北村伊都子 木ノ瀬康子
紀 伊 大 島 実 験 所			(実験所長) 山河 重弥	梅本 信也	2		○羽谷 啓造		1	3	
舞 鶴 水 産 実 験 所	(実験所長) 山下 洋	益田 玲爾		上野 正博	3	(主任) 松尾 壽雄	○佐藤 一夫 △志賀 生実		3	6	亀井まり子 西之上昌代 松尾 春美
瀬 戸 臨 海 実 験 所	(実験所長) 白山 義久	久保田 信		大和 茂之 宮崎 勝己 和田 洋 田名瀬英朋	6	(掛長) 小西喜久男 (主任) 谷坂美和子 (主任) 新井 伸一 井上 雅義	○山本 善万 △山本 泰司 △太田 満 △津越 健一	興田喜久男	9	15	興田 道子 杉野 晴美 飯島 実 加藤 哲哉 佐藤 剛毅
合 計	5	6	3	10	24	13	41	3	57	81	

◎技術長 ○技術班長 △技術主任

常設委員会名称及び委員一覧

(平成 15 年 7 月 17 日教授会承認)
○は、委員長

常設委員会名称	委員	備考
将来構想企画委員会	教授 田中 克 教授 大島 誠一 教授 竹内 典之 教授 白山 義久 教授 山下 洋	センターの将来構想全般にわたり中～長期的視点に立って検討を行い、重点的な対外的行事の実施に当たっては、企画委員会並びに実行委員会を設置して具体化を図り対処する。また、海外ステーションの設置、国際共同研究の企画、北大－京大－琉大連携の強化、大型研究プロジェクト立ち上げなどについて検討し、必要な対策を講じる。
総合博物館春季展示企画委員会	○ 教授 竹内 典之 助教授 安藤 信 講師 山河 重弥 助手 益田 玲爾 助手 大和 茂之 助手 中山 耕至	16.5 ～ 8 展示
創設記念式典等企画委員会	○ 教授 白山 義久 助教授 芝 正己 助教授 久保 田信 講師 山河 重弥	15.11.7 (金) 13:00 ～ 20:00 「シンポジウム・式典・祝賀会」
ナラ枯れシンポジウム実行委員会	○ 教授 大島 誠一 講師 中島 皇 (教授 二井 一樹) (助手 山崎 理正)	15.9.27 (土) 13:00 ～ 17:00 (農学研究科) (農学研究科)
教育研究評価委員会	教授 田中 克 教授 大島 誠一 教授 竹内 典之 教授 白山 義久 教授 山下 洋	法人化後の第三者評価にそなえ、自己評価並びに外部評価の在り方を検討し、必要な評価システムの導入を図る。各種の情報収集・整理・蓄積・公表にあたる企画情報室並びに広報委員会の活性化と機能強化を支援する。
広報委員会	○ 教授 竹内 典之 助教授 寄元 道徳 助手 上野 正博 助手 宮崎 勝己 助手 梅本 信也	センター全体並びに各施設の活動を紹介する広報誌の発行、自己点検資料の公表方法その他を検討する。企画情報室との連携の下にセンターニュースの発行に関する企画立案にも携わる。

常設委員会名称	委 員	備 考
施設・設備整備検討委員会	克 田中 義久 誠一 大島 典之 授 授 授 竹内 山下 授 授 授	センター本部・各施設の建物関係の新営・改修、大型設備の導入など中～長期的視点で整備計画を検討する。当面の重点課題については、ワーキンググループを設置してより具体化を進める。
遠隔講義システム等整備 ワーキンググループ	○ 教 授 山下 洋 助教授 芝 正己 助教授 久保田 信 助 手 梅本 信也 助 手 上野 正博	連携（メディアセンター：本部棟新営ワーキンググループ美濃教授・森助教授・波部助手）
本部棟新営ワーキンググループ	○ 教 授 竹内 典之 助教授 柴田 昌三 助教授 久保田 信 助教授 田川 正朋 講 師 山河 重弥 助 手 上野 正博 助 手 中西 麻美	本センター教育研究棟新営
教育プログラム委員会	○ 教 授 山下 洋 助教授 久保田 信 助教授 徳地 直子 助教授 田川 正朋 講 師 山河 重弥	センターが目指す全学共通教育への取り組みについて、理念、提供科目、講義方式、実習の手引きや教科書の作成などについて検討する。また、少人数セミナーや森・里・海連環学の実習等で行うアンケート調査の分析やその結果を改善へ活かす方法についても検討する。この目的の深化と計画の実現化のため、高等教育研究開発推進機構との連携を図る。
研究プログラム委員会	○ 教 授 白山 義久 助教授 徳地 直子 助教授 柴田 昌三 助 手 益田 玲爾 助 手 和田 洋 助 手 梅本 信也	センターが目指す森・里・海連環学に関する多様な規模やレベルでの共同研究の立ち上げを検討し、その具体化を図る。北大ー京大ー琉大連携研究、国研への課題提案、科研費特定領域研究への展望など大型方研究への道すじを検討し、具体化の方策を立てる。そのため企画研究推進部門との十分な連携を図る。
社会連携委員会	○ 教 授 山下 洋 講 師 中島 皇 講 師 西村 和雄 助 手 梅本 信也 助 手 坂野上なお 助 手 田名瀬英朋	定例的な公開講座／市民講座の継続や新設、水族館・資料館等のより効果的な公開化、小・中・高校生教育への支援、その他各地域に根ざした社会連携・社会貢献活動等について、その発展方向や問題点を検討し、提案を行う。特に、予算措置を伴う多様な取り組みへの機敏な対応への準備を進める。
国際交流委員会	○ 教 授 白山 義久 助教授 安藤 信 講 師 山河 重弥 助 手 益田 玲爾	国際共同研究の推進、国際ワークショップ等の開催、外国人学者の招へい、外国人 post-doc の受け入れ、留学生の受け入れなどの推進策を検討する。また、海外ステーションの設置やセンターと協定を締結して、今後の教育研究の発展に寄与することが期待される海外の大学の選定にあたる。

2003年度新聞記事一覧

分類	年	月	日	曜日	掲載面	掲載紙	内容・キーワード等	タイトル	サブタイトル
新聞	2003	3	29	土	朝30	京都新聞	センター長選出	2研究センター長 赤岡教授らを選出	京大
新聞	2003	4	11	金	朝	北海道新聞	北海道研究所林 関連記事	あるあるこんな研究 京都市大北海道道研究所林	森林の生態系や環境 種子拡散の過程も検証
新聞	2003	4	20	火		京都新聞	益田玲蘭助手 関連記事	海中散歩、スライドで紹介	舞鶴水産実験所の益田助手 魚のドラマ語る
新聞	2003	5	14	水	夕10	京都新聞	センター発足及び国際共同研究 関連記事	熱帯雨林の生態系探れ	京大・フィードルの伝統生かし タイと共同研究 本年度から
新聞	2003	7	10	木	夕	京都新聞	京大・上賀茂試験地 関連記事	京都盆地で降雨集中化 京大グループ解明	農地減り高温化、周辺と差 年平均0.26度上昇
新聞	2003	7	25	金		舞鶴市民新聞	益田玲蘭助手 関連記事	素潜りすればマジックの大群	
新聞	2003	8	1	金		舞鶴市民新聞	益田玲蘭助手 関連記事	京都教育大付属鳳高の1年 舞鶴水産実験所でウニの発生観測など	滞在して臨海実習体験
新聞	2003	8	13	水	朝24	読売新聞	瀬戸臨海実験所「研究成果(CO2濃度)」	CO2増加海の動物ピンチ?	京大チーム、実験で確認
新聞	2003	8	21	木	朝	紀伊民報	瀬戸臨海実験所「イルカの骨発見」	「イルカの骨見つけたよ」白浜で自然観察の児童ら	京大臨海実験所「完全な形珍しい」
新聞	2003	8	26	火	朝1	京都新聞	芦生研究林「ナラ枯れ」	ナラ枯れに芦生泣く	京大研究科2年運輸増設 害虫南下で拡大
新聞	2003	8	26	火	朝	紀伊民報	瀬戸臨海実験所「関連記事」	オニヒトデ 白浜でも捕獲	
新聞	2003	8	26	火	朝	紀伊民報	瀬戸臨海実験所「高校生の実習受け入れ」	高校生の実習を初めて受け入れ	
新聞	2003	8	26	火	朝	紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	オニヒトデ白浜でも捕獲	京大瀬戸臨海実験所「驚きの連続」
新聞	2003	8	27	水	夕5	読売新聞	白山義久教授「NaGIS」計画 関連記事	海の生き物を国際調査	日欧米などのチーム 種と生息数を記録
新聞	2003	9	5	金		京大学生新聞	芦生研究林 関連記事	芦生演習林「ナラ枯れ」被害続発	今後の被害拡大懸念 府と共同で対策に出る
新聞	2003	9	5	金	朝27	京都新聞	センターシンポジウム「芦生の森と‘ナラ枯れ’」	「ナラ枯れ」進ませるな	27日に左京でシンポジウム 専門家が現状報告
新聞	2003	9	13	土	朝	紀伊民報	瀬戸臨海実験所 関連記事	「ウミガメのふ化確認」	学生実習 また戻っておいで
新聞	2003	9	26	水	朝4	京都新聞	西村和雄講師 関連記事	異常気象と農作物への対策	多様な在来種活用と土作りを
新聞	2003	9	26	金		紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	台風が運んだ南国のフルーツ1	白浜で発掘調査の3種 京大助教授が見つける
新聞	2003	10	5	日		紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	「不老不死」のベネクラゲ 若返りのサイクルを確認	京大瀬戸臨海実験所・久保田助教授が世界初
新聞	2003	10	12	日	朝26	毎日新聞	芦生研究林「高校生フィールドワーク実習」	森は動植物の宝庫 高校生がフィールドワーク	美山の京都大芦生研究林
新聞	2003	10	31	金	朝29	京都新聞	センター創設記念シンポジウム「21世紀のフィールド科学」	ナラ枯れ被害府北部で深刻	開設記念シンポジウムで討論 京大フィールド研
新聞	2003	11	8	土	朝29	京都新聞	センター創設記念シンポジウム「21世紀のフィールド科学」	山から海まで一体の研究を	90年代以降 決定的防除策なく 京都市域への拡大も懸念
新聞	2003	11	14	金	朝7	紀伊民報	瀬戸臨海実験所「国際ワークショップ (03.11/10～11)」	地球温暖化防止策「CO2海洋隔離」	海洋生物への影響探る 白浜町で国際会議
新聞	2003	11	14	金	朝	紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	条件次第で日本沿岸でも繁殖	世界最大級のエッセンクラゲ
新聞	2003	11	22	土		紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	水中でぐるぐる撮影	全方位カメラ 白浜でテスト
新聞	2003	11	25	火	朝1	紀伊民報	瀬戸臨海実験所「デジタルネットワーク」	九州「人」紀行 黒潮文化研究会代表 梅本信也さん	大島に回遊したい
新聞	2003	12	7	日	朝30	読売新聞 (和歌山版)	梅本信也助手 関連記事	環境保全の大切さ学ぶ	「白浜臨海で水辺環境教室」
新聞	2003	12	9	火	朝	紀伊民報	瀬戸臨海実験所 関連記事	産学連携でセミナー開催 舞鶴商工会議所 19日に	【舞鶴水産実験所参加】
新聞	2003	12	13	金	朝33	日本経済新聞	舞鶴水産実験所 関連記事	産学連携で「お見合い」	19日舞鶴商議所 5教育機関が参加 互いの情報交換
新聞	2003	12	16	火	朝28	朝日新聞	舞鶴水産実験所 関連記事	「海洋の知の宝庫」	
新聞	2004	1	1	木		京都新聞	舞鶴水産実験所 関連記事	なぎさの生物、国際調査	
新聞	2004	1	8	金	夕7	京都新聞	白山義久教授 関連記事	珍魚現る―白浜海岸に漂着―	
新聞	2004	1	14	水		京都新聞	久保田信助教授 関連記事	エコツアーズのスズメ 芦生	足跡が語る見えない世界
新聞	2004	2	5	水	夕3	朝日新聞	芦生研究林 関連記事	ウミガメの死体漂着	田辺・浦内の海岸で
新聞	2004	2	13	金	朝11	紀伊民報	田名瀬英明助手 関連記事	謎多いカミクラゲ漂着	京大助教授 生活史解明に挑む
新聞	2004	2	13	金		紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	コンドククラゲ漂着	
新聞	2004	3	9	火	朝7	紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	水の壁超え珍客	カミクラゲ漂着の田辺湾 海水温変化くっきり
新聞	2004	3	11	木		紀伊民報	久保田信助教授 関連記事	舞鶴湾口にヒョウモンダコ	亜熱帯海域に生息、強い毒を持つ
新聞	2004	3	19	金	夕1	舞鶴市民新聞	舞鶴湾口にヒョウモンダコ	浅海生物の成長CO2増が防げ	京大、実験で確認
新聞	2004	3	22	月	朝22	日本経済新聞	白山義久教授 関連記事		
新聞	2003	6	18	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―1―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―1―	作物と共生、虫や動物も
新聞	2003	7	16	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―2―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―2―	心も耕す畑の作業
新聞	2003	7	30	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―3―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―3―	晴耕雨読 黒板で学び 経験を実感
新聞	2003	8	20	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―4―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―4―	在来種の豆 全国から集め栽培保存
新聞	2003	9	17	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―5―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―5―	卒業栽培 額をふるい、種をまく
新聞	2003	10	15	水	朝7	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―6―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―6―	スベリヒコ 畑作り4年「良い土」の証
新聞	2003	10	19	水	朝7	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―7―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―7―	青らの介添え 作物がバランスを生む
新聞	2003	11	29	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―8―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―8―	サツマイモ畑り 豊かな土に大きな実り
新聞	2003	12	17	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―9―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―9―	大根 双葉のとき決まる実り
新聞	2003	12	31	水	朝7	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―10―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―10―	落花生「葉枯らし」で乾燥さす
新聞	2004	1	21	水	朝6	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―11―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―11―	性格診断 作物が人の心底見抜く
新聞	2004	2	18	水	朝8	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―12―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―12―	農業サロン 自然な「知恵」を講義
新聞	2004	3	17	水	朝13	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―13―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―13―	経験発表 夢語り、知恵を伝える
新聞	2004	3	31	水	朝8	京都新聞	西村和雄講師「実践・省エネ有機農業―14―」	土は生きている 実践・省エネ有機農業―14―	春じたく 種を選び、畝を確認し

新聞	2003	10	21	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」1	「隠された謎がいっぱい」	プロローグ 神秘の海は“生命の母”
新聞	2003	10	28	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」2	「北限の貝も多く」	北浜 (1)
新聞	2003	11	4	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」3	「海は生命のふるさと」	北浜 (2)
新聞	2003	11	11	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」4	「ベニクラゲは人類の遺産」	永遠の命の不思議
新聞	2003	11	18	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」5	「若返りの鍵は (小さな大人)」	ベニクラゲの神秘
新聞	2003	11	25	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」6	「ポリプ田辺海では日本一の共生率」	カイヤドリヒドラクラゲの謎
新聞	2003	12	2	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」7	「小さな大人ミッシング」	コノハクラゲ
新聞	2003	12	9	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」8	「異例の大量漂着―暖冬の背後に地球温暖化―」	青いクラゲ
新聞	2003	12	16	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」9	「今秋、北浜のクラゲにも異変」	大型クラゲ
新聞	2003	12	23	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」10	「エチゼンクラゲ日本来襲」	大型クラゲ
新聞	2004	1	1	木			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」番外編	「SF小説 若返り―奇跡の妙薬ベニクラゲ」	
新聞	2004	1	13	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」11	「時の刻みを感覚器に」	クラゲの年齢
新聞	2004	1	20	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」12	「田辺海はヒドラクラゲの宝庫」	バラエティ豊かな構成員
新聞	2004	1	27	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」13	「夜しばむインキンチャク」	夜勤の水族館調整メモ
新聞	2004	2	3	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」14	「打ち上かる「ガラス細工」」	ヨウラククラゲ
新聞	2004	2	10	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」15	「弱いウシクラゲ類の護身術」	ウシクラゲ類
新聞	2004	2	17	金			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」16	「泳力無くしたクラゲムシ」	海底暮らしのウシクラゲ
新聞	2004	2	24	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」17	「田辺海に謎の大量漂着」	発光するオワンクラゲ
新聞	2004	3	2	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」18	「幻の種64年ぶりに出現」	海と消えたキヨヒメクラゲ
新聞	2004	3	9	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」19	「半世紀で白浜町海岸に8種」	ウシクラゲやイルカの漂着①
新聞	2004	3	16	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」20	「シロナガスクスネ不知へ迷込」	ウシクラゲやイルカの漂着②
新聞	2004	3	23	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」21	「白良浜にコビレゴンドウ」	ウシクラゲやイルカの漂着③
新聞	2004	3	30	火			紀伊民報	久保田信助教授「宝の海から」22	「北浜での漂着と産卵」	ウミガメの未来
新聞	2003	4	25	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」13	コウイカ	イカ墨インクはセピア色の語源
新聞	2003	5	1	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」14	アメフラシ	まさに、欲望の権化！
新聞	2003	6	17	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」15	キヌバリ	海草が茂る海に生きる
新聞	2003	7	25	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」16	イシダイ	学習能力の高い体長5センチ
新聞	2003	8	29	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」17	クロダイ	我々は彼らにとっては敵か餌
新聞	2003	9	26	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」18	ゴンズイ	ダテではない彼らの口ひげ
新聞	2003	10	31	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」19	カタクチイワシ	巨大な群れで大きな魚を威圧
新聞	2003	11	28	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」20	エチゼンクラゲ	1年で直径1メートルにまで成長
新聞	2003	12	26	金			舞鶴市民新聞	益田玲爾助手「若狭湾水中散歩」21	イシガニ	今宵のごちそう獲りしめ
新聞	2003	4	9	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「鉄が海を育てる」	
新聞	2003	4	23	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「海からの贈り物」	
新聞	2003	5	14	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「タコとイカ」	
新聞	2003	5	28	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「盲点がない」	
新聞	2003	6	11	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「なせ川を渡る」	
新聞	2003	6	25	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「コモンスの悲劇」	
新聞	2003	7	9	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「雨」	
新聞	2003	7	24	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「およそ1日」	
新聞	2003	8	7	木			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「生命の母は川？」	
新聞	2003	8	27	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「寒い夏」	
新聞	2003	9	10	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「カタクチの逆襲」	
新聞	2003	9	25	木			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「アカテガニ」	
新聞	2003	10	8	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「烏潮」	
新聞	2003	10	22	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「海を学ぼう」	
新聞	2003	11	12	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「海は大きなゴミ箱」	
新聞	2003	11	27	木			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「河口は大事なフィルター」	
新聞	2003	12	10	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「FRP」	
新聞	2003	12	25	木			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「ゴーストフィッシング」	
新聞	2004	1	15	木			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「海に竹を生かす」	
新聞	2004	1	28	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「ヒト子の真実発生」	
新聞	2004	2	12	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「ナマコはなぜ滅った」	
新聞	2004	2	25	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「誰が殺したヒラメの子」	
新聞	2004	3	10	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「上海ガニ」	
新聞	2004	3	24	水			両丹日日新聞	上野正博助手「日本海に遊ぶ」	「幼形成熟」	

紀要・ 雑誌等	2003	5	—	—	No.734	林業技術	センター発足	コラム 京都大学フィールド科学教育研究センターの発足	
紀要・ 雑誌等	2003	5	28	水	—	文教速報	センター関連記事	京大「フィールド科学教育研究センター」の看板上掲	
紀要・ 雑誌等	2003	6	2	月	No.1730	文教ニュース	センター看板上掲式	京大「フィールド科学教育研究センター」の看板上掲式	
紀要・ 雑誌等	2003	5	—	—	No.31	京大農国際交流ニュースレター	田中センター長執筆記事	身の回りの国際交流 田中 克	
紀要・ 雑誌等	2003	6	—	—	No.580	京大広報	センター看板上掲式	フィールド科学教育研究センター看板上掲式	
紀要・ 雑誌等	2003	6	—	—	No.580	京大広報	芦生研究林公開講座	フィールド科学教育研究センター芦生研究林公開講座	
紀要・ 雑誌等	2003	11	—	—	Autumn 2003 Issue4	京大広報誌「楽友」	センター紹介	フィールド科学教育研究センターの設立	森・里・海の連環機構構想が拓く、新しい科学と価値観の可能性
紀要・ 雑誌等	2003	11	—	—	第4号	京大広報誌「紅萌」	センター職員佐藤一夫技官掲載記事	京都大学をささえる人	佐藤一夫 フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所
紀要・ 雑誌等	2003	11	17	月	No.24	京大生協「教職員情報」	舞鶴水産実験所「施設見学会」	第3回施設見学会 舞鶴水産実験所	益田先生の「魚類心理学」に感激
紀要・ 雑誌等	2003	11	—	—	No.79	Ship&Ocean Newsletter	山下 洋教授執筆記事	森と里と海の連環研究	
紀要・ 雑誌等	2003	12	—	—	No.585	京大広報	センター創設記念行事	部局の動き フィールド科学教育研究センター	創設記念行事挙行

2003年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み

- (1) 2003年4月1日
フィールド科学教育研究センター発足。
- (2) 2003年5月13日
フィールド科学教育研究センター看板上掲式ならびに総長・事務局長との懇談会を実施。
- (3) 2003年7月11日～
1回生（新入生）少人数セミナーを開講。
 - ・ 舞鶴水産実験所「海洋環境と生物資源」7月11～13日
 - ・ 徳山試験地「照葉樹林の構造と維持」7月22～24日
 - ・ 北海道研究林「森林資源学ゼミナール」8月8～14日
 - ・ 芦生研究林「原生的な森林の利用と管理」8月10～13日
 - ・ 紀伊大島実験所、瀬戸臨海実験所(共同)「紀伊半島南部の里域生物相調査」9月22～26日
- (4) 2003年7月31日～8月2日
芦生研究林公開講座「森のしくみと働き－芦生研究林への招待－」を開催。
- (5) 2003年8月4～9日
1－4回生対象 森－里－海連環学実習を開講（芦生研究林－舞鶴水産実験所）。
- (6) 2003年8月7～9日
京都大学 長尾 真総長が北海道研究林を視察ならびに少人数セミナーに参加。
- (7) 2003年8月12日
オープンキャンパスに協力（北白川試験地）。
- (8) 2003年9月13～18日
熱帯域（タイ）におけるモデルフィールド探索調査（第1回）。
- (9) 2003年9月25日
環境省 有明海・八代海総合調査評価委員会ヒアリングに参加し、森里海連環をもとに有明海の再生方向を提言。
- (10) 2003年9月27日
フィールド科学教育研究センターシンポジウム「芦生の森と‘ナラ枯れ’」を開催。
- (11) 2003年10月24日
滋賀県漁業協同組合連合会主催シンポジウム「魚が語る琵琶湖」に参加し、森と川と湖のつながりについて提言。
- (12) 2003年11月7日
フィールド科学教育研究センター創設記念シンポジウム・式典・祝賀会を開催。
- (13) 2003年11月17～20日
熱帯域（タイ）におけるモデルフィールド探索調査（第2回）。

- (14) 2003年11月22日
一般公開自然観察会を開催（上賀茂試験地）。
- (15) 2003年12月8日
北大－京大－琉大連携水圏フィールド科学シンポジウム『森と里と海と生物』を開催（舞鶴水産実験所）。
- (16) 2003年12月11～13日
SEASTAR2000 ワークショップ（バンコク）でセンターが目指す森里海連環学を講演。
- (17) 2003年12月11～12日
東京大学海洋研究所公開シンポジウム「海洋生命系のダイナミクス」で講演。
- (18) 2004年1月19日
フィールド科学教育研究センター講演会『森里海連環学から見た「モデル・フォレスト」』（渡辺 弘之名誉教授講演）を開催。
- (19) 2004年1月29日
フィールド科学教育研究センター 国際ミニシンポジウム
『Coastal management:The role of land processes』（Dr. Gunnar Kullenberg 講演）を開催。
- (20) 2004年2月9日
シップ&オーシャン財団海洋政策研究所ワークショップ「森・川・海・空のパートナーシップ」で講演。
- (21) 2004年2月20～25日
熱帯域（タイ）におけるモデルフィールド探索調査（第3回）。
- (22) 2004年3月2日
フィールド科学教育研究センター 講演会
『熱帯泥炭湿地林の土壌と河川環境』（原口 昭 北九州市立大学国際環境工学部助教授講演）
『Alaskaの温室効果ガス収支研究における現象解析と統合化』（原菌 芳信 アラスカ大学国際北極圏研究センター客員研究員講演）を開催。
- (23) 2004年3月5日
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター公開シンポジウム「フィールド科学への期待」でセンターが目指す森里海連環学を講演。
- (24) 2004年3月7日
市民公開講演会/展示会『京都大学におけるフィールド研究の現状と将来像を求めて』を
京都大学生態学研究センター・大学院地球環境学堂・フィールド科学教育研究センター
共催にて開催。
- (25) 2004年3月15日
フィールド科学教育研究センター 大畠 誠一 教授 最終講義
『「針葉樹の系統発生の地縁展開法則」とマツ属の種分化』を開催。

2003年度 各施設利用許可数一覧

(累計)

施 設 名	許可数	利 用 区 分			所 属 区 分		
		教 育	研 究	その他	京都大学	他 大 学	他機関等
芦 生 研 究 林	116	22	48	46	54	9	53
北 海 道 研 究 林	24	10	12	2	14	3	7
（ 標 茶 区 ）	(17)	(8)	(8)	(1)	(8)	(3)	(6)
（ 白 糠 区 ）	(7)	(2)	(4)	(1)	(6)	0	(1)
和 歌 山 研 究 林	20	1	14	5	10	4	6
上 賀 茂 試 験 地	70	19	47	4	48	11	11
北 白 川 試 験 地	38	6	32	0	38	0	0
徳 山 試 験 地	7	1	4	2	5	1	1
紀伊大島実験所	17	3	12	2	8	3	6
舞鶴水産実験所	360	21	273	66	270	44	46
瀬戸臨海実験所	180	33	127	20	33	68	79
合 計	832	116	569	147	480	143	209

2003年度 人事異動

氏 名 (職 種)	新 官 職 名	旧 官 職 名	異動年月日
佐古和歌子 (技 官)	任期満了	企画情報室	H15. 5. 1
芝 正己 (教 官)	芦生研究林長 (専任)	森林環境情報学分野	H15.10. 1
中島 皇 (教 官)	森林環境情報学分野	芦生研究林長 (専任)	〃
二村 一男 (技 官)	北白川試験地	芦生研究林	H15.10. 1
坂本 勝 (事務官)	辞 職	フィールド担当事務 (第二経理掛)	〃
益田 玲爾 (教 官)	助教授 (舞鶴水産実験所)	助 手 (舞鶴水産実験所)	H15.10.16
大畠 誠一 (教 官)	定年退職	上賀茂試験地長 (兼任)	H16. 3.31

京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第1号

平成16年12月27日 発行

発 行 京都大学フィールド科学教育研究センター
京都市左京区北白川追分町（〒606-8502）

印 刷 ユニバース印刷
京都府長岡京市友岡2-10-2（〒617-0843）

